

昭和四八年三月

大分県文化財調査報告 第二六輯

法鏡寺跡・虚空蔵寺跡

—大分県宇佐市における古代寺院跡の調査—

大分県教育委員会

法鏡寺跡・虚空蔵寺跡

—大分県宇佐市における古代寺院跡の調査—

序 文

全国八幡信仰の総社宇佐神宮を擁する宇佐地方が、九州における古代文化の一方の中心地であったことは、人の知るとおりです。法鏡寺跡、虚空藏寺跡は、ともに古代律令国家の草創期に建立され、神宮とともに、古代宇佐文化の拠点となったところです。古代の寺院は、単に宗教上の施設であったばかりでなく、むしろ現在の大学に比定するべき学問、文化の最高府としての性格をもっていたといわれます。遺跡を訪ねるひとは、かつてこの地に躍動した古代文化の息吹きを、あらためて実感することができるよう。

この貴重な遺跡にも、駅館川大規模圃場整備事業等の開発の波が追ったため、大分県教育委員会では、昭和四五、四六年度にわたって阿遺跡の緊急発掘調査を実施し、寺域を確認し、遺跡の保存のため関係機関との協議をすすめて来しました。その点、阿遺跡とも保存行政が先手を取りつつ事態に処することが出来たことは幸いでした。

学術的にも、正史にあらわれぬこの阿寺院について、本報告書は様々な事実を解明し、古代文化の研究のために、少なからぬ寄与の出来るものと自負しています。

最後に阿遺跡の調査を指導いただいた別府大学 賀川光夫教授、調査から本報告書執筆編集にいたるまで、終始御協力いただいた同大学 小田富士雄助教授 両氏をはじめ、調査に協力いただいた各位に深く謝意を表します。

昭和四八年三月三十一日

大分県教育委員会教育長 山 本 峯 生

例 言

一、本書は大分県教育委員会が昭和四五、四六年度に実施した宇佐市所在の法鏡寺跡と虚空蔵寺跡の発掘調査報告書である。

一、本書の執筆者は小田富士雄、後藤宗俊、真野和夫、清水宗昭、小倉正五である。なお文責は執筆本文末尾に付記してある。

一、遺跡の実測図作成は調査員および調査補助員が当り、その製図と遺物の実測、製図はそれぞれ執筆分担者がおこなった。

一、図版写真の撮影は遺跡関係を小田、遺物関係を真野がおこなった。

一、本書所収の図版、挿図写真のうち、虚空蔵寺跡の昭和一九年度塔跡調査関係、虚空蔵寺の木彫仏については入江英親氏から、また慶応義塾大学の有に帰した場仏については慶応義塾大学から写真の提供を受けた。

一、本書の編集は小田がおこなった。

本文目次

第一章序	脱	1
第1節 遺跡の環境		1
第2節 宇佐古代寺院跡の研究史		3
第二章 法鏡寺跡の調査		9
第1節 調査の経過		9
第2節 金堂地区		13
第3節 塔跡の探索		18
第4節 講堂地区		19
第5節 石塚付近の調査		21
第6節 遺物		21
百済系単弁軒丸瓦……… 瀬園文縁復弁軒丸瓦……… 復弁七葉軒丸瓦……… 復弁六葉軒丸瓦……… 法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦……… 均正唐草文軒平 瓦……… 鬼瓦……… 契斗瓦……… 面戸瓦……… 埴……… 平瓦・丸瓦……… 瓦釘……… ……… 須恵器……… 土師器……… 瓦器……… 弥生式土器……… 石器		21
第7節 考察		52
1、遺跡の復原的考察		52
2、遺物に関する考察		55
3、平瓦・丸瓦の製作技法		60

第三章 虚空藏寺跡の調査

第1節 調査の経過

..... 69

第2節 塔跡

..... 74

第3節 中門・南門地区

..... 78

第4節 北方地区

..... 82

第5節 遺物

..... 85

蓮花文軒丸瓦.....法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦.....新羅系唐草文軒平瓦

.....面戸瓦.....塼.....平瓦・丸瓦.....瓦釘.....鉄鍬.....塼仏.....須恵

器.....土師器.....瓦器.....土鍾.....夜臼式土器.....樋口・銅鏝.....石

器.....

第6節 考察

..... 102

1、遺跡の復原的考察

..... 102

2、遺物に関する考察

..... 107

第四章 総括

..... 111

——宇佐古代寺院の性格——

図 版 目 次

巻首図版 宇佐市駅館川流域の景観と主要遺跡

(宇佐市役所市長公室提供)

図版第一 法鏡寺跡(一) 全 景

図版第二 法鏡寺跡(二) 金堂地区

図版第三 法鏡寺跡(三) 金堂地区

上 基壇北側全景(東方より)

下 基壇北側全景(西方より)

図版第四 法鏡寺跡(四) 金堂地区 基壇北側の瓦出土状態

図版第五 法鏡寺跡(五) 金堂地区

上 西方よりみた瓦の出土状態

下 北方よりみた瓦の出土状態

図版第六 法鏡寺跡(六) 金堂地区

上 中央部瓦出土状態

下 埴出土状態

図版第七 法鏡寺跡(七) 金堂地区

上 複弁六葉軒丸瓦出土状態

下 単弁八葉(左) 複弁六葉(右) 軒丸瓦出土状態

図版第八 法鏡寺跡(八) 金堂地区

上 Iトレンチ版築状態(金堂北側)

中 Iトレンチ版築状態(金堂南側)

下 Vトレンチ版築状態(金堂東側)

図版第九 法鏡寺跡(九) 金堂地区

図版第一〇 法鏡寺跡(一〇) 金堂地区

図版第一一 法鏡寺跡(一一) 塔跡の探索

上 東北より

下 基壇西北部地覆石

図版第一二 法鏡寺跡(一二) 塔跡の探索

右 Vトレンチ(東方より)

左 Vトレンチ(西方より)

図版第一三 法鏡寺跡(一三) 講堂地区

右 XIトレンチ(西方より)

左 XIIトレンチ(東方より)

図版第一四 法鏡寺跡(一四) 講堂地区

上 礎石全景

下 礎石と根締め石

図版第一五 法鏡寺跡(一五) 石塚

上 南西より

下 VIIトレンチ(北方より)

図版第一六 虚空藏寺跡(一) 遠景

上 南方より望む

下 塔基壇跡(西南方より)

図版第一七 虚空藏寺跡(二) 塔跡全景

虚空藏寺跡(三) 塔跡心礎

図版第一八 虚空藏寺跡(四) 塔跡

右 夜臼式土器出土状態

左 VIIトレンチ

図版第一〇 虚空藏寺跡(五) 中門地区

右 VIIトレンチ北側部分

左 VIIトレンチ軒丸瓦出土状態

図版第二

虚空蔵寺跡(六) 中門地区

上 竈口出土状態

下 軒丸瓦・軒平瓦出土状態

図版第三

虚空蔵寺跡(七) 南門地区

右 VII トレンチ南側部分(北方より)

左 同 梁石除去後の溝

図版第三

虚空蔵寺跡(八) 南門地区

上 VII トレンチ南側部分(南方より)

下 VII トレンチ南端の溝

図版第二

虚空蔵寺跡(九) 南門地区

上 IX トレンチ全景(北方より)

下 同 南端の溝

図版第二

虚空蔵寺跡(一〇) 北方地区全景

上 北方より望む

下 西方より望む

図版第二

虚空蔵寺跡(一一) 北方地区

上 I トレンチ溝および石組(北方より)

下 同 (東方より)

図版第二

虚空蔵寺跡(一二) 北方地区

右 II トレンチ(南方より)

左 I トレンチ(南方より)

図版第二

虚空蔵寺跡(一三) 現存する仏像群と礎石

上 虚空蔵寺に現存する仏像群

下 金堂跡礎石(佐藤晃和氏邸内)

図版第二

遺物(一) 軒丸瓦 法鏡寺跡

図版第三

遺物(二) 軒丸瓦 法鏡寺跡

図版第三

遺物(三) 軒丸瓦 法鏡寺跡

図版第三

遺物(四) 軒平瓦・鬼瓦・平瓦 法鏡寺跡

図版第三

遺物(五) 契斗瓦 法鏡寺跡

図版第三

遺物(六) 面戸瓦 法鏡寺跡(1・3)・虚空蔵寺跡(2)

図版第三

遺物(七) 丸瓦 法鏡寺跡

図版第三

遺物(八) 平瓦(格子目文・平行線文・かき目文) 法鏡寺跡

図版第三

遺物(九) 平瓦(縄目叩文) 法鏡寺跡

図版第三

遺物(一〇) 埴仏 虚空蔵寺跡

図版第三

遺物(一一) 軒丸瓦 虚空蔵寺跡

図版第四

遺物(一二) 軒平瓦 虚空蔵寺跡

図版第四

遺物(一三) 軒平瓦・軒丸瓦 虚空蔵寺跡

図版第四

遺物(一四) 平瓦・丸瓦 虚空蔵寺跡

図版第四

遺物(一五) 平瓦・丸瓦 法鏡寺跡・虚空蔵寺跡

図版第四

遺物(一六) 瓦釘埴・埴口 虚空蔵寺跡(15・20)

図版第四

造瓦資料(一) 法鏡寺跡

図版第四

1 粘土輪模

図版第四

2 粘土重ね目痕・側縁切り割り(格子目VI・類平瓦)

図版第四

3 側縁切り割り・布合せ痕・模骨露呈(格子目VI・類丸瓦)

図版第四

造瓦資料(二) 模骨・連綴痕・布の重ね目

図版第四

造瓦資料(三) 模骨・連綴痕・粘土輪模

図版第四

造瓦資料(四) 布の縫目痕

図版第四

造瓦資料(五) 布の重ね痕

図版第五

造瓦資料(六) 布の縫目痕・縄目痕 虚空蔵寺跡

挿 図 目 次

第1図	宇佐付近地形図(國土地理院五万分一「宇佐」分載)(小倉正五作成)……………22	第14図	同……………(小田拓)……………23
第2図	昭和二九年調査時の虚空蔵寺塔跡全景……………5	第15図	法鏡寺跡出土瓦当実測図……………(小田・後藤宗俊・清水・小倉測図)……………24
第3図	法鏡寺跡付近地籍図……………(真野和夫作成)……………11	第16図	法鏡寺跡出土鬼瓦実測図……………(清水測・図)……………29
第4図	法鏡寺跡金堂地区発掘風景(小田富士雄撮影)……………12	第17図	法鏡寺跡出土瓦実測図及び拓影……………(小倉測・図・拓)……………30
第5図	法鏡寺跡付近地形実測図……………(真野・小倉・弥栄久志・宮崎正文測・真野図)……………12	第18図	同……………(小倉測・図・拓)……………31
第6図	法鏡寺跡発掘区全体略図……………(真野作成)……………13	第19図	同……………(小倉測・図・拓)……………32
第7図	法鏡寺跡金堂地区土層実測図(1)……………(司場紀知・江本直測・真野図)……………14	第20図	法鏡寺跡出土南戸瓦実測図……………(後藤測・図)……………35
第8図	法鏡寺跡金堂地区……………(司場・江本測・清水宗昭図)……………15	第21図	法鏡寺発見瓦の叩文様・布目拓影集成(小田拓)……………37
第9図	法鏡寺跡金堂地区遺物出土状態実測図……………(清水・弥栄・宮崎・山手誠治測・清水図)……………16	第22図	法鏡寺跡発見瓦の叩文様・布目及び不明陰刻拓影……………(小田拓)……………38
第10図	法鏡寺跡金堂地区遺構実測図……………(清水・小倉・弥栄・宮崎測・清水図)……………17	第23図	法鏡寺跡出土平瓦・丸瓦実測図……………(小田・真野測・真野図)……………40
第11図	法鏡寺跡Ⅱトレンチ(金堂西側)土層実測図……………(引場・江本測・清水図)……………18	第24図	法鏡寺跡出土瓦釘実測図……………(真野測・図)……………44
第12図	法鏡寺跡講堂地区……………(13トレンチ)遺構実測図……………(弥栄・宮崎測・小山図)……………20	第25図	法鏡寺跡出土須惠器実測図及び拓影……………(真野測・図)……………46
第13図	法鏡寺跡出土瓦当文様拓影……………(小田拓)……………22	第26図	法鏡寺跡出土土師器及び瓦器実測図……………(清水測図)……………48
		第27図	法鏡寺跡出土弥生式土器実測図……………(後藤測・図)……………49
		第28図	法鏡寺跡出土石器実測図……………(清水測・図)……………52
		第29図	法鏡寺伽藍復原想定図……………(小田作成)……………54
		第30図	法鏡寺伽藍復原想定図……………(小田作成)……………55

第31圖 九州地方発見法隆寺系忍冬唐草文集成図……

第32圖 法鏡寺跡発見同心円印文平瓦拓影（小田作成）……………56

第33圖 虚空蔵寺跡付近地繪図……（真野作成）……………68

第34圖 虚空蔵寺跡付近地形実測図……（岩尾松美・長野雅臣・
後藤・清水・小倉測・後藤図）……………72

第35圖 虚空蔵寺跡付近地形実測図……（真野・網田克美・真野図）……………73

第36圖 虚空蔵寺跡（Ⅶトレンチ）土層実測図……
……………74

第37圖 虚空蔵寺塔心礎及び四天王礎石実測図……
……………75

第38圖 虚空蔵寺跡Ⅶ・Ⅸトレンチ平面実測図……
……………77

第39圖 虚空蔵寺跡Ⅶ・Ⅸトレンチ土層実測図……
……………79

第40圖 虚空蔵寺跡北方地区各トレンチ土層実測図……
……………80

第41圖 虚空蔵寺・中門・南門跡地区瓦当文様拓影……
……………83

第42圖 虚空蔵寺・塔跡及び遺跡周辺採集瓦当文様拓影……
……………86

第43圖 虚空蔵寺跡出土瓦当断面実測図……
……………87

（後藤・真野・小倉測図）……………88

第44圖 虚空蔵寺跡出土面戸瓦実測図……（後藤測・図）……………92

第45圖 虚空蔵寺跡発見瓦の印文様・布目拓影集成図……
……………93

第46圖 虚空蔵寺跡出土平瓦・丸瓦実測図……（真野測・図）……………94

第47圖 虚空蔵寺跡出土瓦釘及び鉄鉄実測図……
……………95

第48圖 虚空蔵寺跡出土土器実測図……
……………97

第49圖 虚空蔵寺跡出土夜白式土器実測図……（後藤測・図）……………99

第50圖 虚空蔵寺跡出土土器口実測図……（後藤測・図）……………100

第51圖 虚空蔵寺跡出土土器実測図……（清水測・図）……………102

第52圖 虚空蔵寺跡金堂礎石実測図……
……………103

第53圖 昭和二九年虚空蔵寺塔跡南側基壇の発掘状況……
……………104

第54圖 虚空蔵寺跡伽藍復原想定図……（小田作成）……………105

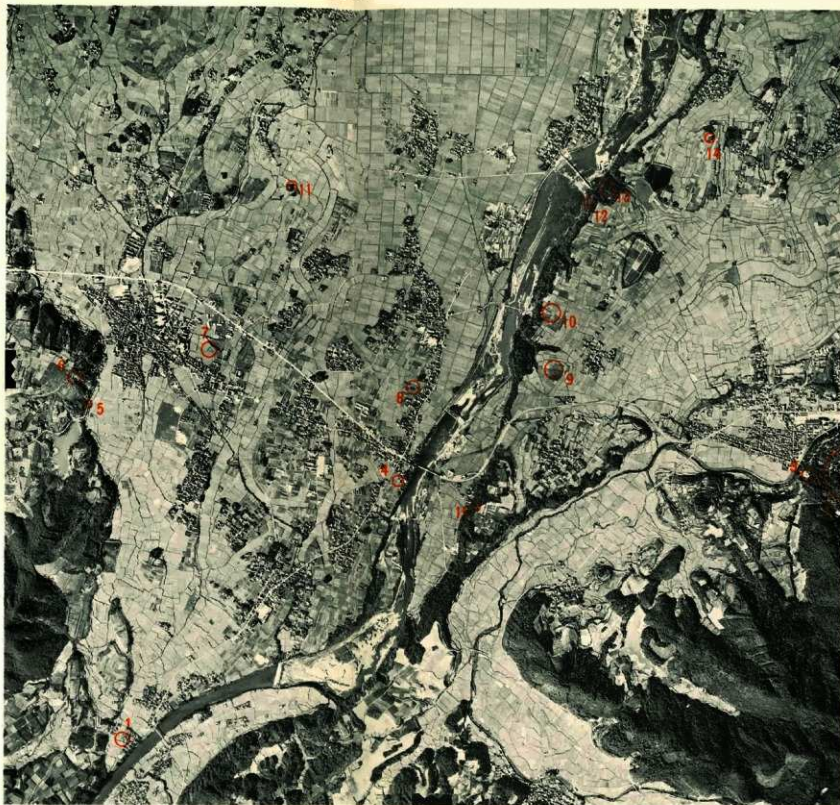
第55圖 虚空蔵寺跡伽藍・寺城復原想定図……（小田作成）……………106

第56圖 昭和二九年虚空蔵寺跡調査における遺物出土状態……
……………108

第57圖 虚空蔵寺跡出土埴土・鬼瓦（慶応大学蔵）……………109

慶応大学提供・小田撮影……………109

1. 虚空蔵寺跡
2. 宇佐神宮
3. 赤穂寺跡
4. 洲府遺跡
5. 国日市城穴群
6. 合ノ原遺跡
7. 瓦 塚
8. 法鏡寺跡
9. 高川遺跡
10. 東上日遺跡
11. 葛原古墳
12. 免ヶ平古墳
13. 海口山古墳
14. 赤塚古墳
15. 立稻荷古墳



第一章 序 説

第1節 遺跡の環境 (巻首図版・第1図)

法藏寺跡、虚空藏寺跡の所在する宇佐平野は、九州東北地域の国東半島西側基部に位置し、瀬戸内海最西部周防灘に面している。宇佐平野背後に発達する山地、丘陵地は、この地域に広く分布する更新世期の耶馬溪層群によって構成されており、平野のほぼ中央を、九州有数の河川である駅館川が北流する。右岸には山麓から河口に至るまで宇佐台地と称する洪積世台地が発達しており、左岸には本河川によって涵養された四日市平野と称する広大な沖積地がひろげている。この沖積地は、西側を宇佐台地と対峙する四日市台地によってさえぎられており、南北に長い地形をなす。この宇佐台地より四日市台地までを含めた駅館川流域は、宇佐市内でも最も主要な遺跡の集中する地域である。

この地域における弥生時代以前の遺跡としては、主要なものほとんどない。わずかに今回の虚空藏寺跡発掘の際、その遺構下層中より縄文時代晩期終末の夜臼式土器の破片若干を検出した。また駅館川中流のこの一帯で比較的古いタイプの石器が散在しており、今後遺跡の発見が期待される地域である。

弥生時代の主な遺跡は、ほぼ国道10号線に沿って台地・平地に存在する。東方に四日市平野、および市街地を見下す位置にある台ノ原遺跡は、弥生時代前期終末より中期終末までを主とした大規模な集落跡であり、近年の調査によって、住居跡群にともなう貯蔵穴群や粟稻、石棺、土槨墓を有する墓地群が発見された。また台ノ原遺跡より東方に見える宇佐台地の駅館川沿いには、東上田遺跡とよばれる前期終末より中期の貝塚を含む遺跡が存在した。この遺跡もその規模からして、台ノ原遺跡に劣らぬ大集落跡であることが予想されていたが、工場建設に際して貝塚の一部を調査するにとどまった。東上田遺跡より見下す沖積平野には、今日一〇メー

トルの等高線が走っておりこの附近に当時の海岸線を推定することができる。この東上田遺跡より約二〇〇メートルほど東南の微高地は、高居遺跡とよばれ弥生時代後期前半の土器群を含む住居跡が検出された。駅館川中流域の自然堤防上には、弥生後期の安国寺式土器を標式とする別府遺跡が存在する。

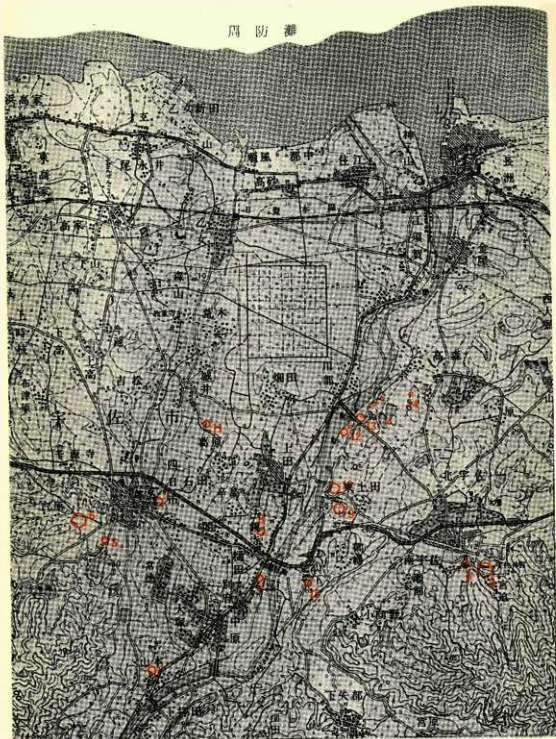
このように弥生時代の前期末(前二世紀)より後期(三世紀)にかけて、遺跡は駅館川中流域に集中したが、次の古墳時代になると駅館川右岸の宇佐台地は、この地方の豪族が埋葬された高塚古墳の多くが造営されている。別府遺跡の対岸台地には、古墳発生前の方形墳である古稱荷古墳が存在する。次の四世紀に入ると高森、川部地域に前方後円墳が集中してくる。五面の三角縁神獸鏡を出土した全長五〇メートルの赤塚古墳、二面の三角縁神獸鏡と石剣、玉類を壜穴式石室に副葬していた免ヶ平古墳は四世紀代に属し、五世紀に下つては全長八十メートルと最大の規模をもつ春日山古墳等がある。この後につづいて周濠をもつ車坂古墳や横穴式石室をもつ鶴見一号墳が位置付けられよう。台ノ原一帯には後期群集墳の存在が知られたが、すでに消滅し、台地周縁の急傾斜部には、同心円文等の装飾をもつ、四日市横穴古墳群が存在する。

四〇五世紀の主要古墳のほとんどが、高森、川部の台地上に存在する中で、四日市平野の中央部にみられる直径約五〇メートルの葛原古墳は、内部の石室構造が壜穴式より横穴式に移行する中間形態であると考えられる古墳である。その封土には埴輪列が並び、また墳丘を周濠が囲み、一説に帆立貝式といわれる大規模な古墳である。

六世紀以降大陸、半島よりわが国に仏教が伝播されると古墳造営は次第に行われなくなり、それに代って仏教寺院が建立されはじめる。

宇佐地方においては、白鳳期に法鏡寺、虚空藏寺の二寺院が、駅館川の左岸流域平坦部において造営される。虚空藏寺跡は駅館川が山峡部から沖積地に展開する谷口部の北西岸段丘上に、法鏡寺跡は虚空藏寺跡から駅館川を北へ下ること約二・五キロの西岸自然堤防上に立地する。また、法鏡寺跡の西方約一・五キロ離れた四日市市街地のはずれにあたる通称瓦塚遺跡において、平瓦や丸瓦に

周防灘



1: 50,000

1000 2000 3000 4000

第1図 宇佐駅・宇佐川流域の主要遺跡 (国土地理院 5万分の1「宇佐」分載)

- | | | | | |
|----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1. 虚空蔵寺跡 | 2. 宇佐神宮 | 3. 弥勒寺跡 | 4. 別府遺跡 | 5. 四日市横穴群 |
| 6. 台ノ原遺跡 | 7. 夏 塚 | 8. 法興寺跡 | 9. 高層遺跡 | 10. 東上州遺跡 |
| 11. 葛原古墳 | 12. 免ヶ平古墳 | 13. 春日山古墳 | 14. 赤塚古墳 | 15. 古稲荷古墳 |

混って白鳳期の法隆寺系軒平瓦が若干発見されている。しかしその性格は明らかでない。

これら白鳳時代寺院の建立につづいて、奈良時代になると宇佐神宮境内に弥勒神宮寺が建立されるに至って仏教文化はさらに隆盛をきわめるようになるのである。

(小倉正五)

第2節 宇佐古代寺院跡の研究史

宇佐地方がわが国古代史上に占める位置の大きいことはすでに明らかなことである。先史時代における東西交渉を物語る諸遺跡、大和朝廷統一期における宇佐地方の諸古墳遺跡、また歴史時代につづいての宇佐神宮の活動と朝野の尊崇をあつめた事実など重要な興味深い地域である。

この地域に多い古寺に関する記録は宇佐神宮とならんで少くはないが、本稿で対象とする七・八世紀に建立された初期寺院に関する把握すべき記録や研究となると著しく少い。「太宰管内志」や「豊前志」によって近世にまで法燈を伝えている実状がうかがわれるが、それも有為転変を経た後世に場所をかえて復興されたものの記録であり、とうてい創建当初にまでさかのぼることはできない。まして遺跡などについて期待することはできないところである。

今日知られている八世紀代までに建立された寺院跡は次の三箇所である。

法鏡寺跡 宇佐市法鏡寺

虚空蔵寺跡 宇佐市山本

弥勒寺跡 宇佐市南宇佐・宇佐神宮境内

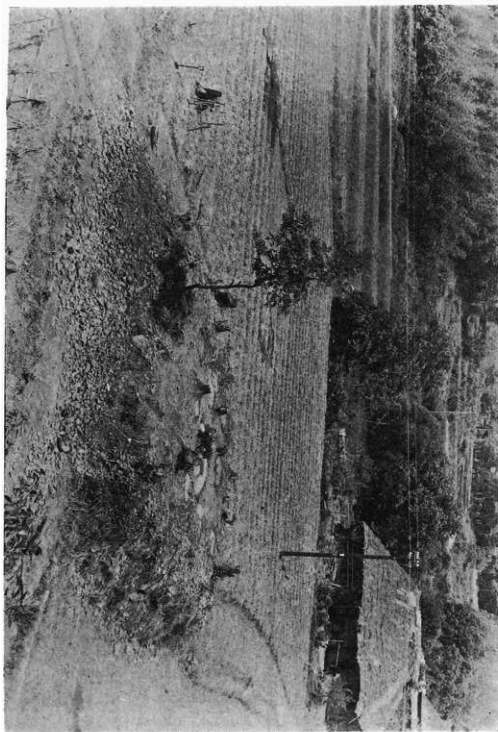
また古くから古瓦を出土して廃寺に擬せられているものに、

があるが、これは未だ寺院跡と断定する確証はあがっていない。これらの初期寺院跡に関する研究は先ず大正時代における古瓦研究からはじまった。

大正四年以来、故中山平次郎博士は太宰府地方を中心に古瓦研究をすすめて考古学雑誌上に発表をつづけていたが、大正九年には地元の北幸一氏所蔵の法鏡寺跡採集古瓦を学界に紹介するところがあった。⁽¹⁾ つづいて昭和初年になると雄山閣から西期的な考古学講座の発刊があり、故園野貞博士の古瓦に関するものが発表されたが、各地の拡大な撮影が収録されて今日なお資料集としての意義を失わない。このなかには法鏡寺跡、弥勒寺跡の資料が紹介されている。たゞし時代比定などの点ではその後の研究の進展によって、今日では若干の訂正を要することとなった。

昭和六年には地元で小野精一氏の『大宇佐郡史論』が刊行され、ここにはじめて今日知られている寺院跡や瓦塚の紹介があった。昭和十一年には石田茂作博士が全国的にすすめていた飛鳥時代寺院跡の踏査、研究を公刊したが、九州地方では法鏡寺跡と筑前・武蔵寺（塔ノ原廃寺）が収録された。⁽²⁾ また同年には故河野清實氏によって大分県下にある主要なる古瓦が紹介され、法鏡寺や弥勒寺のものが収録された。⁽³⁾ このうち第二次大戦が終了する昭和二〇年代まで宇佐地方の寺院跡に関する研究は進展がみられなかった。それでも地元では故北幸一氏、故渡辺四郎氏、中尾青樹氏らの古瓦蒐集がつづけられていた。

昭和二十九年には石田茂作博士指導のもとに賀川光夫、入江英親、小田富士雄らが参加して虚空蔵寺塔跡の発掘調査が行われた。この調査は大分県下における本格的な寺院跡調査の嚆矢となったが、畿内寺院と同様の増仏が発見されてにわかに注目されることとなった。⁽⁴⁾ また宇佐八幡宮の研究をすすめていた中野橋能氏も虚空蔵寺について文献史料の上から考察するところがあったが、これは後世の虚空蔵寺に関する記録に掲げているので七・八世紀代の寺院について言及するにはやや無理があった。しかしその後さらに文献史料を整理して考察を重ね宇佐八幡宮、弥勒寺を含めて八幡信仰に関する歴史をまとめられた。⁽⁵⁾



第2図 昭和29年調査時の虚空蔵寺塔跡全景

昭和二九年には大分県教育委員会主催による弥勒寺跡の調査がはじめられ、賀川光夫、入江英親、小田富士雄らがあたり、以来昭和三五年まで六回にわたる発掘調査が実施されることとなった。この間、大分県教育委員会の依頼をうけて賀川光夫氏は昭和三〇年に法鏡寺跡の基礎的調査を行って小試掘を行ったが、遺構についての手がかりはつかめなかった。弥勒寺跡の発掘は当時、県教育委員会主催によって六年にもわたる一遺跡の継続調査は創期的なことであったが、またそれにおとらめ新知見の検出で、まれに見る保存のよい遺跡であった。弥勒寺跡の調査と併行して賀川光夫氏や小田らによる宇佐の古代寺院や瓦に関する考古学的研究はにわかに活況を呈することとなったが、また文献史料の集成もおこなわれた。さらに弥勒寺跡の調査で重要なことは、豊富な記録と出土古瓦を照合することによって古瓦の年代を決めうることである。これによって古瓦欄干に確固たる拠所を与えることができたことは、九州地方の古瓦研究に創期的なでき事であった。かくして昭和三十六年に弥勒寺跡の調査報告が発刊された。これらの成果をまとめて賀川光夫氏はその後大分県の仏教遺跡を通観している。¹²⁾

弥勒寺跡の調査終了後、宇佐地方の古代寺院に関する調査、研究はさしたる進展をみなかった。この間地元蒐集家の渡辺四郎氏物故し、中尾青樹氏も不治の病に臥すこととなって所蔵する虚空藏寺跡の古瓦は一括して慶応義塾大学文学部の所有に帰して散逸をまねがれたのは不幸中の幸いであった。また古代寺院跡の調査も組織的、かつ長期的になり、調査方法も精緻になってきた。各地での寺院跡調査が盛んになり古瓦資料も増加の一途をたどるようになった。昭和四三年、奈良国立博物館では、全国的に飛鳥・白鳳時代の古瓦を集めて展覧を行ったが、やがてその成果は大冊にまとめられて刊行された。¹³⁾このなかに法鏡寺跡、虚空藏寺跡の古瓦も収録されて改めて識者の関心を高めた。

昭和四五年から宇佐地方は農地の大規模圃場整備事業が計画されて、宇佐平野は全面的に改変されることとなった。整然たる古代の条里遺構は埋滅し去り、やがて農地内にある古代寺院跡にも危機は迫ってきた。そこでこれに先立って旧寺跡の範囲を確かめ、それに基づいて遺跡の保存措置を構するための緊急調査が急を要することとなった。大分県教育委員会では昭和四五年度に法鏡寺跡の

昭和四六年度に虚空藏寺跡の調査を行って応急対策を施したのであるが、調査の動機から予算額も小さく、また土地所有者の方々の関心も低いために十分な調査を遂げることはできなかった。両寺跡調査の概要はすでに公刊したところであるが、これを機会に十分な学術調査を行うべき必要を痛感している。文化財行政における調査は必要にせまられて最小限の措置を構することで当座をきりぬけることが多い昨今の実状をみるにつけても、手おくれにならないように、また将来大事に至らないうちに根本的な保存のための本格調査を切に望んで止まない。今回の調査は寺跡のごく一部を調査した予察の域を出ないものであることを関係当局は明記すべきであらう。

(小田富士雄)

註 (1) 中山平次郎「考古学雑誌三」考古学雑誌一一卷三号 大正九年

(2) 関野貞「瓦」考古学講座 昭和三年

(3) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」昭和十一年

(4) 河野清實「大分県内の古瓦」大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第一三輯 昭和十一年

(5) 賀川光夫「虚空藏寺址発見地」大分県地方史一 昭和二十九年

(6) 文化財保護委員会編「埋蔵文化財要覧」一三二～四頁 昭和三四年

(7) 中野幡能「宇佐仏教と虚空藏寺」宇佐史研究一二六号 昭和三〇年

(8) 中野幡能「八幡信仰史の研究」昭和四二年

(9) 賀川光夫「考古学上より見た上代の宇佐地方」大分県文化財調査報告書第五輯 昭和三二年

賀川光夫「宇佐彌勒寺に関する二、三の問題」別府大学紀要第七輯 昭和三二年

小田富士雄「九州に於ける大率府系古瓦の展開(一～四)」九州考古学一・二・五・六・十三 昭和三二～三六年

小田富士雄「宇佐弥勒神宮寺成立の背景」九州史学六 昭和三二年

小田富士雄「九州に於ける法隆寺系古瓦の展開」九州考古学三・四 昭和三三年

- 小田富士雅「上代に於ける大宰府と豊前」九州史学10 昭和三十三年
- 小田富士雄編「弥勒寺伽藍関係資料」大分県文化財調査報告書第七輯 昭和三十六年
- 小田富士雄「宇佐弥勒寺所藏相承考」大和文化研究8-6 昭和三十八年
- 久多雄木儀一郎「弥勒寺史料」大分県文化財調査報告書第五輯 昭和三二年
- 賀川光夫・入江英親・小田富士雄「弥勒寺遺跡」大分県文化財調査報告書第七輯 昭和三十六年
- 賀川光夫「考古資料」大分県史料20 昭和三十六年
- 賀川光夫「大分県の考古学」昭和四十六年
- 奈良国立博物館編「飛鳥白鳳の古瓦」昭和四五年
- 大分県教育委員会編「法鏡寺伽藍跡発掘調査概報」昭和四十六年
- 同 「虚空蔵寺伽藍跡発掘調査概報」昭和四十七年

第二章 法鏡寺跡の調査

第1節 調査の経過

法鏡寺跡の調査を実施するにいたった動機は、宇佐平野全体の農地に及ぼされようとしている大規模圃場整備事業によって、平野部にあるすべての遺跡が壊滅しようとしている緊急事態に対処することであった。したがって遺跡の保存状況を確かめると共に、遺跡の保存に必要な範囲をきめる資料を作成するために、大分県教育委員会主催のもとに行われた。

〔調査期日〕 昭和四十六年三月一〇～二四日

〔調査団の構成〕

調査員

賀川 光夫 (別府大学文学部教授・県文化財専門委員)

入江 英頼 (県文化財専門委員・県教育庁文化室嘱託)

小田 富士雄 (九州大学文学部助手)

橘 昌信 (別府大学文学部講師)

岩尾 松美 (別府大学文学部嘱託)

後藤 正二 (県教育庁社会教育課)

岸原 富士男 (宇佐市教育委員会)

長野 雅臣 (同 右)

調査補助員

真野 和夫 (九州大学文学部大学院学生)

山手 誠治 (同 右)

弓場 紀知 (同 右)

清水 宗明 (別府大学文学部学生)

小倉 正五 (同 右)

中村 幸史郎 (同 右)

弥栄 久志 (同 右)

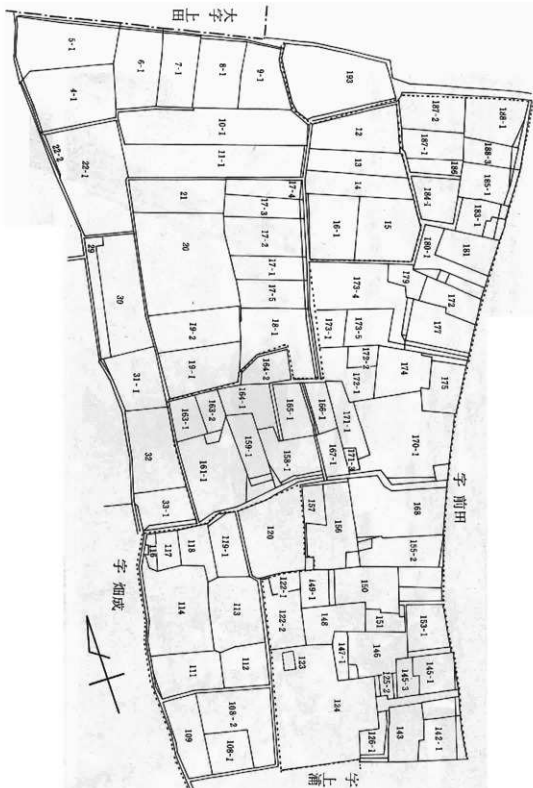
江本 直 (同 右)

宮崎 正文 (同 右)

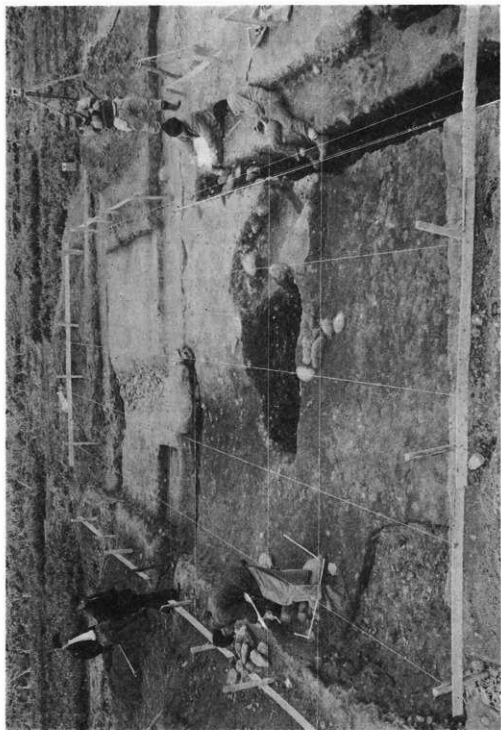
牧野 吉秀 (同 右)

このほか角田隆文(杵築高校)、田原昭憲(臼杵高校)、岩本仁蔵、吉武俊弘(大野高校)諸氏の参加があった。また調査中、梅原末治(京都大学文学部名誉教授)、鏡山猛(九州大学文学部教授)、江坂輝弥(慶応大学文学部助教)諸学者の来訪があった。発掘調査は推定金堂跡のあたりに東西及び南北のトレンチを入れることから着手し、遺構の存在を確認してからこの地区を広く発掘して遺構のほぼ四分の一くらいを調査することができた。つづいて塔跡の探索、さらに講堂跡の確認と調査を及ぼしてゆき、石塚地区にもトレンチを設けて年来遺跡であろうと予想されていた疑問を解決した。さらに寺域全体に調査を及ぼすことを希望したが、経費面と労働力に無理があり、またこの地域が畑地であるために土地所有者の同意を容易に得ることができず、断念せざるをえなかった。今回の調査では伽藍中心部の発掘に終始したが、保存に関する資料は十分に得られたと考えられる。さらに十分な学術調査が将来に期待されるところである。

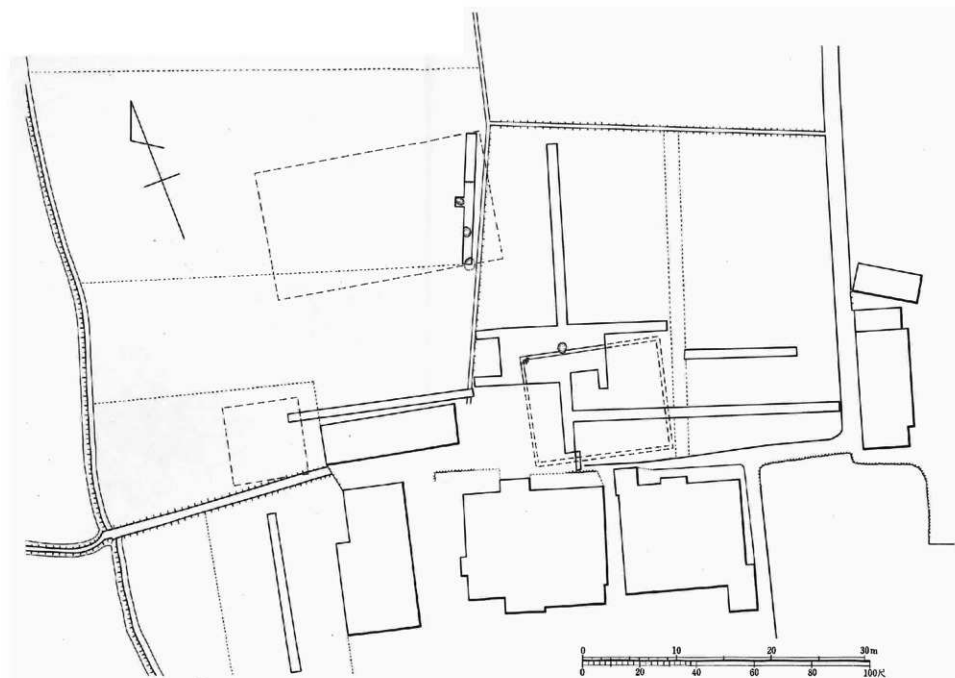
(小田富士雄)



第3図 法鏡寺跡付近地籍圖(字佐市大字法鏡寺)(約1200分の1)



第4图 法鏡寺跡金堂地区実測調査風景



第5圖 法鏡寺附近地形實測圖

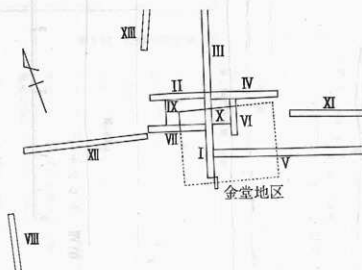
第2節 金堂地区

調査はトレンチ発掘によって進められた。地籍図一八・一六四番地の畑地に、幅1m・南北長33m、東西長210mの直交するトレンチを設定した。十字に交又するこの二本のトレンチは、南側をIトレンチ(13・5m)、西側をIIトレンチ(8・5m)、北側をIIIトレンチ(19m)、東側をIVトレンチ(20・5m)として扱った。

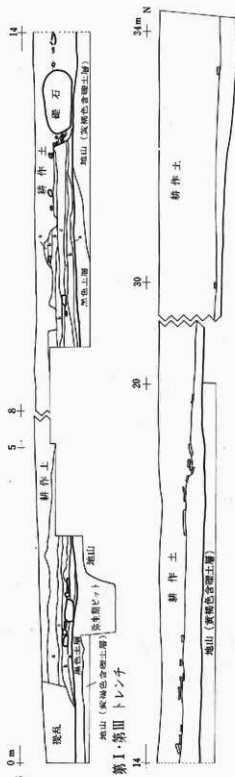
表土層を除去した段階で、Iトレンチ北側において多くの瓦礫とともに直径約1mの未調整安山岩の礎石一個が発見された。しかしそのすぐ南において、黄色土と黒色土の互層よりなる厚さ約30cmの版築の北端が発見されたため、この礎石が基礎より遊離したものであることが明らかになった。

Iトレンチの北側において基礎の北端部が発見されたため、この基礎の範囲がこれより南域に広がっていることが明らかになり、検証のためにIトレンチと並行、あるいは直角方向に四本のトレンチを新設した。

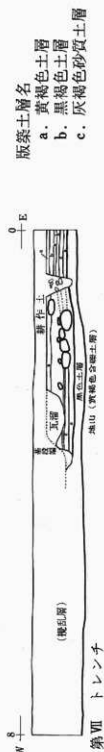
まず版築の東端を検出するためのIトレンチの南側より東方に、長さ8mのVトレンチを設定した。版築は、このトレンチの一〇・四m東側まで伸びた地点で、幅50cmの礫を含む溝に接していた。表土層は東行するに従って厚くなっているため、溝に接する部分では3cmしか遺存していなか



第6図 法鏡寺跡発掘区全体略図

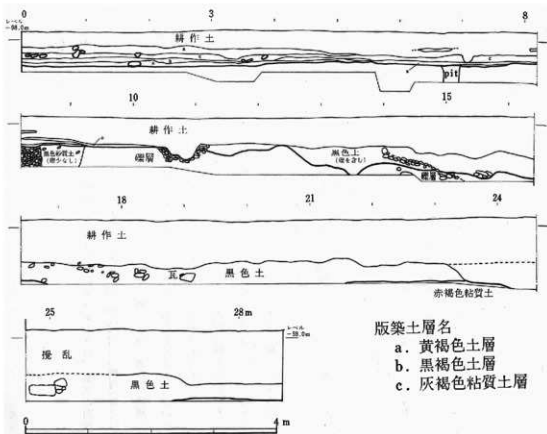


第I・第III
トレンチ



第VII
トレンチ

第7図 法藏寺跡金堂地区トレンチ土層実測図 (I)



第8図 法鏡寺跡金堂地区 (Vトレンチ) 土層実測図(2)

った。また、この溝を狭んで東側には、礫を含む黒色土層が地盤の上に堆積していたが、西側ではこれが無く、わずかに地盤に掘込まれたビット内に弥生式土器の破片を含んで発見された。このことから、版築が行われる際の整地作業によって、黒色土層が削除されたことが考えられた。

Iトレンチで発見された基壇の外周は、礎石を基壇上より引きおろした際に攪乱を受けており、明らかではなかった。このため長さ7mのVIトレンチをIトレンチの東側に並行して設定した。版築はIトレンチと同様で、礫を含む黄褐色土層の地盤の上に約二〇cmの黒色土層があって、さらにその上に造られていた。基壇端の遺存状態は良好であり、人為的に積まれた幅八〇cmの礫群に接していた。これはその位置関係からVトレンチの溝状の遺構と関係あるもの

と考えられた。

II トレンチの南側に並行して設定した長さ九mのVII トレンチは、基壇の西端を検出するためのものであった。版築は、約二〇cmの黑色土層の上に在って、I トレンチと接する部分から西へ三、六m伸びていた。それより更に西には後世の瓦溜による擾乱があった。端部の正確な位置は判明しなかったが、わずかに幅三〇cmの溝状の遺構が発見されたため、この周辺に推定された。なおこの版築中には、直径二〇cm〜三〇cmの大形の礫が多く含まれる部分が在ったため根柢石の可能性も注意されたが、周囲に掘込み等の痕跡が見られないことから、版築の際に築き込まれたものと理解された。

基壇の北端を検出したI トレンチの南側においてその南部が探索されたが、版築はさらに南に伸びていた。このためI トレンチより南方にさらに幅〇・五m、長さ二mの拡張区を設定した。しかし、このトレンチにおいては、版築が擾乱層によって切られていたため、端部の正確な位置は不明であった。ただこの版築と擾乱層の接する部分の地表面は、擾乱層側に段落ち状態になっており、基壇の端はこれより遠く離れていないものと推定された。

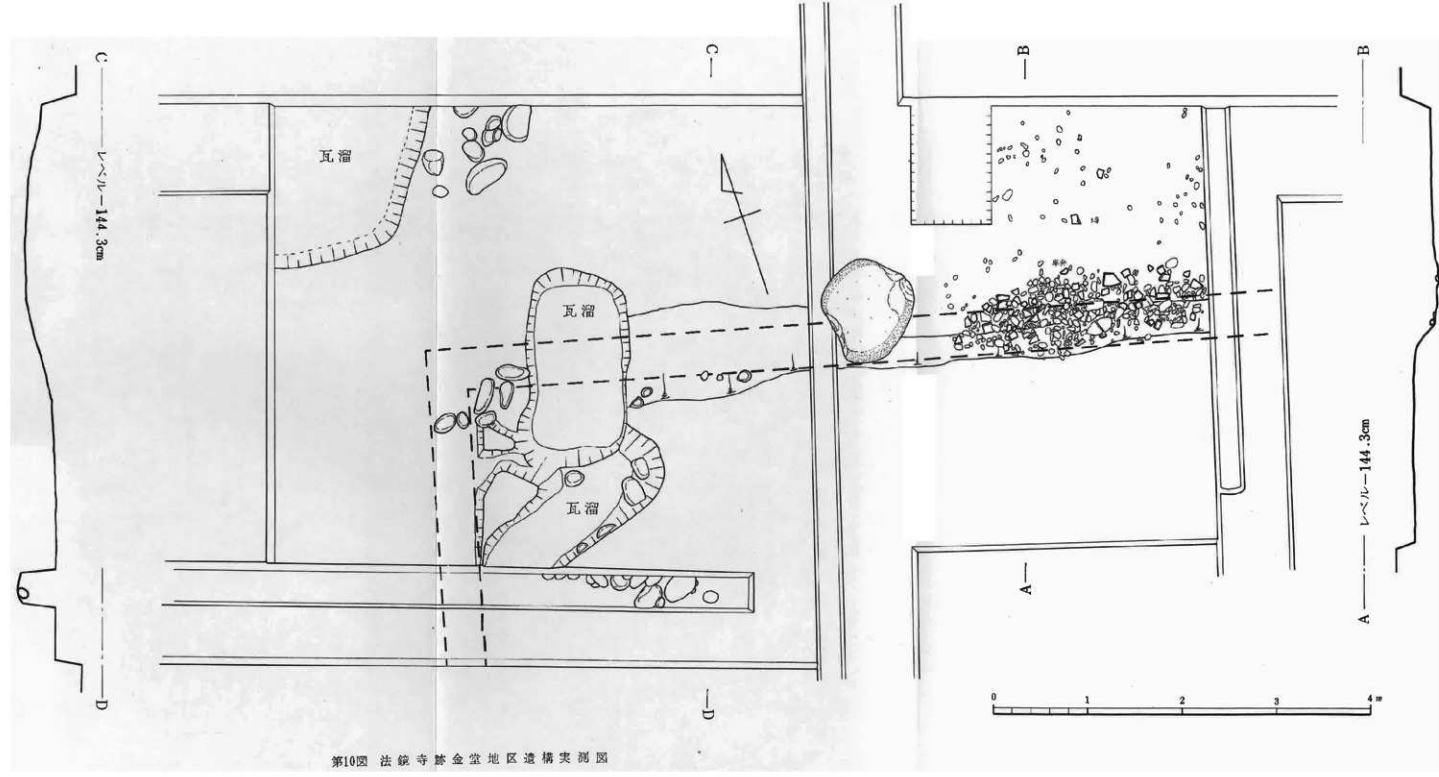
以上の各トレンチによって検出された基壇の規模は、南北約一一m（三六・三尺）、東西一四・六m（四八・二尺）となり、このような規模の建物としては金堂に比定するのが妥当と考えられるに至った。

一方、基壇の平面的観察、及び遺物の出土状態を観察する作業も進められた。I トレンチ、II トレンチ、VII トレンチで囲まれた部分に、東西六m、南北四mのIX区を拡張し、それに隣接するI トレンチ・IV トレンチ・VI トレンチで囲まれた部分にX区を拡張した。これによって基壇の北西部とその外周を露出することができた。

X区においては、VI トレンチにおいて検出された基壇端の隙群が、雨落ちの溝状に西方に伸びていた。先のVII トレンチ、V トレンチにおいて検出された溝状の遺構と合わせて考えると、金堂基壇の端部に沿って、雨落ちに相当する部分にこのような溝のめぐる状態が考察された。しかしIX区においては、遺物の堆積が厚く、又擾乱も著しいためX区に連なる遺構は検出できなかった。わずかに、



第9図 法鏡寺 隆金堂地区遺物出土状態実測図



金堂基壇の西北端に相当する部分に、版築土を挟んだ大形の礎石が遺存していたため、これよりⅩ区、Ⅶトレンチの基壇端に向け推定線を引くことができた。

金堂地区のうち遺物の最も多く出土したのは、Ⅸ、Ⅹ区等の基壇北側沿い一帯であった。とくに、Ⅸ区の北東部とⅡトレンチには、復原可能なものを含む平瓦が二列に重なった状態で出土し、その周辺においても各種の貴重な遺物が発見された。Ⅸ区の西側は醜腐の堆積や瓦溜による攪乱があつて、必ずしも良好な遺物の出土状態ではなかったが、ⅦトレンチとⅨトレンチの接する部分で完形に近い二重弧文縁の軒丸瓦や複弁七葉等の軒先瓦が多く出土した。

Ⅹ区を中心とした地区では、Ⅸ区ほどの遺物の密度は無く、平瓦、丸瓦に混つてわずかに軒丸瓦・軒平瓦の破片や埴の破片が出土する程度であつた。

この金堂西北地区より出土した主要遺物を示すと左記のようになる。

複弁六葉軒丸瓦、複弁七葉軒丸瓦、素縁卑弁八葉軒丸瓦、一重圓縁卑弁八葉軒丸瓦、二重圓縁卑弁八葉軒丸瓦、法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦、唐草文軒平瓦、埴、契斗瓦、瓦釘

Ⅸ・Ⅹ区を中心とした地区以外では、特徴的な遺物は発見されていない。

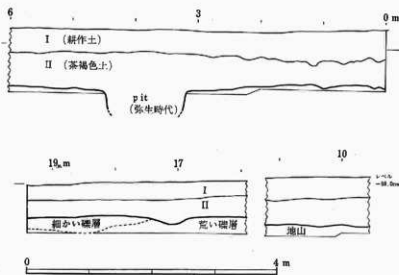
地盤上の黒土層内には、弥生土器を中心に須恵器・土師器が含まれている。Ⅰトレンチ・Ⅰトレンチ拡張区・Ⅴトレンチにおいて地盤にピット等の遺構が確認された。これは板付Ⅱ式や下城式の土器片を伴っており、出土遺物から、弥生時代前期末の遺構があつたことを示している。

(小倉正五)

第3節 塔跡の探索

遺跡の中央において検出された遺構が金堂基壇であることがほぼ明らかになって、この金堂跡を中心にした堂塔の位置が問題となった。先ず、発掘作業にあたって法隆寺式、法起寺式、四天王寺式の三種の伽藍配置が推定された。このうち、主要堂塔が縦置する四天王寺式については、Ⅲトレンチにおいて遺物は包含層が北行するほどに下行しており、遺構らしきものの微証は確認できなかった。そこで金堂の東に塔を配する法起寺式が検討された。このためⅤトレンチを東方に一五m延長するとともに、その北側に一m×一二mのⅪトレンチを並行して設定した。しかしこの二本のトレンチも東行するに従って地盤が下っており、遺構らしきものを検出することはできなかった。

最後に、西に塔・東に金堂の配置をなす法隆寺式配置を確認すべく、金堂基壇より五、五mの距離をおいて、東西に二〇m・幅一mのⅫトレンチを設定した。表上層と地山の間には約二〇cm～三〇cmの茶褐色土層があり、この中にわずかに瓦の破片が散在していた以外には、版築等の遺構は発見されなかった。



第11図 法鏡寺跡Ⅻトレンチ（金堂西側）土層実測図

しかし、トレンチの西側半分では、地盤が高くなっており、またその両端部附近には礫の堆積があるので、後世に地ならしの行われたことも考えられる。さらにこのトレンチを西に延長する必要を感じたが、畑作物の關係上、断念せざるを得なかった。

(小倉正五)

第4節 講堂地区

推定金堂地区の調査、つづいて塔跡の探索を行い、西に塔、東に金堂の配置を想定しうる公算が強くなったので、両者の中間北方にあたる二〇番地の桑畑に一四mの南北トレンチを設定した。もし以上の想定が正しいならば、このあたりには講堂跡の存在が考えられるからである。

このトレンチにおける地山は著しく低く、表土下の黒褐色土は厚い。トレンチの南端で地表下四〇cmにして礫石にあたり、さらにその北方でも礫石があらわれた。この方は六〇cmとやや深い。ともに黒褐色土(Ⅱ層)を掘り回めて礫石を掘えている。両礫石の中心距離は三・三m(一〇尺)である。そこでこの方向と距離を北に延長してみるとトレンチの西側にはずれるが、ボーリング調査によつて地下五〇cmのところに礫石が確認されたのでこれを発掘した。この三個の礫石列はN一〇・五度Eの方向をとり、三・三m等間である。またこの状況からみてこの区域には他の礫石群も保存されている可能性はきわめて高いことが予想されるにいたった。しかし今回はこれ以上発掘区の拡張を行うことが予算的に望めないところから、將來に期さざるを得なかった。

新発見の礫石は周囲を栗石や焼け瓦片でかためてあり同一レベルを延長したトレンチ内にも瓦片の散布がみられる。またこのレベル以下にも黒褐色土が続いているので、この遺構は火災などによる再建の遺構であることが考えられる。そこでトレンチの西半分を掘り下げてみると、地表下一・二～一・三mで黒色土層(V層)に達し、これ以下には古瓦が含まれておらないことがたしかめられ

た。おそらくこの層の上面が第一次遺構の床面を構成するものであろう。かくして礎石群をともなう遺構は第二次遺構であることが確認され、この礎石も第一次建立に使用したものを再利用したであろうと考えられるにいたった。

ここでも格子目や縄目を叩きだした平瓦、丸瓦などが発見され、単弁軒丸瓦や複弁七葉軒丸瓦なども発見されたが、注目すべきは虚空藏寺跡の創建に使用されている面違銅模文縁板弁七葉軒丸瓦一点の発見があったことである。法鏡寺跡の既往の古瓦にはなかった新資料であって、本寺跡の創建を考える上に重要な資料となろう。

(小田富士雄)

第5節 石塚付近の調査

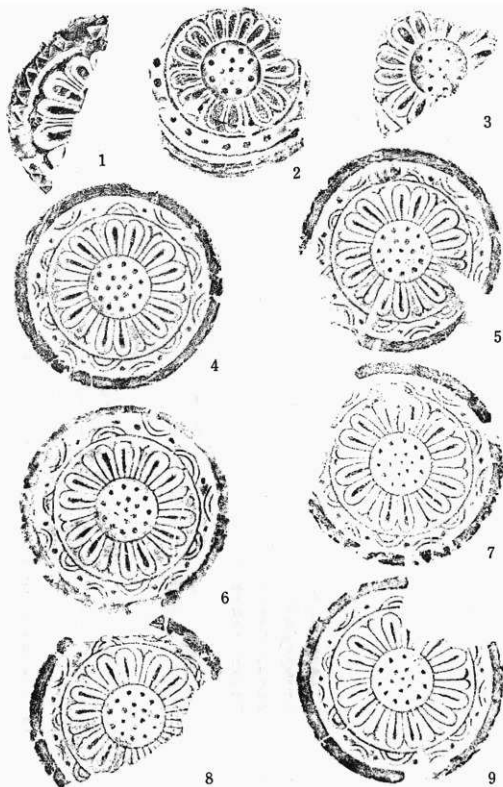
一六二番地(石塚)及びその北接畑地(一六三番地)に一九〇の南北トレンチを設けて発掘を試みた。石塚は掘開してみると陳を集積した文字通り石を積み重ねた塚であった。五輪塔の部分品なども含まれていて、おそらく近世頃にこの付近畑地に多い陳を集積した場所であろうと考えられる。畑地におけるトレンチ内には耕作土下に陳や瓦をあつめてつきたりしたような状況があらわれたが、これを掘り下げてみると、その下部から近代陶磁器片が発見され古代遺構の存在する可能性はないと判断された。

(小田富士雄)

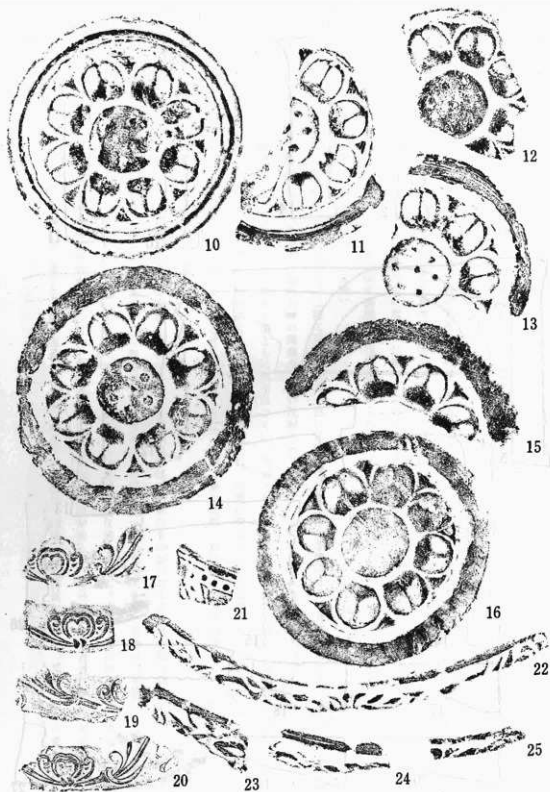
第6節 遺物

百濟系単弁軒丸瓦(圖版第三一・第14圖)

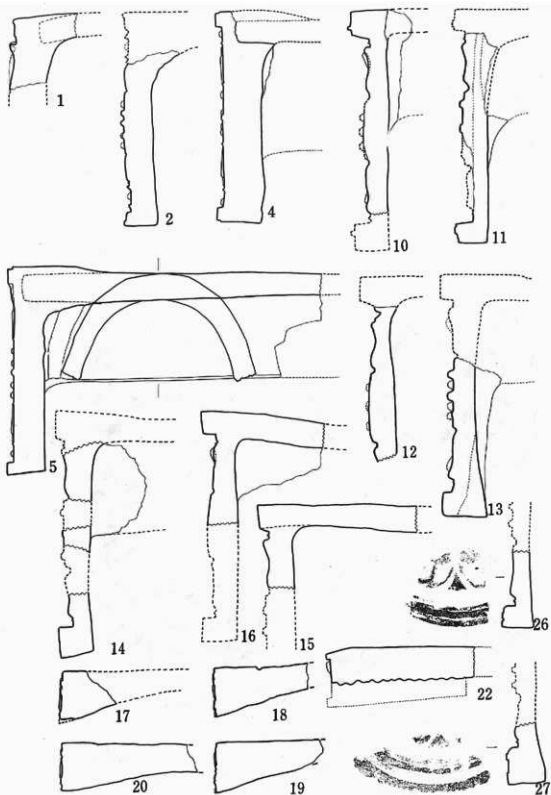
単弁軒丸瓦は、周縁の裝飾によって三種に分類することができる。法鏡寺跡では、これまで素文のものしか知られていなかったが、⁽¹⁾



第13圖 法興寺跡出土瓦当文様拓影(1/3大)



第14图 法鏡寺跡出土瓦当文様拓影口(大)



第15图 法镜寺出土瓦当实测图 (1/4大)

今回の調査によって、一重圓、二重圓をもつ周縁の存在が確認された。

A 單弁軒丸瓦 I類 (一重圓)

10・11は一重圓の周縁をもつが、兩者のあいだには、圓縁の形に差違がみられる。前者は圓縁の幅が細く、肉厚である。後者は幅広で、突出が小さい。素文のものにくらべ、内区はやや肉厚の感をうけ、花卉は八葉で全体が丸く、反転もみられる。中房の蓮子は、磨滅が著しく、日も半分しか残っていない。色調は、全体に淡黄灰色、淡黄褐色を呈す。瓦当面の裏側は、指などでによる調整がみられ、10・11ともに内区と外区の間には製作時の接合面がみられる。ともに金堂北西部出土。

B 單弁軒丸瓦 II類 (二重圓)

二重圓のものも圓縁の形によって、二種に分けられる。26は重圓の間に約九^{mm}の間隔をもち、外帯の幅は約八^{mm}、内帯は約五^{mm}と差違がみられる。27は内外ともに幅約五^{mm}の圓縁が、細い沈線で区切られている。いずれも圓縁の突出はひくい。ともに破片であるが、残存部からみて、内区の花弁、楔形小葉ともに突出はひくい。兩者ともに表面黒褐色を呈し、焼成は温度が高く硬質である。周縁内側の隅は、指などでによる調整で断面が丸くなっている。ともあれ、重圓の突出が小さく意図的な二重圓とは判断しがたく、外帯が陰陽逆になる一重圓亜流とするのが妥当と考えられなくもない。26は金堂北部、27は重トレンチの出土。

C 單弁軒丸瓦 III類 (素文)

單弁軒丸瓦の中で、周縁素文のものが最も類例が多い。瓦当面の径は、完形のものが多く正確には測りがたいが、一八・五—一九・五^{cm}の変動幅がみられるようである。この数値は他の複弁軒丸瓦の径に比べてかなり大きい。花卉は12を除いては、磨滅が加わってか肉厚がうすく、反転も目立たない。また大きさもやや不ぞろいで、稚拙な感をうける。楔形小葉はほぼ三角形を呈し、花卉にくらべて肉厚で、その先端は中房まで達しない。花卉の外側に接して細い圓縁が廻るが、部分によってとぎれがちである。中房の径は、平均して約五・五^{cm}、中心蓮子を六個の蓮子(1+6)が対称的に囲む。13は比較的磨滅が少なく、花卉、楔形小葉が肉厚で、

反転もみられ、蓮子の突起もつよい。瓦当面周縁の裏側はとくに粘土を重ねて厚くしてあり、他の素文の周縁の一・五倍の厚さを示す。色調は12の淡灰色を除いては、淡赤褐、淡黄灰色を呈す。単弁軒丸瓦を通して、造瓦技術の上から興味深いことは内区、外区と個別に造られて接合された痕跡が観察され、いずれもその部分において剥落が目立つことである。また16は凹面に布目が残り、しかも約1cm幅の平行した、模骨組板と推定される汗痕がみられる。12・15は金堂北部および西部出土、16は講堂跡出土。

いずれにせよ、単弁軒丸瓦は、文様が稚拙ながら重厚な感を受け、造瓦技術をみても、複弁軒丸瓦と明らかに基本的に異なるものである。

(清水宗昭)

注 (1) 小田富士雄「日清系単弁軒丸瓦考」史蹟第九五輯 昭和四一年

編織文縁複弁軒丸瓦 (第13図)

復原されるころ複弁七葉となろう。この類は虚空蔵寺跡において、蓮華文軒丸瓦第Ⅱ類として抽出されたものである (第41図参照)。

即ち蓮弁は全体に平面的、かつ粗放な造形で、弁全体を縁どる輪郭の線は造形上の空白のような印象をうける。周縁は面縁編織文を配する。原色を呈するきわめて堅緻な焼成である。瓦当面復原径一五・五cmを測る。

(後藤宗俊)

複弁七葉軒丸瓦 (第13図2・3)

周縁断面がわずかに傾斜するが、總じて平面的な瓦当面である。

中房は弁区とのあいだに、わずかに段をなすが圓縁は持たない。蓮子は1・4+8の配列であり、その配列に西縁的な規格をうかがうことが出来る。

蓮弁はきわめて平面的である。その配置もやや恣意的なところがあり、一弁だけはゆがみを生じている。蓮弁間の楔形小葉は形式化が著しい。珠文の配列は任意である。中房径五 cm、中房、弁背、周縁（珠文をふくむ）の径比は一：二：一となる。瓦当面径は一七 cm を復原しうる。

2 は IV 区 II 層・3 は IX 区 II 層の出土である。

（後藤宗俊）

複弁六葉軒丸瓦（図版第二九・第13図）

金堂地区において最も多い瓦当である。完形に近いものもいくつかある。淡黄色から暗灰色を呈するもので、瓦当径一六・四 cm、厚さ二・五～三 cm を測る。瓦当面は平板で、周縁は瓦当面より五 mm ほど高く、巾一 cm の平縁がめぐっている。内区は中房に1+6+11の配列をなす一八顆の蓮子を配し、複弁六葉の蓮弁がめぐっている。蓮弁の配置は厳正な分割を欠き、蓮弁間も広いために小葉を配しても全体として迫力を失っている。この瓦当文を特異な存在にしているのは外区を飾る文様にある。すなわち外行及び内行する二重弧文を交互に各々六個あてめぐらし、その間に珠文一個を配している。弧文の大きさも大小あり、厳密な規格性を失っている。このような瓦当文様はこれまでに類品の出土例を知らない。金堂の最終段階に使用された厩瓦であり、平安時代まで下るであろう。

なお、丸瓦の装着されて完形となる一例があり、その全長は三四 cm、末端に狹まって行基瓦の特徴を示している（第23図5）。瓦当面との接合は、外側に粘土を重ね貼りし、あらう彫削りとなでつけの痕跡をのこしている。丸瓦の凸面には第II類縄目叩きが全面に加えられている。

（小田富士雄）

法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦（図版第三二・第14図17・21）

当地方出土の法隆寺系忍冬唐草文の軒平瓦については、小田富士雄氏によってその分類、編年がなされている（第31図参照）。

I類(17、20) 今回の調査において、軒瓦は多種、多量の出土をみたが、軒平瓦については類例が少なく、ほとんど法隆寺系忍冬唐草文に限られる。17、20は、中心飾を主とした瓦当面の破片である。志は二重のハート形につくり、心飾の結びが左を向いた二つの三角形をなしている。さらに無縁で断面の薄いことから、I式に類することは明らかである。17、19は金堂西北部出土、20は8レンチ出土。

その他(21) I類以外では、周縁部左上の隅に二重隅に挟まれた珠文を有する破片が一点出土している。法鏡寺跡では、以前から法隆寺系軒平瓦が採集されており、その中にI式以外にV式、Ⅱ式の出土が知られている。この破片はそいづれかに属すると考えられる。金堂西北部出土。

(小倉正五)

均正唐草文軒平瓦(図版第三二・第14図22、25)

赤褐色を呈するもので、左右巾を寛存するもので二重隅を測る。出土量は非常に少ないが、金堂跡に使用されており、いずれも瓦当面の下半分を欠いている。製作時における接合が十分でなかったと思われる、文様の全体を知ることができない。それでも中心花文飾りがあり、左右に唐草をのばす均正唐草文であったことがわかる。唐草文は短く切られて形骸化しており迫力はない。周縁は素文である。法鏡寺跡では新発見の瓦当文様である。瓦当の左右巾が狭長な点に古式をとどめているが、創建時にまでのぼせるのは躊躇される。

(小田宮十雄)

鬼瓦(図版第三二・第16図)

8区第Ⅱ層より鬼瓦の破片が出土している。残存部はわずかで、鬼面右下側部にあたり、珠文と鱗の一部が認められるが、全体はうかがいがたい。先年出土のものと同じく、周縁に珠文を配するところから太宰府系鬼瓦とみられる。厚さ約4cm、焼成は表面赤褐

色を呈し良好である。断面に三層の胎土の継ぎ目が観察される。

(清水宗昭)

鬘斗瓦 (図版第三二・第17～19図)

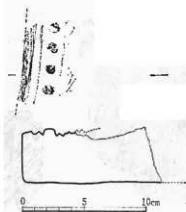
法鏡寺跡出土の各種遺物のうち、鬘斗瓦は、二六点という数の多いことで注目される。こうしたまとまりある出土例は稀であり、今後の参考資料となるとおもわれるので、これについて述べる。

出土地点は、十二点を発見したⅩ区を中心にして、それと接する各トレンチが設定された金堂北西部に集中している。この金堂北西部以外では、講堂の東側に設定した、Ⅹトレンチにおいて、五点出土している。

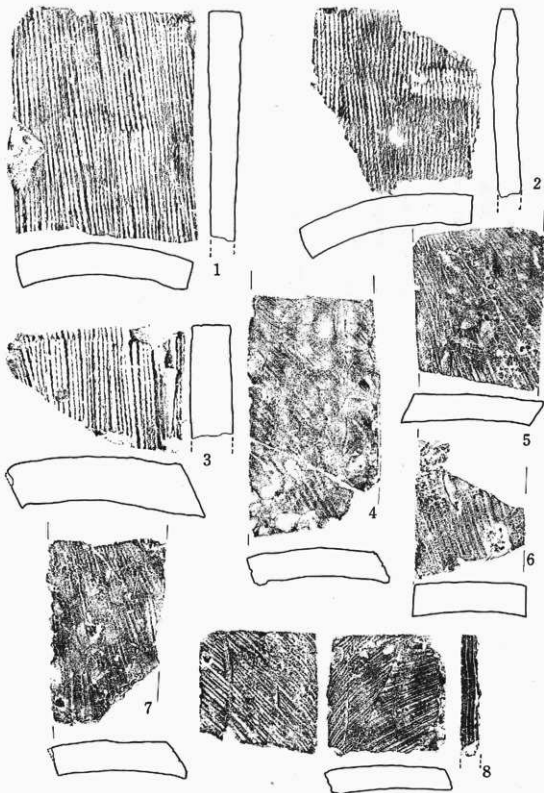
これらの鬘斗瓦は幅の寸法によって、一三〇～一五〇までをⅠ類、九〇～一一〇までをⅡ類、八〇～五〇までをⅢ類として分類することができる。その結果、Ⅱ類に属するものが多いことがわかった。

凹面、凸面にみられる特徴は、凹面の布目の上に掻き目痕が施されていること、桶板痕がみられること、凸面に掻き目調整によって縄目文が消されたものもあったが、縄目文のあるものでは縄目には左捻りに比べ右捻りの多いこと等、縄目平瓦と共通した特徴を有している。このことから、鬘斗瓦は平瓦を素材としていることが確認された。

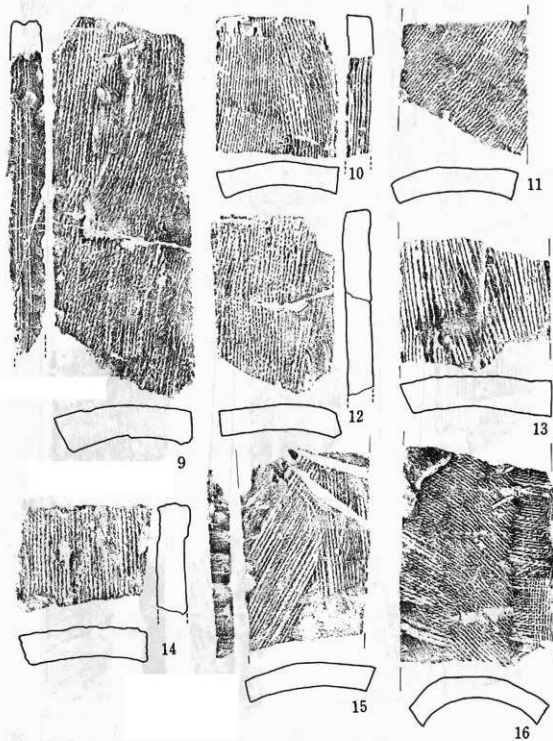
しかし鬘斗瓦判別の唯一の観察部分である側面では、平瓦の面取りはほとんど二面であるのに対し、鬘斗瓦では一面がほとんどであった。また一部には、側面が凹凸状を呈するものがある(図15・26)、広端部より狭端部に直線的な条痕を残す方法とは異なる面取りのあることがわかれた。



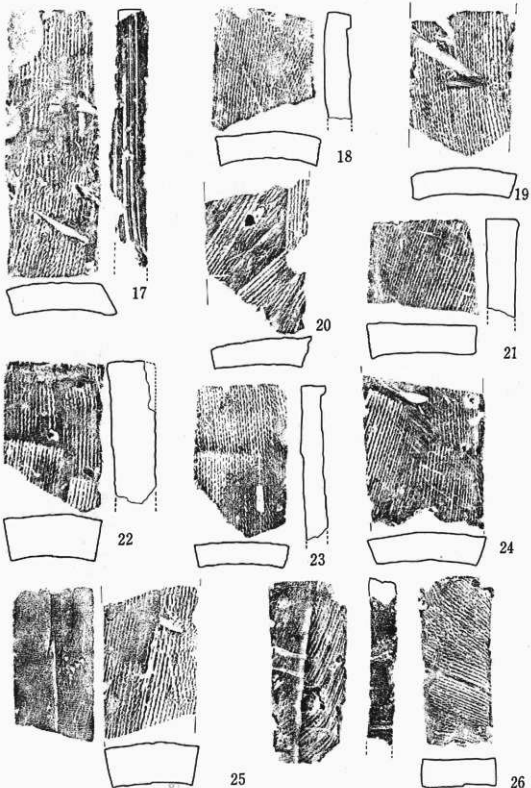
第16図 法鏡寺跡出土瓦実測図



第17図 法統寺跡出土製斗瓦実測図及び拓影(4大)



第18圖 法鏡寺跡出土土甃斗瓦実測図及び拓影(コ(1/4大))



第19图 法鏡寺跡出土瓦実割面及び拓影 (三) (1/4大)

法鏡寺出土瓦片計劃一覽表

類別	No.	トビツチ ・型	幅	地 量 面	考 面 面	側 面 左	切 面 切	切 面 切
I 類	01	9. I	13	布目・カキ目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	2 縦紋	2 切切
	02	9. II	15	布目・カキ目	繩目・右織り・	1 縦紋	1 縦紋	2 切切
	03	13. II	13	布目	繩目・右織り・	1 縦紋	1 縦紋	2 切切
II 類	04	13. II	10.5	布目・カキ目	カキ目	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	05	3. I	10.5	布目・カキ目	カキ目	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	06	10. I	9.0	カキ目	カキ目	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	07	13. I	10.0	布目・カキ目	カキ目	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	08	13. I	9.5	布目	カキ目	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	09	13. I	10.0	布目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	10	9. I	9.0	布目	繩目・左織り	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	11	9. I	9.0	布目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	12	7. I	9.5	布目・カキ目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	13	3. I	11.0	布目	繩目・右織り	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	14	9. I	9.0	布目・カキ目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	15	9. I	9.0	布目・カキ目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	16	EW. I	9.0	布目・カキ目	繩目・右織り・叩き痕	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
III 類	17	3. I	8.0	布目	繩目・右織り	1 縦紋	1 縦紋	3 切切
	18	9. II	7.5	布目	繩目・左織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	19	9. I	7.0	布目・カキ目	繩目・左織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	20	9. I	7.5	布目	繩目・右織り・叩き痕?	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	21	9. I	8.0	布目・カキ目	繩目・左織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	22	9. I	6.5	布目	繩目・右織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	23	4. II	7.0	布目	繩目・左織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	24	9. II	8.0	布目・カキ目	繩目・左織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	25	EW. I	6.5	布目	繩目・右織り	1 縦紋	1 縦紋	4 切切
	26	3. II	5.5	布目	繩目・左織り・叩き痕?	1 縦紋	1 縦紋	4 切切

熨斗瓦を作るための平瓦の切割りは、いろいろの方法が考えられる。一枚の平瓦から等分に切割られたと仮定して、それらが何等分にあたるかを調べて見た。その結果、二分の一（Ⅰ類）、三分の一（Ⅱ類）、四分の一（Ⅲ類）に相当するものに類別することができた。こうした熨斗瓦の大きさの違いは、その使用される場所によって使い分けられたものと考えられる。

№04・№07のカキ目以外は、すべて縄目文が施されており、格子目文の熨斗は見られない。縄目文は左摺りのものと右摺りのものに分けられるが、軒丸瓦、軒平瓦に見られるものの比較から、相対的に左摺りの方が新しいと思われる。（7節・3参照）この左摺りが里類に多く見られることは、先に述べた場所による使い分けとは別に、使用年代の違いを考える上で注目される。

№16は丸瓦の半段による唯一の資料である。高く積上げることによって棟を構成する熨斗瓦の用途から考えて、こうした丸味をもったものは下部には使用されにくい。このため上部に積まれたものと思われる。

本寺跡では、他の遺物同様、出土地点が金堂の一部を中心としている。このため、他の堂塔における熨斗瓦との比較に欠ける等、不明な点が多い。今後の調査が期待される。

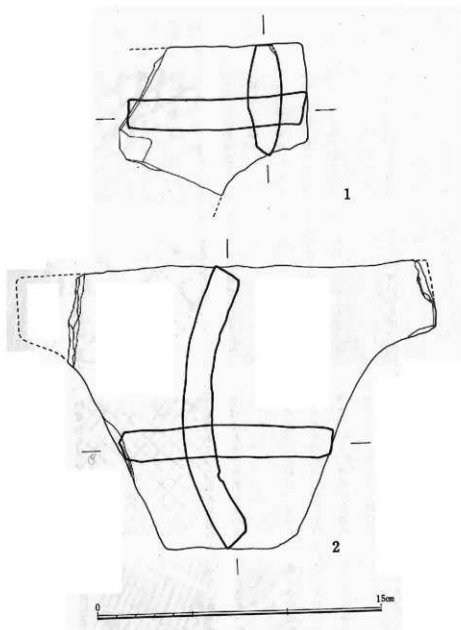
（小倉正五）

面 戸 瓦（図版第三四・第20図）

Ⅲ区Ⅱ層（講堂跡）より出土したもの（第20図2）と、出土地点不明のもの（同図1）の各一点がある。1は一方の屑のみ、2は一部欠損するが、ほぼ完形を復原しうる、ともに平瓦を利用したもので、凸面に右摺りの縄目、凹面に布目を残し、桶造りの技法をとどめている。

2によれば全体逆梯形をなし、丸瓦と接する両側縁部をヘラで削り内湾させている。平瓦に接する下底部も、ヘラで削りわずかに丸味をつけている。復原したところ上縁部巾22.2cm、下底部巾17.2cmを測る。1もほぼ同様の寸法となろう。

（後藤宗俊）



第20圖 法鏡寺跡出土面戸瓦実測図

磚 (圖版第四四)

いずれも無文のものである。立方体の全体を復原しうるものはない。寸法の計測可能なもの四片によれば、厚さ八・九cm、三・三cm、中二・二cm、一・二・六cm。長さは計測できるものがない。

灰褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に砂粒をふくみ、焼成はよくない、いずれも器表面にヘラ状のカキ目を残している。

(後藤示俊)

平瓦・丸瓦 (圖版第三六・三七・第21・23圖)

一、叩きによる分類

各発掘区から出土した平瓦・丸瓦は龐大な量にのほり、とくに金堂地区北側および西側の基壇雨落ち付近において濃密な出土状態を示し、ほぼ完形に復原可能な平瓦が重なった状態で発見された。ここではそれらの資料に基づき、成形にあたって平瓦・丸瓦に施された叩き文様をみてゆきたい。

瓦の凸面に施された文様は、大きく格子目叩き・縄目叩き・素文およびその他の四種に分けられる。まず平瓦についてみれば、このうち凸線によって格子目をつくった形態をとる所謂格子目叩きと呼ばれるものは左の五類に分けられる。すなわち、

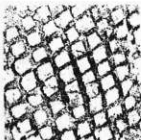
I類 太線による正格子叩きでやや菱形に近いものもある。格子の大きさは0.5〜0.7cm前後あり格子の仕上りは端正である。格子目叩きを有するものとしては量的に多い。また、数は少ないがこの類の形式とみるべき資料(第22圖3)もある。

II類 太線による斜格子叩きで格子の大きさは0.8cm前後あり、仕上りは整っていて力強い。この類の叩きを持つものでは、叩き板の木目痕がみとめられるものがある。(第22圖4)

III類 太線による正格子叩きで格子は1.0cm前後あり最も大きい。量的には断片を数点検出したにすぎない。(第21圖3)



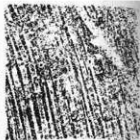
1



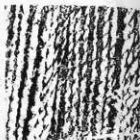
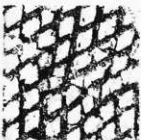
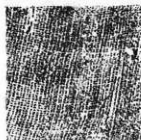
2



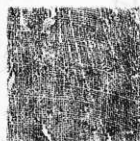
6



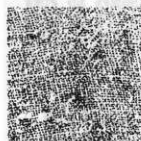
7



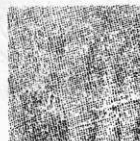
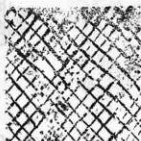
3



8



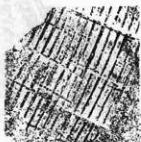
4



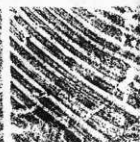
9



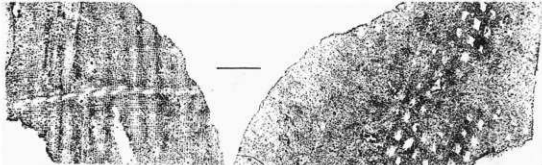
5



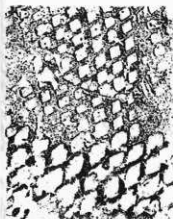
10



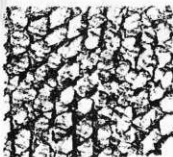
第21圖 法鏡寺跡発見瓦の印文様・布目撮影集成（ $\frac{1}{4}$ 大）



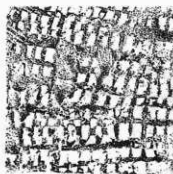
1



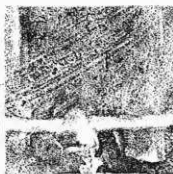
2



4



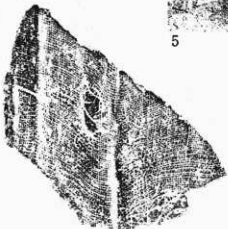
3



5



6



7



第22図 法興寺跡発見瓦の印文様・布目および不明陰刻拓影（※大）

IV類 細線による正格子叩きで彫は浅くて弱い。格子の巾は約0.5cm程度。また、完全に格子目を切らず平行線のまま叩かれた例（第22図5）があり、叩き板末端は格子目を省略したものもあったことが知られる。量はII類よりもやや少ない。（第21図4）

V類 細線による長い格子目で、巾0.3cmほどの平行線に約2cmの間隔で直交し叩きは浅い。最的にはきわめて少ない。（第21図5）次に縄目叩きでは、縄目板によって知られる縄の撚り方から当然右撚りおよび左撚りの区別が生じ、法鏡寺跡出土瓦においてもその両性の存在がみとめられる。したがって、ここでは、

I類 右撚り

II類 左撚り

とした。さらに資料によつては縄そのものの太さにも若干の相違が存するようであるが、浅く打たれた場合と深く打たれた場合とでその識別は困難である。この縄目叩きを有する平瓦は格子目叩き瓦をも含めた全体で量的に最も多く、六割以上を占めるとみられる。復原の行なわれたものも多い。

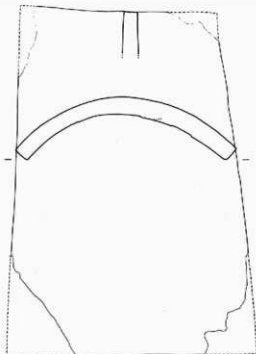
その他成形板としては平行線叩き・カキ目があげられる。

平行線叩き（第21図6）は、巾0.2～0.3cmの平行線を裁わしており叩きは浅い。量は格子目皿類と同じくきわめて少い。

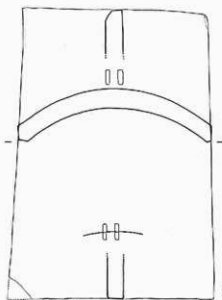
カキ目板をもつ平瓦は破片であるため、果して全体にどのように施されたものか明らかではなく、上面の凹凸を仕上げる目的で他の叩きの上から施したことを知り得る資料もない。したがってカキ目による単独の仕上げ法が存在について積極的に首肯しがたい。

カキ目は側縁に沿って丁寧に行なわれたものでなく非常に施である。平瓦凹面に布を割いだ際についた擦痕がみられることがある（第21図10）が、これときわめて類似した痕跡を示している。量は少ない。

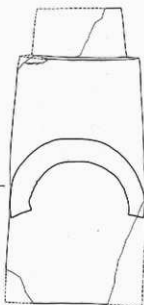
以上のような叩き文様のはかに、表面を撫でて叩き文を消した瓦がある。これは主として丸瓦において用いられた技法で、平瓦では小片一点を検出したのみである。



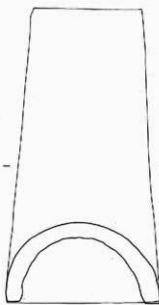
(格子目叩Ⅱ04)



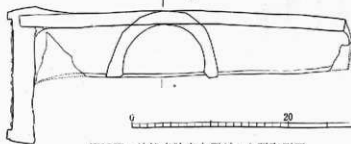
(繩目叩Ⅰ01)



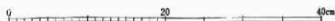
3



4



5



第23图 法鏡寺跡出土平瓦・丸瓦実測図

一方、丸瓦では、平瓦でみられた格子目叩きのうちⅠ類・Ⅳ類・Ⅴ類がみられるが、このうちⅠ類はすべてすり消されている（第22図1）。またⅤ類はきわめて少ない。縄目叩きはⅠ類・Ⅱ類とも存在する。素文は量的に多いが、Ⅰ類のすり消しと認められるものを除くと成形にあたってどのような叩きを使用したものか明らかではない。

二、平瓦の法量・形態

出土した平瓦のうち、その大きさを知ることのできるものはきわめて少量にすぎない。しかし、ほぼ二つの大きさのものに区別される。一つは太線の格子目叩きⅠ類およびⅡ類にみられる人形の瓦である。長さは44cm前後あり、狭端部で約25cm、広端部で約30cmほどある。他の一つは、長さ約36cm前後の平瓦で、巾が狭端部で約23cm、広端部で約26cmある。この大きさの瓦には、格子目叩きⅣ類と縄目叩きⅠ・Ⅱ類が属する。形態的にも全体に縄目叩きを有するものが規格性をうかがうことができるのであるが、つぎに形態的な特徴をみてゆこう。

製作技法に関する事情は詳しくは後章で述べることにして、瓦製作の第一段階である模骨への粘土の重ね方として二種類が考えられる。瓦側縁に平行して重ね目をもつものは格子目叩き、縄目叩きの両者にみられるが、側縁に直行した所謂輪積法をとるものは縄目叩きに限られる。模骨の極板痕の観察がきわめて容易になされるものと、ほとんど観察不可能なまでに平滑なものとの両者を通じである。凸面では、縄目叩きのもので端部から1cmほどのところに約2cmの長さの平行圧痕をもつものがある。これは上か下または上下につく場合がある（第二二図6・第二三図2）。

凸面叩きの状態では一般には、叩きは全面にまんべんなく行なわれるが、縄目叩きⅠ類のなかに中央部を叩き残した形で狭端側と広端側とから叩き分けた例がみられる。

最後に瓦側面の面取りに関する観察では格子目叩きと縄目叩きとに顕著な相違がみとめられる。まず格子目叩き平瓦では側面がほぼ曲率の中心に向かってのように切られている。さらにこまかくみると、Ⅰ類・Ⅱ類では面取りの仕上げをおこなうかまたは撫でによつ

て面を整えている。しかしⅣ類では山面から約半に切り込みが入れられて割られ、そのまま仕上げを行っていない。これに対し純日叩きをもつ平瓦では、凸面を上にして平面に置いたときに、側面が平面に対して直角になるように仕上げられ、すべて鋭角になったカドをさらに面取りしている。

これら格子日瓦と純日瓦における形態上の諸特徴の違いは何か製作技法の相違を示唆するものかも知れない。

なお純日叩きをもつ平瓦片にへう描陰刻のあるものが発見された（図版第三二・第22図?）が、どのような意味をもつものか明らかでない。

三、丸瓦の法量・形態

丸瓦は完形を知り得る資料にとほしい。形態的には行基葺きおよび玉縁のつくものとの二種が発見されている。長さは玉縁を含めると約37cmあつて行基葺きの場合と変りがない。巾は広端で18〜20cmを測る。また百濟系卑井軒丸瓦に組み合わさる丸瓦は製作にあつて特殊の模骨を使用していることが注目される。すなわち、巾1cm前後の棒状のものを細ひもによつて四〜五ヶ所を連続しこれを円筒状にして模骨としたものである。この場合もちろん行基葺きの形態をとり、焼成は多く灰色堅緻な焼成である。

以上、平瓦および丸瓦についてみてきたが出土した主要な平瓦について次に一覧表を掲げる。

（真野和夫）

法鏡寺跡出土平瓦計測一覽表

類別	長さ (cm)	換	増	巾 (cm)	備	考	側面取	電 (kg)	
片手目 equal 平瓦	I	01	45.3	25.6	29.8	桶板破あり	2	5.4	
		02	44	—	—	桶板破なし	1	2.5	
		03	—	25.3	—	桶板破なし	1	3.1	
		04	43.7	23.2	29.8	桶板破あり	1	4.63	
IV	05	34	—	—	桶板破あり	割り直し	2.4		
細 目 叩 き 平 瓦	I	01	36.7	23.2	25.7	桶板破あり	2	4.3	
		02	36.6	22.3	26.9	桶板破あり	2	3.8	
		03	35.4	21.6	24.6	桶板破あり	2	3.6	
		04	33.6	21.8	26.3	桶板破あり	上下叩き分け	2	2.8
		05	36	22.8	25.6	桶板破なし	叩き破	2	3.25
		06	—	23	—	桶板破あり	叩き破	2	
		07	—	24.2	—	桶板破なし	叩き破	2	
		08	—	25	—	桶板破なし	叩き破	2	
		09	—	20.2	—	桶板破あり	叩き破	2	
		10	—	22	—	桶板破あり	叩き破	2	
		11	—	—	27	桶板破なし	叩き破	2	
		12	—	—	25.5	桶板破あり	上下叩き分け	2	
I	01	37.5	23.8	26.7	桶板破あり	叩き破	2	3.8	
	02	36.3	23.5	24.8	桶板破なし	叩き破	2	3.5	
	03	36.8	22.2	25.9	桶板破なし	叩き破	2	3.6	
	04	36	23	25.5	桶板破あり	叩き破	2	2.8	
	05	—	—	24.7	桶板破あり	叩き破	2		

瓦 釘 (図版第四・第24図)

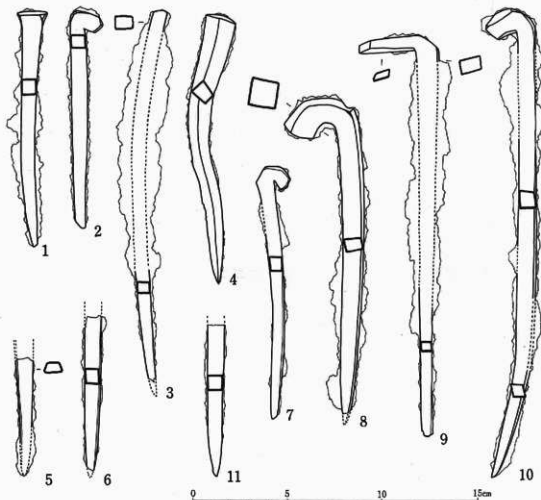
瓦釘は先端部分の断片も含めて一本が出土している。ほぼ完形を保つ八本についてみると、長さの上から二つに分類することが可能である。すなわち一一～一四cmのもの、二〇～二五cmのもの、およびこれらの中間に位置する一七cmの長さのものがある。いまこれらを短かい順にA・B・Cとする。

一方、釘の頭の形態からさらに二種類に分けられる。

(1) 切ったままで折り曲げをしないもの。

(2) L字状または釣針状に折り曲げたもの。

この二種の頭の形態は、Bの場合を除いて長短いずれの釘にも用



第24図 法鏡寺跡出土瓦釘実測図

いられている。

断面は方形につくられるが菱形あるいは台形に近いものもある。

出土位置は4がⅢトレンチよりの発見で他は金堂跡の調査によって出土した。

(真野和夫)

須恵器 (第25図)

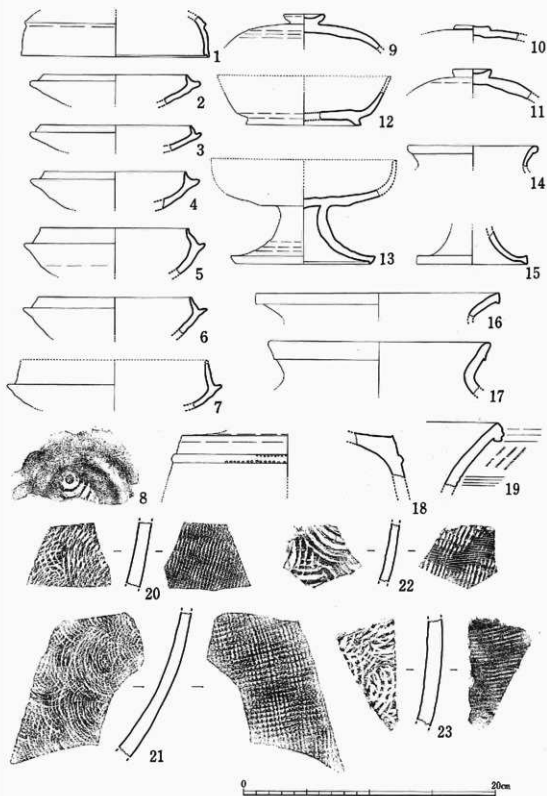
出土須恵器は、時期の上から二つに大別される。すなわち古墳時代須恵器として代表的な身に蓋受けのある坏を含む一群と、歴史時代に普遍的に行なわれる萬台付碗をもつ一群とである。いずれの須恵器の場合もその出土の状態は、遺構との関連を指摘し得るようなまとまった状態で発見されたものではなく、また大部分が小破片である。

古墳時代須恵器では、坏・高坏・甕などがある。このうち、坏は時期的な形態の変化がもつとも顕著に現われる。したがって坏の形態的特徴によっておよそ第Ⅱ形式から第Ⅳ形式の存在が認められる。量的には蓋受け立ちあがりが高く内傾した形態を示す2・4が多く、高坏13もほぼこれと同じ時期とみられる。坏内面に同心円叩き痕をもつもの8もある。

次に寺院との関連が考えられる一群の須恵器では、碗・蓋・甕などがある。碗12は口縁部を欠損しているが、復原径一四cmとなる。体部器壁は薄く仕上げられてやや内傾気味に開く。蓋はいずれも周縁部を失ってつまみの形態を知るのみであるが、器壁が厚く全体に天井部の丸みが強い。つまみは高さが低く頂部を回めている。甕形では17がこの時期に属するとみられる。口縁部のつくりが単純化している。18は小破片のため全形を知り得ないが、突帯がタガ状にめぐりその上下に刺突文が平行して施されている。また甕の内外面にみられる叩きでは、細くしかも浅い同心円叩きを施した20・21などがこの新しい時期に含まれよう。

なお、これらの須恵器の出土位置は、金堂跡地区から1・2・7・8・21が、講堂跡地区から3・9・13・15・17・18が出土し、8はⅠトレンチ、11・16・22・23がⅢトレンチ、20がⅥトレンチからそれぞれ出土した。

(真野和夫)



第25図 法鏡寺跡出土須恵器実測図及び拓影

土 師 器 (第26図)

主として金堂地域から土師器片が出土している。1は小形甕、内側、外側ともに剥落が目立つが、表面一部に丹塗りの痕跡がみられる。2・3は皿、2の外側のヘラ研磨が顕著であり、3は内外面に丹塗りによって仕上げられている。4・6は鉢とおもわれる口辺部である。4は内側ヘラ削り、外側上部はけ目、下部指などによる調整がみられる。5は壺の口辺部である。7は小型鉢とおもわれる底部で、内側に成形時のねじりがみられる。8は全体にヘラ削り顕著な甕である。いずれも奈良時代に属するものと考えられ、淡赤褐色を呈す。1～7は金堂北部および北側、8はⅧトレンチ出土。

瓦 器 (第26図)

9は黒褐色を呈す杯、10・11は高台付埴である。10は外側はろくろ目が残る。12は火舎の脚とおもわれ、灰色を呈す。脚部の稜はヘラによっていねいに角が落されている。13は薄手の注口で、外側のヘラ削りが顕著で、その下半部は煤煙によって黒色を呈している。9～11は金堂北部、12・13はⅧトレンチ出土。

14は調整、焼成ともに良好な土師系瓦器で、内側のヘラ研磨は細かく、外側は幅が大きい。全体淡黄褐色を呈す。Ⅷトレンチ出土。

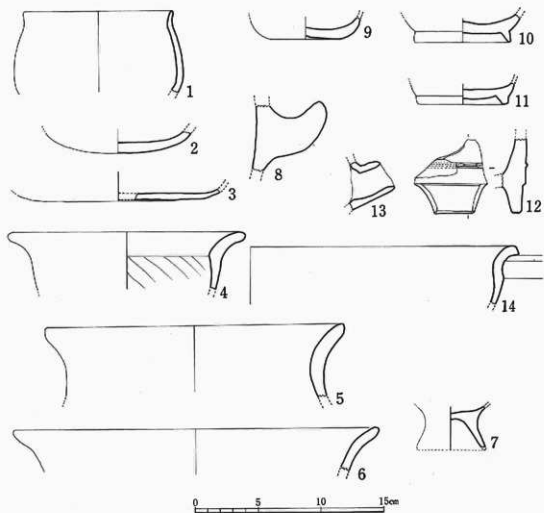
弥生式土器 (第27図)

遺跡のほぼ全域にわたり、Ⅱ層以下の層より相当数出土している。遺構は確認するに至っていないが、一帯は駅館川の自然堤防をなし、周辺に点々と弥生時代の遺跡をもっているため、この地にも相当規模の遺跡の存在することは考えられる。

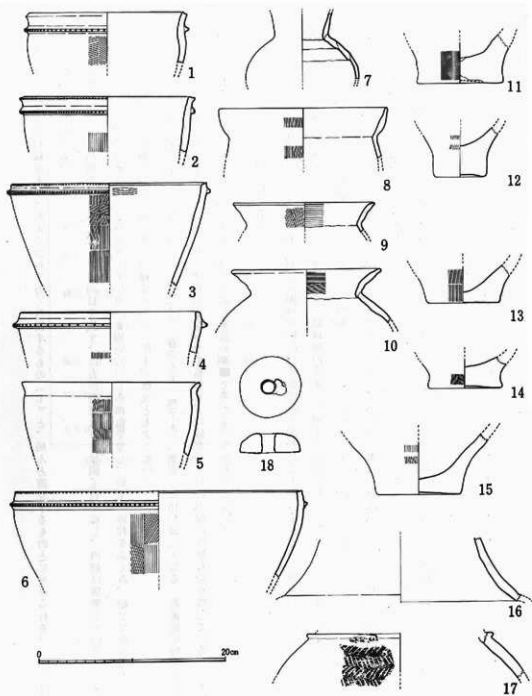
(一)、甕形土器(1～6・8～10)

あきらかに中期初頭をくだらないもの(1～6)と、後期終末以降のもの(8・9・10)の二類がある。

1～4、および6は、いわゆる下城式甕形土器に属する。胴部わずかにふくらむもの(1・3・6)、ほとんどふくらみのないもの



第26図 法鏡寺跡出土土師器及び瓦器実測図



第27图 法镜寺出土弥生式土器实测图

の(2・4)がある。口縁部もいったんくびれて短く外反するもの(1)と、殆んど直立するものとに分けられる。(2)は口縁部がわずかに外側へ肥厚する。

いずれも頸部に二条の凸帯をめぐらし、これに刻目を施す。器表面凸帯より下は刷毛目を残し、内側は研磨している。口縁部内側は横なでで仕上げ、凸帯は指先でつまみ整形している。黄褐色ないし赤褐色を呈し、胎土に砂粒をふくみ、総じて焼成はよくない。

5はわずかにふくらむ胴部、短く外反する口縁部をもつ。胎土、焼成ともよくない。

これに対し8・9・10は、倒卵形の胴部に短く外反する口縁部をもつ類であり、胴張り10が最大となる。器表面に刷毛目を残す。内側は頸部以下の刷毛目を磨消している。10は頸部以下をヘラで整形し、口縁部つぎ目の内側に明瞭な段を残している。いずれも弥生時代終末期をさかのぼらないであろうが、10は古式土師器の範疇で考えるべきかも知れない。

□ 壺形土器 (16・17・7)

これもあきらかに前期に属するもの(16・17)と終末ないしは土師器かと思われるもの(7)との二類がある。

16は胴部から表裏に明瞭な稜をつくって口縁に至る。扁球形の安定した胴部と底部をもつのであろう。内外ヘラで研磨している。黄褐色を呈し、焼成はよい。17は肩部にやや退化した四条のヘラによる羽状文を施し、頸部に凸帯をめぐらす。

7はほぼ球形の胴部、わずかに外反しつつ伸びる口頸部をもつものであろう。胴部から頸部にかけて内側に二段の轡目を明瞭に残している。器表面はよく研磨され、赤褐色を呈し焼成もよい。

なお底部は、口縁部と同一個体を構成するものはないが、1・6に対して11・13、17・18に対して14・15が類としては対応しよう。

□ 紡錘車 (18)

一点出土している。黄褐色、細砂をふくみ焼成はよく、研磨されている。径六・五cm、孔径一・三cmを測る。弥生時代のものとは断

定出来ないが一応ここで紹介した。

以上の各遺物の出土地点を示すと別表の如くなる。ほとんどがⅡ層即ち古瓦を出土した層であるが、Ⅰトレンチ基壇下、Ⅴ区拡張区が層位上弥生時代の包含層といいうる。

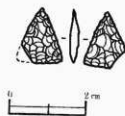
従って甕形土器(2・5)と、壺形土器(16)はセットとなる可能性をもつ。

その他では、ここに明確な中期の須玖式系統の遺物のないことから、1・4、6のいわゆる下城式土器群と16・17の壺型土器の組み合わせが生じる可能性も充分考えられることを指摘しておくにとどめたい。

(後藤宗俊)

出 土 地 点	第27図番号
Ⅰトレンチ南区	1. 9. 13
Ⅰトレンチ基壇下	2. 5. 16
Ⅰトレンチ南端Ⅱ層	3. 11
ⅩⅠ区 Ⅰ・Ⅱ層	4.
ⅩⅡ区 Ⅱ層	6. 12
ⅩⅢ区 Ⅱ層	7.
ⅥトレンチⅡ層	8. 19
ⅩⅣ区 Ⅱ層	10. 14
Ⅴ区拡張区Ⅱ層	15
ⅩⅤ区 Ⅱ層	18

法興寺跡出土弥生式土器出土地点一覧



第28図 辻鏡寺跡出土
石器実測図

石器として、石鏃一点が検出されている。石鏃としては小型の三角鏃に属し、石材は乳灰色を呈する姫島産の黒曜石を使用している。二次加工は全面におよび、入念である。形態からみて、縄文早期にみられる小型石鏃に共通するが、所属する時代は断定しがたい。IXトレンチ北西部出土。

(清水宗昭)

第7節 考察

1 遺跡の復原的考察

今回の調査によって創建時のままの規模を知ることができたのは金堂跡と推定されるものの基壇である。かつて石田博士が講堂または金堂を推定した石塚はこの西南にあたり、今回の調査で近世頃に周辺の礎を累積したにすぎないことが確かめられたので考慮の必要はなくなった。また石田博士がとりあげた18の1番地畑地に付された俗称カネツキドウ、16の1番地畑地に付された俗称ホンドウも近世法鏡寺に関係ある名称と思われるので、古代伽藍の復原には手がかりとしないであろうと考えられるにいたった。したがって地上観察による手がかりは得られないこととなり、問題はもう一度振り出しに戻してかからなければならない。

伽藍配置の想定は今回の発掘調査によってある程度の推定が下せるようになった。推定金堂跡の東方及び西方にトレンチを設けて探索した結果、東方には版築あるいは基壇のような微証を認めることができず、地山までかなり深い状況であったが、西方において

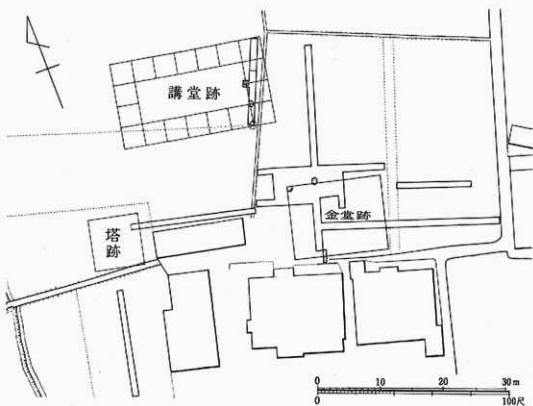
はすでに基礎のほとんどが削平されたとしても、礎を含む地山が高い位置に認められるので、西方に礎跡を想定しうる公算は大きいといわねばならない。したがって法隆寺式の配列が考えられることとなる。さらに両者の中間北方において礎石の配列した建物の存在が確認されたのは、法隆寺式伽藍配置を考える上にさらに有力な証拠を加えたこととなる。そうすれば、この北方礎石群は講堂跡に比定するのが妥当である。ただしこの推定講堂跡は創建当時のものでなく、おそらく八世紀代に再建されたものである。しかしながら発掘時の所見からしては創建時の位置を襲うて建てられたとみられるから、一応位置や規模もさして変更はなかったものと考えて復原に資することとする。

金堂跡は基壇上面も礎石も、その削方も失われるまでに削平されていたが、幸いにして基礎構築地盤が地表を掘り込んで版築して築成する掘込基礎の營造法をとっていたので、トレンチ探索によって版築層の終端をさがして規模をさだめることができた。すなわち東西長一四・六メートル（四八尺）、南北長一一メートル（三六・三尺）のプランが明らかにされた。したがって、通例にしたがって桁行五間、梁間各七尺の場合、あるいは桁行七尺等間、梁間六尺等間の場合などが考えられるのでやや規模が小さいようではあるが、寺院全体の規模が小さい場合には不都合でない。

次に推定講堂跡で検出された南北方向にならぶ三個の礎石の間隔は三・三メートル（一〇尺）等間である。通例にしたがって講堂の桁行七間、梁間四間の場合を考えれば、金堂跡との相対的關係、さらにはボーリング探索による礎石の確認などの結果を参考して、この三個の礎石は東端から三列目の南北礎石群に比定するのが無理ないようである。

ところで金堂跡の方位はN一四度Eを示し、これは法鏡寺創建伽藍の南北中軸線を規定するものであろう。しかしながら講堂跡の場合はN一〇・五度Eとなつて、両者の間に三・五度の板れを生じている。これはおそらく講堂再建にともなう板れであらうと考えられるので、今のところ創建時における伽藍南北線は金堂跡の角度をとるべきであらう。

かくして想定された法鏡寺伽藍配置が法隆寺式伽藍に範をとったものとすれば、中門や南門はこれより南の民家区域に求められる



第29図 法鏡寺伽藍復原想定図 (一)

こととなるが、このあたりは瓦片が出土したという畑地を含んでいるが、地形的に削平されているので将来の調査によっても遺構の残存状況は甚だ危ぶまれる状況である。

今回の調査によって、ほぼ伽藍中心部をさだめることはできたが寺域を決定するような調査までは予算的にも労力的にも及ぼすことができなかった。もし石田博士の法隆寺式伽藍地制法に忠実に従うとすれば、少くとも二町四方くらいの範圍を考定しなければならなくなる。その場合、地形観察からして南北は支障ないが、東西は果して無理ないといえるであろうかとの疑念を挟まざるをえない。また別に虚空蔵寺跡の復原案にも述べた如く、塔、金堂と南門の間を法隆寺の場合とちがってかなり接近して配置した場合



第30図 法鏡寺伽藍復原想定図

も考えられるので、現在のところ最大限二町方域を推定できても、現実にはそれより縮小されていたことが予想できる。今後の調査に期したい。

(小田富士雄)

- 註 (1)石田茂作「法鏡寺」飛鳥時代寺院址の研究 昭和十一年
(2)石田茂作「総説飛鳥時代寺院址の研究」 昭和十九年

2 遺物に関する考察

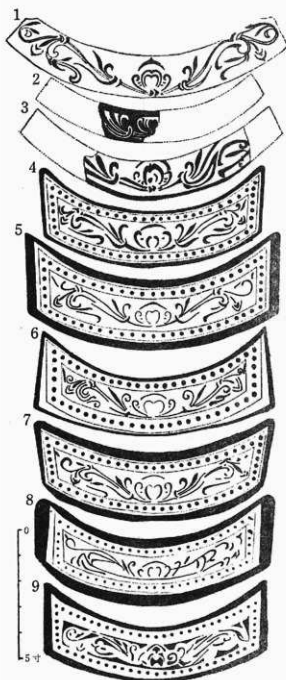
法鏡寺跡の創建には百濟系單弁軒丸瓦と法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦の組合せが屋瓦の主流をなしている。そして寺跡の最後を示すものは復弁六葉軒丸瓦によって平安初期頃と推定されていた。(1) その間に珠文縁の複弁蓮花文軒丸瓦や法隆寺系忍冬唐草

文軒平瓦が挿入されることは疑いない。ところで今回の調査によって従来知られているものは、さらに既往の資料には未見であった新資料の発見を加えることができた。以下主要な遺物についてまとめておく。

百濟系單弁軒丸瓦

かつて「素弁唐瓦」の名称で知られているもので、中房に七種の蓮子(1+6)を有し、中房と蓮弁の間の溝が深く、先端の反転した単弁八葉を配している。この種の軒丸瓦の祖型が半島百濟の古瓦に求められるところから表記のような名称を与えることとなった。これまで知られているこの種瓦の分布は豊前8・筑前9・肥前5・筑後4の計二一遺跡が数えられる。法鏡寺跡の発見例は故北幸一氏の蒐集品が早くから知られ、故中山平次郎博士、石田茂作博士、故河野清實氏らによって早くから紹介

されてきた。これと同類のものは今回の発掘品でも事例を加えることとなったが、他遺跡にない特徴は周縁が素文であることである。他遺跡にあつては重瀾文（一重瀾文）、唐草文がみられる。ところが今回の調査ではじめて一重瀾文のものが知られるようになったのは新知見であつた。これまで知られている豊前七浪跡はすべて一重瀾文縁であるから法鏡寺跡のみ見られないのは奇異の感を抱いていたがここに解消することとなった。また蓮弁形態からは中津市・相原廟寺、築上郡・垂水庵寺にみる古式のものと同列にあるとは考えられない。むしろ新しい形態（B式）に属させることが妥当である。百濟系卑弁瓦の最古式のものとは天智天皇四年築城の肥前・基肄城跡をさかのぼらず、また発見形態とみられるB式卑弁が八世紀中頃に目安求められる園分寺建立の時期をさして下らない頃に下限を求められることはすでに述べているので再説しない。



第31図 九州地方発見法隆寺系忍唐草文集成図

法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦

大和・法隆寺の創建に使用された独特の忍冬唐草文軒平瓦に法隆寺式の名を冠して呼ぶことは石田

茂作博士の論考⁽⁵⁾が発表されてから定まって今日にいたっている。当時学界に知られていた九州における法隆寺系軒平瓦の出土遺跡は

法鏡寺跡と宇佐神宮境内の弥勒寺跡にすぎなかった。その後類例の新発見を加えて今日では、豊前では法鏡寺跡、虚空蔵寺跡、瓦塚

(四日市跡寺)、宇佐神宮上宮、弥勒寺、菩提庵寺、豊前国分寺、豊後では豊後国分寺から出土することが知られた。その分布は宇

佐地方に集中しており、一部豊前京都郡や豊後に及んでいる。これらの遺跡から発見される法隆寺系瓦当文は唐草文の構成の細部検

討によって九類に分類編年されるが、上限は七世紀後半代にさかのぼり、下限は豊前国分寺例⁽⁶⁾によって平安時代までに及

んでいることが知られている。その後今日にいたるまで追加すべき新しい出土遺跡や新形式資料は知られていない⁽⁷⁾。これをまとめ

ると左表のようになる。すなわち法鏡寺跡、虚空蔵寺跡、弥勒寺跡はいくつかの同類古瓦が相互に関連しながら使用されていること

に気付くのである。この三寺跡は旧宇佐郡内に在りて、建立氏族も古代においてたえず交渉があったことが推察されているところでは

ある⁽⁸⁾。古瓦にみる交渉もまたこのような歴史的背景と無関係でなかったことを示している。また文献に照して年代を決定できるのは

遺跡	種類	一	二	三	四	五	六	七	八	九
法鏡寺跡		○	○			○			○	
虚空蔵寺跡						○				○
瓦塚(四日市跡寺)			○							
宇佐神宮上宮				○						
弥勒寺跡			○		○		○	○		
菩提庵寺					○					
豊前国分寺跡										○
豊後国分寺跡		○								

第四類軒平瓦である。弥勒寺跡、豊後国分寺はともに八世紀中頃を中心とするあたりに建立平時が求められるので、編年上の有力な論拠を提示している。

複弁蓮花文軒丸瓦

法鏡寺跡発見の軒丸瓦で早く知られていた

ものは複弁六葉と複弁七葉のものであった。ところが今回の調査で

講堂跡と推定されることから虚空蔵寺跡の創建時に使用された面

遠縁密文縁複弁七葉軒丸瓦の新発見があった。三者の特徴をまとめ

ると次表のようになる。法鏡寺跡の創建に使用された法隆寺系軒平

瓦一類は、虚空蔵寺跡における面遠鋸歯文縁の複弁八葉及び複弁七葉軒丸瓦とのセットが本来的なものであって、法鏡寺跡における百済系軒丸瓦とのセット関係は第二義的なものである。また法鏡寺跡の百済系単弁が最古のA式を含まないことから奇異の感を抱いてきたのであった。果して今回の調査によって複弁七葉のものが見えられてこの疑問が解消できた意義は大きい。

次に珠文縁の複弁七葉軒丸瓦は連弁の配列からしてやはり虚空蔵寺跡創建時の面遠鋸歯文縁複弁七葉蓮花文に祖型を求めることができる。おそらく奈良時代後期に比定される法隆寺系軒平瓦五類とのセットが考えられる。

複弁六葉軒丸瓦は六葉という連弁の配列も珍らしいが、外区に二重弧文と珠文を交互に配した手法も類例を知らない。この軒丸瓦はかなり出土量もあり、主として金堂跡と推定される建物の最終時に使用されたものであった。製作技法は平板で迫力に欠け、平安時代前期にまで下るであろうが、法隆寺系軒平瓦八類と共に使用されたと思われる。

鬼瓦 完全なものはないが大宰府都府楼跡のものを標識とする憤怒相鬼面の鬼瓦片が知られている。法鏡寺跡においておそらく創建当初かややくれた頃には使用されていたと思われる。虚空蔵寺跡のものより迫力に富むものであったと思われる。本寺跡ではこの鬼瓦以外には顕著な大宰府系古瓦の特徴を有するものが指摘できない。

製斗瓦 今回の発掘調査によって二六枚の製斗瓦が見えられている。そのほとんどが金堂跡に推定されている地区であり、一部に講堂跡推定地区のものがある。平瓦を縦に半切あるいは三切してつくられたいわゆる割製斗である。凸面に縄目叩きを有する桶巻づくりの痕跡がよくのこされている。また丸瓦を半切したものが一例ある。

	内 区		外 区
	連 弁	中房蓮子	
一 類	複弁七葉	—	面遠鋸歯文
二 類	複弁七葉	1 + 4 + 8	珠 文
三 類	複弁六葉	1 + 6 + 11	二重弧文・珠文

契斗瓦はいうまでもなく大棟や降棟を形成するものであるから、半切などの広巾のものや丸瓦を半切したものは棟を構成する最下段や最上段に、三切などの狭巾のものはその中途の重ね積に使用されたのであろう。正倉院文書にみえる「堤瓦」^{つゝみがわ}の古称はよくその用途をあらわしている。

面戸瓦

法鏡寺跡と虚空蔵寺跡から計三例検出されている。面戸瓦は平・丸瓦と棟を構成する契斗瓦の接する空所を埋めるためにつくられたのであるから、その用途からして元来数も少ないものである。これまで西日本における発見例はほとんど知られていなかった。形態と大きさに二種あり一は半円形で両翼をそえたような蟹面戸に使用するものと、小形半円形の鰐魚面戸に使用するものがある。ともに創建の際使用されたものであろう。

塼

法鏡寺跡、虚空蔵寺跡から発見されているが、火にかかっており完全なものはない。塼には基壇表飾に使用される場合と、外陣礎石間をつなぐ地盤座に使用される場合が考えられるが、両道跡とも出土量が少いところからして後者の場合の可能性が大きいであらう。創建時のものであろう。

(小田富士雄)

註

- (1) 石田茂作「法鏡寺」飛鳥時代寺院址の研究 昭和十一年
- (2) 小田富士雄「百濟系卑弁軒丸瓦考」史淵第九五輯 昭和四一年
- (3) 中山平次郎「考古雜錄三」考古學雜誌一一卷三號 大正九年
- (4) 河野清實「大分県内の古瓦」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第二三輯 昭和十一年
- (5) 石田茂作「法隆寺式忍冬唐草文字瓦の分布」伽藍論攷 昭和二三年
- (6) 小田富士雄「九州に於ける法隆寺系字瓦の展開」九州考古学3・4 昭和十三年
- (7) 賀川光夫氏の「大分県の考古学」(昭和四六年)三四五頁にあげられている日田市・林工高校保管の資料は同校に保管されている他の大和地方古瓦と共に、昭和初年頃に修学旅行などで上京した折に、購入されたものであるから、九州の出土品でない。ここに訂正しておく。

(8) 小田富士雄「宇佐弥勒神宮寺成立の背景」大分県文化財調査報告書第七集 昭和三六年

(9) 関野貞「瓦」雄山閣考古学講座第四六〇図 昭和三年

00 小田富士雄「九州における大宰府系古瓦の展開」九州考古学 13 昭和三六年

00 『大日本古文书』四、天平勝宝八年・造東大寺司藤

3 平瓦・丸瓦の製作技法 (図版四五～五〇)

古代寺院の造営に際して不可欠のものは屋瓦である。官営寺院にあっては專属の造瓦所を設ける事例もあった。(1) 古代瓦の製作法を現存する民俗例に求めて推察する方法は故関野貞、藤島義治郎、島出貞彦氏らが手がけられ、朝鮮や沖縄、京都の場合が紹介された。また古記録にみえる造瓦具についても早く木村捷三郎氏の考察があった。近年になって各地の発掘調査が盛況を呈するに及んで古瓦資料にもわかに増加することとなり、造瓦技法についての研究もすすめられるようになった。法隆寺の古瓦について考察した浦林亮次氏、研究史と古瓦の実例について問題点を整理された小林行雄氏、また古瓦の実例について造瓦技法を追求された大川清、藤沢一夫、佐原貞氏らの業績は、この方面における今後の研究をすすめる上に果たした役割は大きいものがある。なかでも浦林、小林、大川、佐原諸氏によって近年問題にされてきているのは平瓦における四枚作り(桶巻作り)と一枚作りに関するものである。古瓦の実例個々について検討するにつれて解決された問題もあれば、さらに新しく提起されている問題もある。とくに瓦の製作技法の如き研究は瓦の実例を数多く検討しなければならぬ。すでに平瓦における四枚作りと一枚造りの歴史については佐原氏によって一応の結論を得たようにも思われるが、未だ疑問を生じないでもない。

九州地方における古瓦製作技法に関する研究は最もおこなわれている分野である。そこで今回の法鏡寺跡調査では、とくに金堂地区で集中的に発掘を行い、量的にもまとまった資料を得たので、製作技法のうかがわれる資料を選別し、製作技法について考察を試みることにした。瓦自体について判断しがたい場合は油粘土を用いてモデリングを作成し、一見して判断できるように配慮し、図版で示

す場合には瓦の災物をa、モデリングをbとして掲載した。これによって明らかにできた事実も少くない。今回の試みは法鏡寺跡、虚空蔵寺跡の資料について行ったものであるが、さらに九州各地の資料について同様な観察や実験的調査を行う必要がある。それは宇佐地方の初期寺院には畿内的影響が強く認められるので、太宰府地方の古瓦や、朝鮮系古瓦の影響が大きい豊前地方の古瓦と同視することがはばかれるからである。以下今回の調査結果を項目ごとにまとめることとする。

(小田富士雄)

粘土の巻き方

製作時の第一段階として、粘土塊から粘土を切り取り模骨に巻きつける作業が必要である。その場合二種の方法がみられることは前項「平瓦・丸瓦」でも述べた。すなわち、でき上った瓦の側縁に平行した重ね目をもつ場合(1)と、これに直行した重ね目をもつ場合(2)であって、前者を粘土重ね目と呼び後者を輪積みと称することにする。(1)の方法では粘土の重ね目は瓦ごとに必ずしも観察されるとは限らないが、(2)の輪積み法による場合には瓦ごとに接合部が現われることになる。この二種の粘土巻き技法は凸面の叩き技法ともかわりをもっていて、(1)の粘土重ね目は叩き文様のいかに拘らず行なわれるが、(2)の輪積み技法は編目叩きに限られる。これは平瓦に限らず丸瓦においても例外はないようである。

ところで輪積み法によった場合でも模骨が桶状をなす限り各輪ごとにどこかで側縁に平行した重ね目が存在するはずであるが、そのような資料は発見されない。輪積みの場合の粘土ひもの巾は4~5cmが普通である。(図版第四五・四七)この粘土の輪末端の接合ヶ所が発見されないことは、とくにこの種の技法をもつ瓦が通常の桶造りと異なった製作法によるのではないかとの疑問をいだかせるものである。輪積み技法をとる平瓦でも明瞭に桶板の痕跡がみとめられるから同様の模骨によって曲率をつくり出していることは間違いない。してみればその模骨は桶状に円筒を形づくるものではなくて、平瓦一枚分あるいは二枚分の半円筒状のものであるかも知れない。このことはつぎに続く問題あるいは側縁の仕上げ法ともかわってくる。

縄目文叩き技法の問題

法鏡寺跡出土瓦のうち縄目文叩きには二種類あって、縄目に右撓り・左撓りの別があることはすでに述べたところであるが、この二つの撓り方は瓦でみる限り使用の時期に前後差はみられない。しかし法鏡寺跡における末期の瓦である複弁六葉軒丸瓦に残された縄目が左撓りであること、虚空蔵寺跡出土瓦中に左撓りが存在しないことからみれば、右撓りの場合がより一般的でやや時期が早いということが言えるかも知れない。

一方叩き痕の方向の観察によれば縄目叩きの場合には四つの場合があることがわかる（図版第三七）。すなわち、鉄端を上部において瓦をみた場合、

- (1) 左側に中心がくるような大きな弧を描いて縄目が走る場合で、これは叩く人物が左側の位置にいて叩けば当然このようになる。
- (2) 瓦の左部分と右部分で弧が反対になるもの。この場合は左右から叩かねばならないから通常の桶造りで考えるなら右に回ったときには左手で叩くという不都合が生じる。
- (3) 瓦の中央部を境として上下に叩き分けたもので、帯状に叩かれていない部分が残ることがある。この場合縄目痕は弧状にならず、上下半分ともほとんど一回で叩いている（図版第四二）。

- (4) 平瓦側縁に対し直角に縄目痕が残るもの。これは虚空蔵寺跡においてのみ出土している。

(4)のように縄目痕が残るには、はご板状の板に木目に直角に縄を巻きつけた叩き板を想定した場合は、かなり低い位置に置いて上から叩かねばならない。また(3)の場合では、中央部に帯状に叩き残しの部分が残ることは(1)・(2)と同様の叩き方ではないことは明らかであって、一般に考えられているような桶造りの方法では起り得ない。では瓦を水平にして造る一枚造りの方法ではどうか。瓦を水平にして造るならば、造瓦者は瓦の四而どの位置からも瓦に向うことは容易である。したがって(3)の場合も左手で叩く必要はなくなるわけである。

以上のように考えてくると縄目叩き平瓦の中には一枚造りの行なわれた瓦のある可能性が強くなって来る。

(真野和夫)

模骨の種類と連綴法

平瓦桶巻作りの技法の痕跡を瓦の上に最もよく指摘できるのは、瓦の凹面に巾三〇五mmの桶板圧痕がのこされていることによる。民俗事例の示すところではこれらの桶板三〇枚程度を連綴して閉閉式の桶模骨をつくり、これに布を巻き、その上に粘土を巻くわけである。この場合、桶枠の高さは瓦の長さより若干高くなり、桶の径は上端が小さく、下端が大きくつくられている。したがって、平瓦の上端(狭端)と下端(広端)の法量の相違は模骨の上下端の径の相違によるものであると推察される。そこで法鏡寺跡金堂地区から発見された完形あるいは上下端の完存する平瓦について、長さと上下端の描くカーブから算定できる直径をまとめてみると上表のようになる。

格子目文平瓦	I	01	長さ	上端径	下端径
		03	45.3 —	37.0 40.0	49.0 —
縄目文平瓦	I	04	43.7	32.0	46.4
		05	34.0	34.0	42.8
		01	36.7	30.0	33.0
		02	36.6	33.6	35.2
	I	03	35.4	30.6	32.4
		04	33.6	30.0	38.0
		05	36.0	33.0	37.0
		06	—	28.0	—
		07	—	31.4	—
		08	—	31.6	—
		09	—	25.0	—
		10	—	30.4	—
		11	—	—	37.2
		12	—	—	29.6
	I	01	37.5	35.0	36.0
		02	36.3	33.0	38.0
		03	36.8	31.0	33.0
		04	36.0	31.2	39.4
		05	—	—	31.0

(単位・センチ)

これで見ると格子目文平瓦は長さにおいても上下端の直径においても縄目文平瓦にくらべて大きい。また上下端径の差も格子目文瓦の方が大きい。瓦から桶の大きさを復原したものに法隆寺の
上端径四七・四mm、下端径五四・〇mm、高さ五〇・
一mmの例、飛鳥寺の上端径二七・〇mm、下端径三
七・〇mm、高さ三八・〇mmの例がある。これは粘土

の乾燥、焼成による縮小率を一割一分と計算したうえでの想定といわれる。これらの事例と比較してみると、法鏡寺例では比較的に格子目文瓦が法隆寺例に近く、縄目文瓦は飛鳥寺例に近い。しかしながら上端径と下端径の差は格子目文瓦では八・一四cmあって法隆寺例や飛鳥寺例とは異なると似たような差を示しているが、縄目文瓦の場合には上下端の差は一・八cmと小さくなる。このことは大別して二種の模様が存在したことを示しているようにも思われる。

桶板の連続には板の上下端寄りの合せ目付近に孔をあけ、紐を用いて横方向に連続してゆくが、これには二種の方法があった。一は桶板合せ目の外側に紐がみえるような連続法である。この場合は紐は外からわずかにみえる。二は桶板合せ目の内側で連続する方法である。この場合には外からみると紐がほぼ板中に相当するくらい長くみえる。一般には前者の方法をとるよううで、沖繩の民俗例はその好例である。後者の場合が法鏡寺瓦にみられる（図版第四七）。

ところでさきに推定した二種の桶板（模骨）のうち、格子目文平瓦の場合は通常の桶巻作りを考えて異論ないであろうが、縄目文平瓦の場合にはもう一步考えておく必要がある。模骨の上下端の径の差が小さいことがこの特徴であったが、朝鮮の民俗例では二・四枚の木を合わせた中空四角模骨が紹介されていて、上下端径の差のさして変らないものはある。しかしながら法鏡寺跡の縄目文平瓦の場合、叩き技法の項でもふれたように一枚作りの公算が大きい事例がいくつかあげられるので、別途の考え方が必要である。平瓦の一枚作りについてはすでに「延喜式」木工寮の作瓦の条を考察することによって指摘されているが、さらにさかのぼって細板を連結した凹形の型台に布をあて、粘土をのせて作られた一枚作りの技法があったことは川原寺跡⁽¹⁾や上総光壽寺⁽²⁾の平瓦によって指摘されている。これらの事例を考えあわせると、法鏡寺瓦における縄目叩き板が補助叩きをまたずに下端までゆきとどいているものが見られるのは、凸形の桶型に似た細板連結型合を使用した一枚作りの技法が少くとも八世紀代にさかのぼって存在したことを考えさせるのである。このような凸形型台の存在についてはすでに法隆寺瓦の観察からも指摘されていて必ずしも法鏡寺の場合をもって初見とするものではない。そうすれば法鏡寺の場合には桶巻作りとならんで一枚作りの技法がすでに八世紀代を下らない頃に行われて

いたことになる。たゞしこれが九州地方全体の傾向であったとは断言できない。宇佐地方の初期寺院資料には縄内文化の影響が強く認められるので、九州における地域的現象であった可能性も考えられるからである。太宰府地方その他の地域について今後検討を加える必要がある。

次に丸瓦については丸木を加工して模骨をつくり、布を巻き、さらに粘土を巻きかさねて半切して二個の丸瓦を得る方法が民俗事例によって知られている。おそらく古代瓦の製作にあっても大同小異であったと思われる。ところが法鏡寺跡の丸瓦を検討するうちに従来気付かなかった模骨材料の発見があった。図版第四六及び四七一に示したものがそれである。これは先ず竹の如き材料を割って紐で編み運んで輦状のものをつくる。この場合紐は四段に連続されており、これをまるめて模骨をつくる。そして布を巻き、粘土をかぶせたわけである。偶々模骨下端のこされた例(図版第四六)があり、これで見ると、布が下端まで足りなかったためか、模骨が露呈しているのが観察できる。このような丸瓦の技法は法鏡寺跡の丸瓦のなかでも一部にみられるだけであったが、幸いにも軒丸瓦との関係でこのような模骨痕跡のみられるものがある。それは百済系卑瓦当文を伴うもののみにみられているので、特殊な技法であったことが知られるのである。これと同様な模骨痕跡をとめているのは、福岡県築上郡新吉富村安雲・山田瓦窯跡(剣坂無段式登壇)の行基葺丸瓦である。調査にあたった当地の宮本江氏によれば完形丸瓦で観察すると紐の連続は三段で、模骨の竹状材料は二四本くらい数えられるということであるから、円筒の場合は四八〇本くらいであったことが推察される。築上郡から宇佐地方にかけての豊前地域には七・八世紀代に新羅系や百済系の古瓦が集中してみられるところであるから、このような技法がこの地方で朝鮮系の技術を用いて行われたのではないかと思われる可能性がある。これまで九州の他地域では気付かなかった技法である。このような模骨を用いた場合には、おそらく内側に円形の輪をはめて固定したことが考えられる。平瓦の桶巻作りで「観世音寺資財殿」にみえる「輪鉄」はこれに相当するものであろうか。⁽⁵⁾

布の使用法

瓦四面にみられる布痕からは製作技法に関する資料を見出すことはできないであろうか。布は製作過程においては梓板から成る桶に巻いて成形後の桶からの取りはずしを容易ならしめ、かつ横骨の間隙への粘土の流失を防ぐ役割を果たしている。布そのものにも細・太、粗・密の違いがあつて大まかな時代判定の手掛りを与えてくれることは知られている。通常われわれが見ることのできる瓦に残された痕跡としては、布の縫目・重ね目などがあげられよう。発見された資料は縫目・重ね目はほぼ同数で、この資料だけでは桶に巻く布の両端は布筒様に縫い合わせず、ただ重ね合わせただけのものも存在したということが言えるのみで、縫目必ずしも巻く布の両末端とは断定できない。縫目には瓦の側縁にはば平行するものと、これに直行する方向（図版第四八）との二種がある。したがつて布巾が不足した場合につき足して使用したことが知られる。穴のあいた部分にあて布をした例は発見されていない。縫目は大部分が一条であるが約1cmの間隔で二条の縫目をもつ例（図版第五〇）がある。これは縫い合わせたあと重ね合せ部分端をかがつたもので丁寧な作業である。いずれの場合でも桶に巻く時には縫い合わせた端部が表面に出ないように気を配っている。なお縫い方には三種類あることが観察される。

布の重ね合わせは左右どちらが上になる場合もあり一定していない。また重ね合せ部分で布巾が不足して横骨が露呈したものもある（図版第四五）。これは丸瓦に現われたもので広端側において生じている。

瓦側縁の仕上げ

桶からはずされた円筒は、乾燥ののち、通常の大きさに分割される。分割方法を推定させる資料としては、格子目叩IV類をもつ平瓦・丸瓦においてみられる。円筒内側から粘土厚みのはばなかばに達するくらいの深さに刃物をいれて割り、割った後の破面になんらの加工も行なわない方法で、この格子目叩IV類の瓦が法鏡寺跡において使用年代のもっとも降る瓦であることは注意される。

そのほかの瓦ではすべて削りあるいは撫でによる二次調整を加えている。このうち格子目叩平瓦と縄目叩平瓦では加工面の形態が

興味ある対照をなしている。すなわち平瓦の凹面を下にして平面上に置いた場合に、小さな面取り調整を省略すれば格子目叩平瓦では側面が曲率のほぼ中心に向っている（これをAとする）。これに対し縄目叩平瓦では置いた平面と直角をなすように削られる。そして側面と凹面とで鋭角をなす部分がさらに面取されてすべて二面取りの仕上りである（これをBとする）。Bの側縁の仕上げ法をとるとき、もしこれを桶巻造りとしたならば一枚ごとに若干の余分を生じることになり当然曲率から割り出した桶の円周が3あるいは4などの完数で割れなくなるのではあるまいか。これを縄目叩⁰¹および格子目叩⁰⁴によって実験してみるならば、後者の場合狭端で90度、広端で80度の弧に分割されていて、上下で10度の違いがあるが四分割されたものとみとめられる。これに対して前者は前項でも述べられているごとく広端・狭端の径がほぼ等しい数値を示し、また格子目瓦の場合ほど整円に復原しにくい。これでは狭端が91度、広端が100度である。こちらでも上下10度の差がみられるが、こちらでは上下の径がほぼ等しいから広端・狭端の差を瓦につくり出すにはこの角度の差は当然必要となる。したがって平瓦一枚の弧が稜骨の径となす角度が⁰¹のごとくであるとすれば、桶造りとした場合は上下を交互に切り取って造るか、通常の切り離しによって造るかの二通りが考えられるがいずれにしても余分が大きい。

このことから一枚造りである可能性が強いが、資料の増加をまちたい。

（真野和夫）

同心円文叩き技法（図版第四三左上、第32図参照）

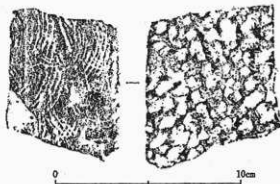
法鏡寺跡の平瓦のなかに一点にすぎないが格子目文平瓦の凹面に、須恵器にみるような同心円文叩きが発見された。凹面の割れ口近くに板の合せ目痕がみられるので、はじめ桶巻作りでつくられたものに、同心円文叩きを二次的に加えたことが考えられる。同心円文叩きは北九州では六世紀末にさかのぼってみられる最古式の瓦に施された技法である。⁰³豊前地方では大分県中津市・伊藤田窯跡⁰⁴で須恵器と共に製作されているが、これは平瓦の凸面全体に施されていて円文の巾も広く、細目の法鏡寺例とは異っている。法鏡寺

例は叩きのこされた部分に布目痕跡がみられるので、同心同文叩きは補助的工程の意味をもつものであったろう。

(小田富士雄)

註

- (1) 大川浩『日本の古代瓦簷』昭和四七年
- (2) 関野貞『美濃郡時代の遺蹟』古蹟調査報告第四冊 昭和二年
- (3) 藤島亥治郎『朝鮮瓦の製造法に就いて』綜合古瓦研究第二分冊(夢殿論誌第十九冊) 昭和一四年
- (4) 島田貞彦『造瓦』昭和一〇年
- (5) 木村捷三郎『観世音寺資財帳に見ゆる造瓦具』考古学一一卷一〇号 昭和五年
- (6) 浦林亮次『瓦の歴史』建築史研究二八号 昭和三五年
- (7) 小林行雄『続古代の技術』昭和三九年
- (8) 大川清『かわらの美——埋れた日本古代史』現代教養文庫 昭和四一年
- (9) 藤沢一夫『造瓦技術の進展』日本の考古学VI 昭和四二年
- (10) 佐原真『平瓦桶巻作り』考古学雑誌五八卷一〇号 昭和四七年
- (11) 奈良国立文化財研究所編『川原寺発掘調査報告』昭和三五年
- (12) 大川清『上総光善寺廃寺』古代二四号 昭和三二年
- (13) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書第四三集 昭和四五年
- (14) 賀川光夫『伊藤田瓦窯跡』中津市史 昭和四〇年



第32図 法鏡寺跡発見同心円文平瓦拓影

第三章 虚空蔵寺跡の調査

第1節 調査の経過

発掘調査にいたる経過

虚空蔵寺跡に関する今回の緊急発掘調査は、法鏡寺のそれと同じように、直接には、八咫館川大規模圃場整備事業の施行に先立ち寺域を確認し、保存措置を講ずるための資料とすることを目的としている。

当寺院跡は、すでに県指定史跡として公有化されている塔跡のほかは、すべて私有地である。そのうち、金堂・講堂等の推定地が宅地化されているほかは、すべて耕作中の水田となっている。従って圃場整備事業がそのまま実施されれば、中門・南門・回廊等の推定地は軒なみ被害を受けるはずであった。

また講堂推定地から北にひろがる水田でも、かつて鬼瓦等多量の古瓦を出土したのをはじめ、点々と瓦の出土例があった。これらの地域は、伽藍配置の常識からは、二義的地域であり、遺構の存在にも疑問があったが、圃場整備事業はむしろこの地域を主たる対象としていたから、この地域に於ける遺構の存否の確認も必要であった。

現地在耕作中の水田であることから、土地所有の発掘承諾書の取得は、必ずしもスムーズに行かず、塔跡に接する二枚の水田は結局発掘の承諾が得られなかった。この地区には、回廊等の存在が考えられ、遺構の保存状態も最も良好と思われる地区であったが、土地所有者が圃場整備事業をも拒否していて、当面破壊のおそれもなくなったため、この二枚の水田調査は断念することとなった。かくて今回の調査は、圃場整備事業のさし迫っている北方地区の遺構存否の確認を主たる目的とし、あわせて中・南門推定地の遺構を探索し主要伽藍を中心とする寺域の確認を行なうこととした。

調査の大半がトレンチによる調査に終始したこと、日程の大半を遺跡としては二義的な北方地区のためにさいいたのは、こうした趣旨によっている。金堂・講堂を中心とした主要伽藍の本格的調査は後日进行したい。

調査は十一月八日から十五日間にわたって実施された。

調査団の構成

調査団の構成は次のとおりである。

調査員

賀川 光夫 (別府大学文学部教授・県文化財専門委員)

小田 富士雄 (別府大学文学部助教授・県文化財専門委員)

岩尾 松美 (別府大学文学部嘱託)

後藤 宗俊 (県教育庁文化課)

清水 宗昭 (同 右)

長野 雅臣 (宇佐市教育委員会)

小倉 正五 (同 右)

調査補助員

真野 和夫 (九州大学大学院学生)

栗原 孝幸 (別府大学文学部学生)

山手 誠治 (同 右)

網田 克美 (同 右)

なお調査にあたっては、宇佐市文化財調査員・元重康直・中島隆吾・麻生武・入正正敏・佐藤四五の諸氏に終始協力をいただいた。また、地元宇佐市山本区民各位・駅川中学校生徒・宇佐農業高校生徒の協力を得た。

発掘調査の経過

調査は予定どおり、北方地区の探索から着手し、次第に中門、南門地区に寄せて行く日程を組んだ。本格的発掘開始にさきだし、一帯の地形測量のための杭打ちを行なった。以下、調査日誌からの抄記によって、発掘調査経過の概要を記す。

十一月 八 日 午前中、現場へ器材運搬。午後杭打ちにかかる。基準線は塔跡北側水田の畦畔にあわせる。その方位角N二四度二一分四〇秒を得る。以下トレンチの設定にあたってはV、Ⅳトレンチを除き、すべてこの方位角によった。なおこの測量基準線は塔跡礎石列の南北線より六度ほど西にずれている。

十一月 九 日 杭打ち作業続行。基準点を塔心礎穴中央とし、奥道宇佐―安心院線沿いの仮水準点より標高を移し、基準点の標高(二七・七八三m)を得る。

十一月 十 日 講堂推定地北方約一〇〇mの地点から南へIⅢトレンチ設定、北方地区の遺構探索を開始。

十一月 一 日 Iトレンチを礎石上面まで露出、トレンチ北端部に、幅約三m、深さ〇・六mの、ほぼ東西に走る溝を検出した。

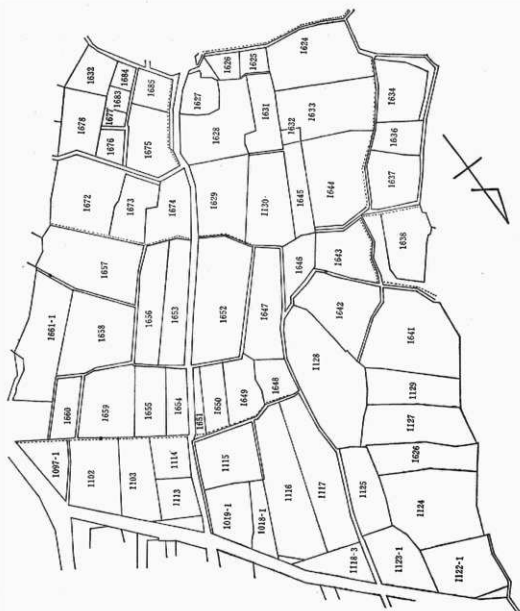
並行して地形測量開始、将来の地形の改変を考慮して、方約二〇〇mを対象とする。

十一月 十二 日 IIトレンチの発掘をすゝめ、Ⅲ層より瓦、青磁、白磁片等出土、礎石なし。

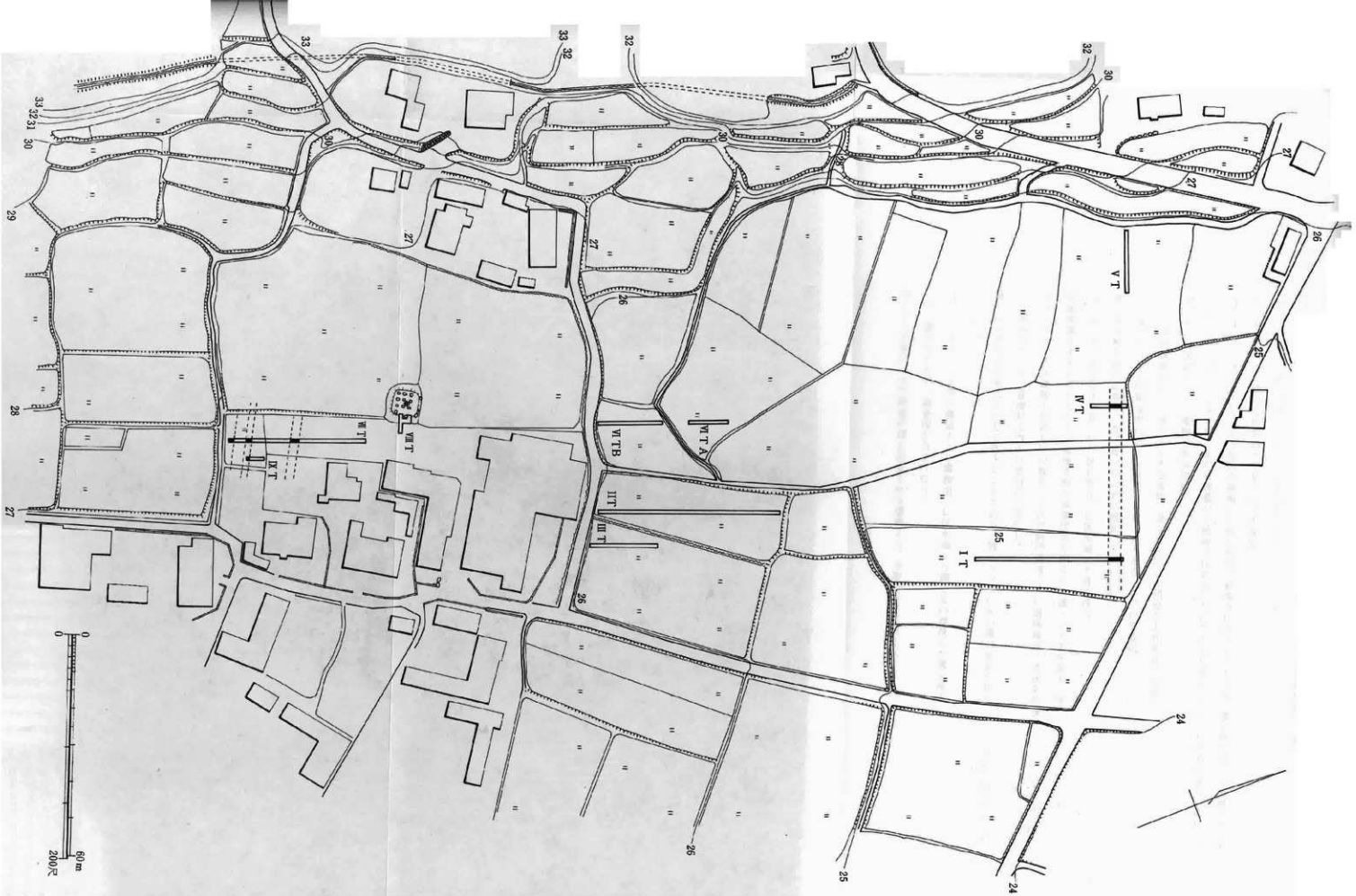
十一月 十三 日 IIトレンチ南端部近く、IV層上面より瓦出土。

午後IIIトレンチの発掘作業をすゝめIIトレンチと同様、IV層上面に瓦の出土をみる。

Iトレンチで確認した溝の走向を探索するためIVトレンチ設定。



第33図 虚空藏寺跡付近地籍図（宇佐市大字山本）（約1/1200）



十一月十四日 I・II・IIIトレンチ等、清掃後実測にかかる。IVトレンチより、Iトレンチの溝の延長を確認。

十一月十五日 雨天のため、午前中サネラルサーベイに出る。午後ミーティング。

十一月十六日 I・IVトレンチの溝の走向を追ってVトレンチを設定。

I・Vトレンチによって、北方地区の様相の大略が判明、建築物に伴う瓦の出土は、講堂推定地の北30m以南に限られること。Iトレンチの溝の走向は伽藍の主軸線とは直交しないこと等を確認、これより調査の重点を塔跡、中門、南門地区にうつす。塔跡の実測開始。

中門、南門探索のため、IIIトレンチを塔跡、金堂推定地の中間地点より南北に設定。

II、IIIトレンチの西側溜田にVIトレンチを設定、出水著るしく、作業難航。

駅川中学校生徒の応援で、II、IIIトレンチの埋戻しをすゝめる。

十一月十八日 VIIトレンチ、北よりA・B・C三区に別け、C区南端にて溝を検出。

塔跡実測をすすめるかたわら、基壇東側の構築状況を探るためVIIIトレンチを設定。埴土片が出土した。

十一月十九日 VIIトレンチ・A区礎層上面に瓦片の散布、C区で南門基壇らしい遺構確認。塔跡東側VIIIトレンチでは、基壇化粧面

はつかめなかった。基壇封土内より夜臼式土器出土。

VIIトレンチC区の東に並行してIXトレンチを設定、VIIトレンチC区の溝の延長を検出、走向は伽藍主軸線に直交するらしい。

十一月二十日 VIIトレンチB・C区間の農道下より溝検出。C区南端より礎と瓦の埋没した溝を検出。

午後、豊川小学校にて調査報告会を行なう。

十一月二十一日 VIIトレンチB区、中門南側の溝と推定される遺構より、多数の軒平、軒丸瓦を出土。

発掘作業、実測、写真撮影完了全トレンチ埋戻し。

十一月二十二日 埋戻し完了、撤収。

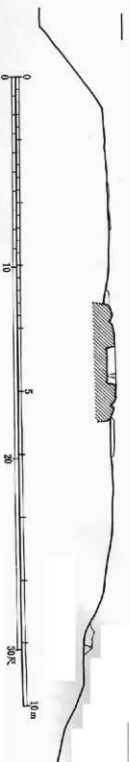
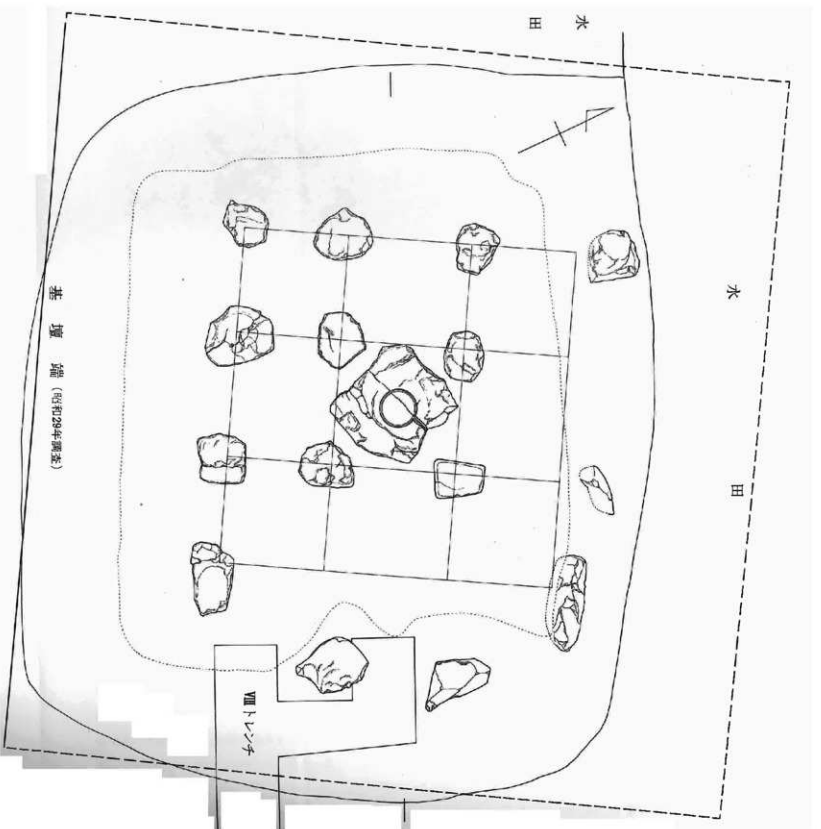
(後藤宗俊)

第2節 塔 跡

遺 構

塔跡基壇は大字山本一六三二番地にあり、東側を宅地に接し残る三面を水田によって囲まれている。礎石は心礎を含み一個がほぼ原状を遺存して伽藍配置の方向を決定する上で重要である。しかしながら、北側のならばでは西隅から二番目にあたる礎石を欠失しているうえ他の三個も転落寸前の状態となっており、つづいて東側の二個も動いている。これは基壇の北側および東・西両端が少しずつ削り取られたために生じた現象で、基壇下面は現在南北約一〇メートル、東西一一メートルを測る。ところで昭和二九年に行なわれた塔基壇南側の発掘調査の結果、基壇は一辺三八尺(約一一・五メートル)と確認されているから、北側で約一・五m、東西あわせて〇・五mがすでに削り去られてしまっていることになる。したがって、基壇の露出ははじめからあまり期待されず現状の平面実測を行なうとともに東側基壇端をかけて東西に小トレンチを設定したのであった。

まず平面の状態からみてゆけば、基壇の大きさは下面現状が前述のごとくであり、上面は南北七m・東西八mの長方形の平坦面をなし、この平坦面にある礎石一個はほぼ原状を保っていると考えてさしつかえない。心礎は一辺約一・六mの方形状に荒く整えられたもので、中央に円形の切込みを有する。切込みはやや外開きに造られ上面径六〇cm・底径五六cmである。底部には巾二cmの浅い溝が周囲に巡り北東方向に抜けている。底部および礎石上面は平坦に整形されているが、上面はひび割れ・剝離が著しい。他の礎

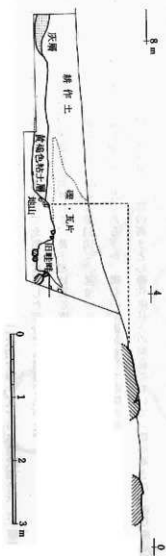


第35図 庫空蔵寺塔跡実測図

石は大きさが六〇七〇×八〇cm前後の楕円形ないしは長方形状に荒く整えられていて、上面は心礎同様剥落の目立つものが多いが、円形平坦面の痕跡を残しているものがあって旧状をうかがうことができる。礎石全体にみられるこのような表面の状態は、出土古瓦あるいは埴仏などの状態と合わせて塔が火災を受けたことを思わせるに十分である。心礎円形刻込みの底面を基準とした各礎石上面の高さはマイナス三・二cmとなつて傾斜している南東隅の一個を除いて、プラス〇・四〜八・五cmの間にある。なお、昭和二九年の調査によると礎石には根締石の使用は認められていない。

これらの礎石群を満足する方形のプランを求めると中の間が六・五尺、両脇間が五・五尺の三間からなる一辺長一七・五尺の建物で、主軸の方位はN三〇度Eである。

次に基壇断面の調査では、東側基壇端にかけて長さ四・八m、巾一mのトレンチによって探索した結果、東側ではかつて水田とな



第36図 虚空蔵寺跡（■トレンチ）土層図

った際に破壊されたとみられ、南側で発見されたような瓦積み状態はみとめられていない。しかし地山をなす礫を含む黄褐色土層に心礎中心から五・七mの距離で段落ちがみられ、これが南側で確認された一辺長のまにはほぼ一致するところから基壇端最下部の造成にかかるものとみて誤りのないところであろう。基壇内部の状態は二次的な礫・瓦片の集積状態を示し、版築をみとめるところまでいいていない。これは、このトレンチに連続して北側に拡張した部分でも同様であった。

なお、昭和二十九年の調査では、南側が発掘されて、最下部に石を置きこの上に平瓦を垂直に数枚積んだ状態が残り、一辺長三八尺の所謂瓦積基壇であったことが確認されている（第53図）。基壇の高さは約三尺あり、周囲はほぼ現水田面の高さとも一致する。

さて、基壇上にはどのような塔が建っていたであろうか。礎石の配置からして中間六尺五寸、脇間五尺五寸よりなる一辺長一七尺五寸の塔であったことはすでに述べた。また、塔の高さと心礎柱座径との関係において「塔の高さは心礎柱座径の四十倍前後⁽²⁾」という推定をあてはめるならば、

$$2 \text{ 尺 (心礎柱座径)} \times 40 = 80 \text{ (尺)}$$

となる。さらに塔の一辺長と心礎柱座径との間には、「心礎が大きくてその割合に平面一辺長の小なるものが高層塔」となり、「心礎が小さくてその割合に一辺長の大なるものが層数の少い塔」と相互に規制する関係にあるから、一辺長と心礎柱座径には、

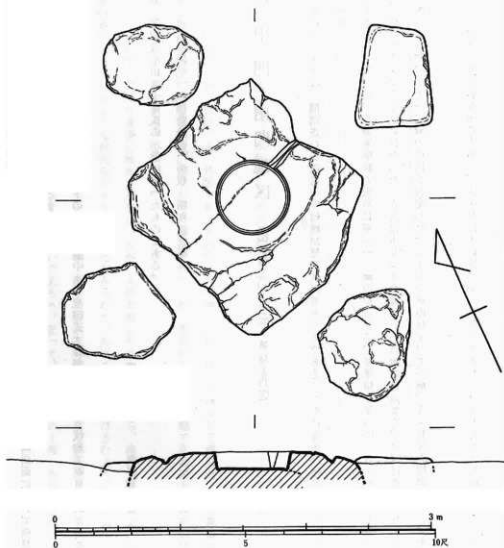
$$17.5 \text{ (尺)} + 2 \text{ (尺)} = 8.75$$

の関係が成立つ。ここで「塔一辺長が心礎柱座径の九又は一〇倍のものは三重塔」との統計上の結果をあてはめるならば、この塔は三重塔であったことが推理される。

以上のようにみえると、虚空蔵寺跡塔は瓦積基壇を有する一辺長一七尺五寸を測る高さ八〇尺ばかりの三重塔であったことが推察される。

遺物の出土状態

塔跡に設定した埋トレンチおよび基壇上において多数の瓦片・埴および埴仏の破片が発見された。塔跡上面は長年の間に礫および瓦片によって葺石状におおわれた状況を呈しており、とくに今回トレンチを設定した位置は礫が集積した状態になっていた。したがって発掘区以外では軒先瓦・埴・埴仏など主要な遺物にとどめた。発掘区以外の塔跡上での採集にかかるものとして



第37図 虚空蔵寺跡塔心礎及び四天柱礎石実測図

は、法隆寺系忍冬文軒平瓦、新羅系軒平瓦、埴、埴仏片などがあげられる。裏面に文字を陰刻した埴仏は基壇南斜面において発見された。発掘区では、法隆寺系忍冬文軒平瓦を数点検出したにとどまる。

また直接塔とは関係ないが、Ⅶトレンチ拡張区において版築下の黒色土層中より夜臼式土器がまとまった状態で発見された。この時期の遺構が存在するとみられる。

(真野和夫)

註 (1) 石田茂作博士調査。詳細は小田富士雄氏の示教によったものである。

(2) 石田茂作「塔の中心礎石の研究」『伽藍論叢』所収 昭和二十三年

第3節 中門・南門地区

(図版第二〇～二四・第38～39図)

塔跡東南の畑地と、これに南接する水田は、推定される伽藍の中軸線が想定されるところである。ここに南北方向のⅦトレンチを設定し、中門・南門の遺構を探索した。

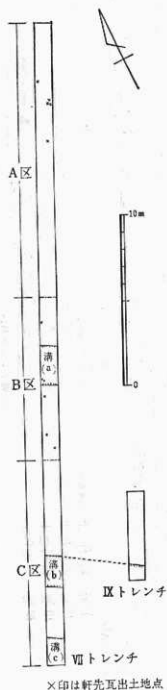
まず、塔心礎の枲穴中心を基準点として、地形測量基準線と直角に東へ一mの地点から、基準線と並行に二・五・五mのトレンチを設定、これを現地の畦畔を考慮してA・Bの2区に区分した。A区はトレンチ北端より一六mの地点まで、B区はその南九・五mの長さとなる。さらにB区の南の水田に、長さ一二mのC区を設定した。(トレンチ巾はすべて一m、A・B区の畑地と、C区水田は三〇cmほどの比高をもつ)

第I層灰褐色土層(耕作土)、および第II層黄褐色土層は、A・B区とC区のレベル差こそあれ、ほとんど水平に展開する。水田

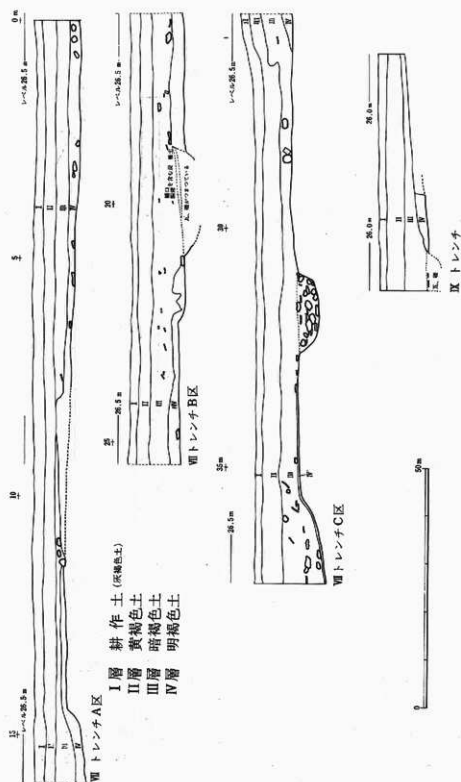
として耕作中のC区は勿論、A・B区の畑地もかつて水田として造営されたものであり、I・II層がそのための二次的土層であることは言うまでもない。

創建時の古瓦をふくむ第三層（暗褐色土層）には、A・B区でおよそ四〇～五〇cm、C区では六〇cmほどで達した。この第三層はあきらかに中世、近世に属するような遺物は包含していないが、かなり攪乱されていた。遺構にともなう状態で瓦の出土をみたのは第三層（線をふくむ明褐色土層）直上においてである。

さて、中門の遺構については、礎石等の明確な遺構は検出されなかったが、A区北端より八mの地点から、南へ六・六mにわたって、IV層が高くなり、この部分だけ削り出したような状況を示す土層の変化がみられた。瓦はこの区間をばさむように南北両側に散布していた。特に北側は遺厚で、中には直立、倒立した形で出土もみられ、数点の軒丸瓦、軒平瓦を含んでいた。この出土状態は中門北側軒先から、何らかの理由によって落下した状況を推定して大過ないであろう。従って、この地点の土層（IV層）の傾斜をもつて、中門土壇の北縁を考えることは充分に可能であろう。



第38図 虚空蔵寺跡VII・IXトレンチ
平面実測図



第39図 虚空蔵寺跡Ⅶ・Ⅸトレンチ土層実測図

なお、これより南、B区は中央の地点に、IV・V層を切り込んで掘られた溝(a)が検出された。これは検出面で巾二・四mを測る。溝は多量の礫と、完好な軒丸瓦・軒平瓦をふくむ瓦で埋められていた。この溝は調査の最終段階で検出されたため、完掘されなかったが、深さは、検出面から五〇cmを下らない。

この溝は、さきの中門北縁と推定した土層の傾斜地点から一一mの地点にその北壁を持つ。これを中門南側の側溝と考えれば、この一一mの間に、中門土壇がおさまることとなる。而してこの場合、さきの土層の盛り上がり、この側溝の北、四・四mの地点で切れており、これから溝までのあいだは四〇cmの厚さで第IV層を乗せていることが問題となろう。

なおこの溝(a)の検出面に、流れこむように広がった焼土、炭とともに、銅鏝、轆口数点が出土した。その出土状態からそのままここに製銅工房などの遺構が存在したとは考えられないが、これらの遺物が、この側溝の埋没時期をそれほど下らない時期に比定されることは指摘出来よう。

ⅦトレンチC区は主として南門探索を目的に設定されたところである。ここでは、トレンチのほぼ中間地点に、やはりほぼ東西に走る溝(b)、同じくトレンチ南端に溝(c)が検出された。

溝(b)は検出面で巾一・七m、深さ五五cmを測る。溝(a)と同じく多量の礫で埋められ、完好な軒丸瓦、軒平瓦を含んでいた。

一方溝(c)はⅦトレンチ南端より一・九mの地点にその北壁をあらわしたもので、南壁はトレンチをはずれる。復原するところ、巾三mを下らず、伽藍南端を劃する溝としての意味をもっている。またこの溝には、溝(a)(b)でみられたような、多量の瓦の投入はなく、自然に流入した礫と、溝底の杭状のものによると思われるピットが注意されたのみであった。

この二つの溝(b)(c)の間隔は、三・一mを計る。この間隔は、築地本体と大走りを合わせた巾として妥当であろう。

なお溝(b)の走向を追って設定したⅧトレンチ(ⅦトレンチC区、東北端から東(四m)の地点からⅦトレンチに並行して五mを設定)でも、溝(b)の延長を確認することが出来た。やはりこれも、瓦礫が多量に投入されていた。

かくて溝(b)の走向は、ほぼS六〇度Eとなり、塔跡礎石列の東西線にほぼ一致することが確認された。

(後藤宗俊)

第4節 北方地区

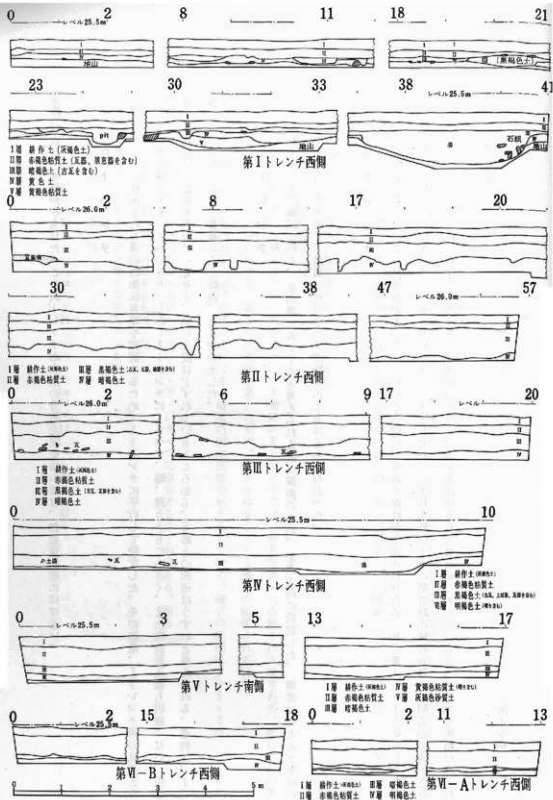
主要伽藍配置の北限と考えられる和田昇氏宅北側の東西市道より北方に、伽藍附風違構探索のため、発掘順序に名称を付して、I、II、III、IV、V、VIトレンチまで六ヶ所発掘した。

I トレンチ

その東側より、かつて鬼瓦をはじめ古瓦が出土しているので、遺構探索のため設定した。I層の水田耕作土の下の第II層には、須恵器瓦器の混入がみられ、第III層は古瓦の破片が出土した。第IV層下の地山とみられる上面には自然標の堆積がほぼ全面にみられた。トレンチ北端部近くには、III層から地山に切込んだ、幅三・四m、深さ〇・六mの東西方向の浅い溝が検出された。溝傾斜面は北側がつよく、やや大きめの安山岩角礫による、溝に関連ある石組みがみられた。溝に古瓦が伴なうことから、時代は正隆につきかみがないが一応白鳳期を下限とすることができるところである。この他に遺構らしきものは、トレンチのはば中央付近に、径約五〇cm、深さ二五cmの円形ピットが検出されたにすぎなかった。

II・III トレンチ

和田氏宅北側道路に接して、八mの間をおき、Iトレンチと同一方向に設定した。ともにトレンチ南端部より約二m地点まで、



第40図 虚空蔵寺跡北方地区各トレンチ土層実測図

濃密な古瓦の堆積がみられた。この両トレンチの古瓦の分布北限を結ぶ線は、伽藍東西線には近い。

IV ト レ ン チ

I トレンチで検出された溝の西側延長部を確認するため、I トレンチに平行して設定した。その結果、I トレンチ溝の延長とみられる浅い溝を検出することができた。しかしI トレンチにくらべて、幅、深さともに小さく、また南側落込線も明確でない。両者の溝を結ぶ線は、伽藍東西線に一致せず、北に七度ほどずれているところから、寺跡との関連はうすいと考えられる。遺物は、I、II 層から須恵器、瓦器、Ⅲ層から土師器、古瓦が出土した。

V ト レ ン チ

I、II トレンチで確認された、東西溝に直交すると考えられる溝の探索のため、東西方向に設定した。層位はほとんど変化のない、水田下特有の水平層で、遺構は検出されず遺物の出土もほとんどなかった。

VI ト レ ン チ

主要伽藍配置の北側で、かつて溜池があったといわれる水田に、瓦溜の存在が予測されたため、II、Ⅲトレンチと平行して設定した。二枚の水田にわたって、北よりa・bの小トレンチとしたが、いずれも耕作土下の第II層の堆積が厚く、明らかに埋土とみられた。b トレンチでは、約一冊下より地下水の湧出がはげしく、古い溜池の存在を首肯せしめたが、古瓦の集中的な堆積はみられなかった。

(清水宗昭)

第5節 遺物

蓮花文軒丸瓦 (図版第三九・四一・第41・43図)

今回の発掘調査によるものは、すべて中門、南門地区 (VII・IXトレンチ) の重層、および溝状遺構埋め土内より出土したものである。(第41図1~7)

これに昭和二九年の調査の際、塔跡から出土したもの (第42図21・22) および南門付近で採集したもの (同図24)、北方地区採集品 (同図25) を加えて報告する。

これらは形式上、四類に分類整理することができる。

I類 (第41図6・第42図21・24)

蓮弁は複弁八葉をもって構成される。弁の造形は、木造跡の軒丸瓦の中では、最も重厚かつ洗練された類である。而してこの蓮弁は輪郭の線がそれとしては完結せず、蓮弁間の楔形小葉とともに、花卉全体をふちどる圓縁に吸収されている。

中房は、21のみしか資料がないが、これによればその縁に凸縁の回縁をめぐらしている。蓮子の配列は1+5+9か、1+5+10となろう。

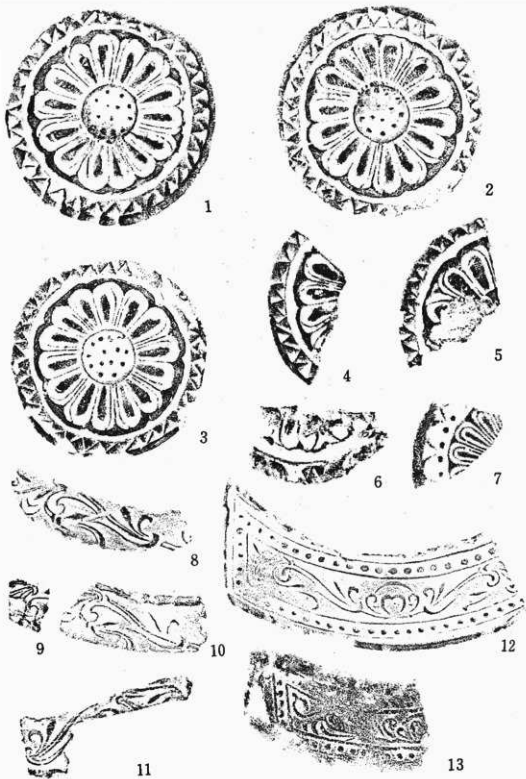
而してこの類は、周縁部の特徴からさらに次のA・B・Cタイプに細分することができる。即ち

A 面違鋸齒文を配し断面傾斜するもの (21)

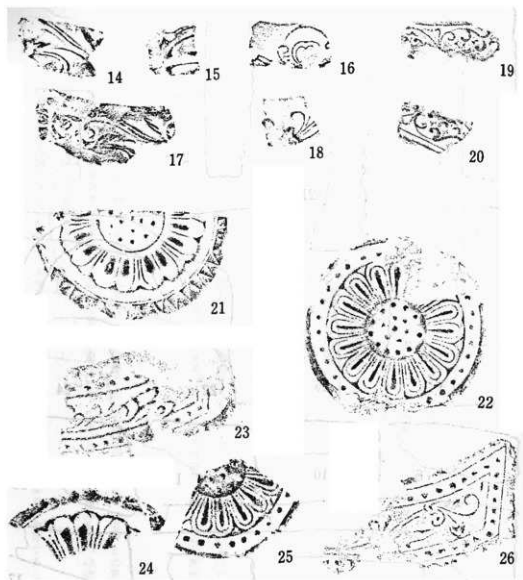
B 面違鋸齒文を配するが平縁となるもの (6)

C 周縁部素文のもの (24)

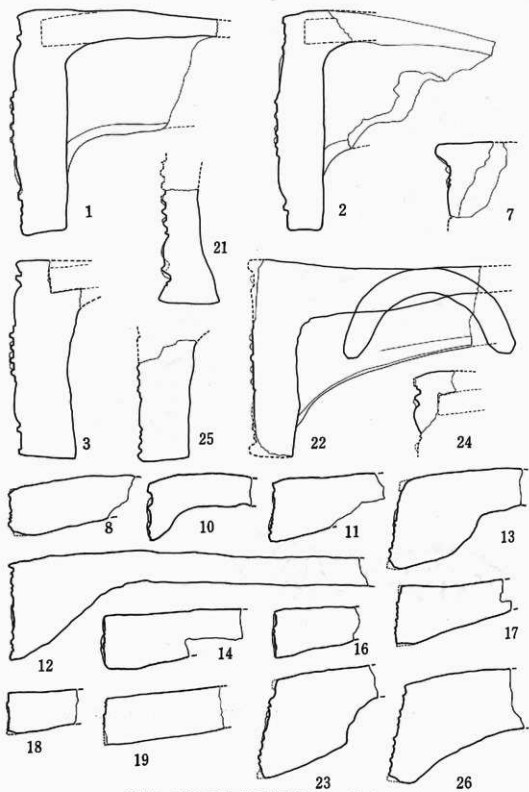
の三群である。復原径は6 (一八cm)・21 (二六・六cm)・24 (二七cm) を測る。



第41图 虚空藏寺・中門～南門跡地区瓦当文様拓影 (1/3大)



第42図 虚空蔵寺・塔跡(14~23)及び遺跡周辺採集(24~26)瓦当文様拓影(大)



第43图 虚空藏寺脉出土瓦当断面实测图(1/4大)

Ⅱ類 (第41図1~5)

蓮弁は複弁七葉となる。花卉の造形はⅠ類に比して粗放な感じを否めない。花卉の輪郭の線が、楔形小葉とともに花卉全体を縁どる圏線に吸収されるところは、Ⅰ類と同じである。而してこの圏線はⅠ類より肉太く放置され、本来花卉を縁どるはずであるのが、結果としては、弁区と周縁部のあいだに、造形上の空白を置いたような効果をもたらしている。

花卉の配置にもやや恣意的なところがあり一弁だけはバランスをくずしている。

中房は、弁区とのあいだに段を有するほかは周縁の圏線はない。蓮子の配列は $0+4+10$ となり中心蓮子を置いていない。周縁部は面縁断文をめぐらす。総じて平面的な仕上がりである。

丸瓦との接合は深くなく、接合部はヘラ、指圧による整形痕を残している。

灰青色を呈する3をのぞき、灰白色のやわらかみのある焼成である。瓦当面径は一五・五cm一七・五cmにおさまる。

Ⅲ類 (第41図7)

蓮弁は単弁化し十六弁となる。周縁の断面が傾斜しここに凸縁断文をめぐらす。弁区と周縁のあいだに珠文を記している。この珠文は蓮弁一葉に対し二個を配し、これに波線文一単位が対応する。従って珠文は計三二個となる可能性が高い。瓦当面復原径一六・八cm。

Ⅳ類 (第42図 22・25)

蓮弁は複弁八葉に属するが、複弁一単位を構成する二つの子葉のあいだに界線を入れている。この界線は、本来の楔形小葉と意匠上の相違があるから、これを複弁八葉と断することに差支えはないが、一見したところ複弁を二つの細弁に分化したように見える。而してこの界線は二~三箇所で省略されている。

なお25の場合、この界線を有していないが、本来これを欠くものか、丁度省略された部分の破片であるのかは、この資料では断定し

えない。

弁区と素文の周縁のあいだには珠文を置く。珠文は複弁一単位に四個の配列がなされているから、復原するところ三二個となる。中房は弁区とのあいだにわずかに段をもって造出される。蓮子は1+5+11となる。

中房径は五〇cm、瓦当面径は一五・一六cmを計る。

丸瓦は瓦当面にはほぼ直角に接合され、へうおよび指先で整えている。丸瓦裏面の布目は瓦当面より約三・五cmのところまで消されていく。
(後藤宗俊)

法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦 (図版第四〇・四一・第四十二)

虚空蔵寺跡における法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦については、法隆寺跡と同様小田富士雄氏による分類・編年にしたがう(第31図参照)。

I 類

8~18は中心飾の文様・無縁・薄手の断面からI式に類するものである。このうち10は瓦当面の文様がI類に属しながらも断面は四・六cmと厚く、他のI式のうちでも頸部の發達が目立つのである。また瓦当面には約八cmの上縁部が有り、この型は過去に発見例がない。しかし文様の共通性を重視してI式とした。なお、11や17なども無縁であるが断面の厚いものである。

V 類 (12)

12は瓦当面右端の一部を欠損するが、瓦当面の復原長二六・五cm、幅八cmと大形である。周縁に約一・二cmの二重函を設け、その間に中心飾の上下に各一個の珠文を置いて、左右に同数を配した周縁文が推定される。文様はI式のような流麗さは失われている。とくに左端部の欠損によってその半分が失われた二節目の蕾は、中心飾に近い隅にみられ、V式に類別されるものである。なお瓦当

面の広さに比べて頸は薄く、いわゆるなで頸状に作られている。ⅦトレンチB区出土。

26は復原長二九^{cm}、〇^{cm}、巾七、五^{cm}。虚空蔵寺跡より北に約六五〇^mの地点で、圃場整備のための土木工事のさい発見されたものである。右半分にあたる部分の瓦当文から、12と同類であり、その欠損部を補う。

Ⅶ類 (13, 23)

13は、復原長二九^{cm}、巾七^{cm}瓦当部の右半分を欠損したものである。磨滅が著しいため、瓦当文は観察しがたいが唐草文は簡素な線表出で結節や蕾はくずれている。これは小田氏の分類によるⅦ類に相当する。Ⅶトレンチ出土。

23は復原長二八^{cm}、巾七・五^{cm}、昭和二十九年の調査の際のものである。瓦当部の左半分を欠損しており、13と対称的になる。文様のくずれは著しく、唐草文の結節や蕾は失なわれて、文様の肉太さはすでにない。瓦当面の傾斜はやや大きく、断面は中頸となる。

(小倉正五)

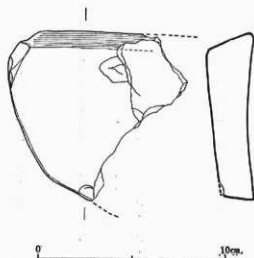
新羅系唐草文軒平瓦 (図版第四一・第42図19, 20)

塔跡より二点出土している。文様は流麗な宝相華唐草文を右から左に波状に連続させたもので、繊細ではあるが多少浮彫的手法をみとめることができる。唐草文は蔓草・小葉・開花からなる単位を交互に反転させたものである。瓦当面は約巾3.2^{cm}ほどで、ほとんど頸の張出を感じさせない。

(真野和夫)

面戸瓦 (図版第三四・第44図)

Ⅶトレンチ(塔跡基壇東側)より出土したもの一点がある。



第44図 虚空蔵寺跡出土戸瓦実測図

平瓦を二次的に利用したもので、この種瓦に通有の、丸瓦と接する弧状のくびれ部をもたず、平瓦と接する部分だけで出来ている。

従って復原される平面形は半月形となる。側縁部の削り出しはヘラによっているが、研磨されほとんど痕跡をとどめない。裏面に布目を残す、胎土に砂粒をふくみ、焼成はあまりよくない。

(後藤宗俊)

塼 (図版第四四)

塔跡出土の三点がある。いずれも無文のもので胎土に砂粒をふくみ、焼成にもムラがある、赤褐色ないし暗褐色を呈する。一点だけは後に丸味をつけている。いずれも表面に整形痕を残さない。厚さはそれぞれ五、〇 cm、五、二 cm、五、四 cm。巾は一点だけ計測可能だが一〇、〇 cmを計る。長さを測る資料はない。

(後藤宗俊)

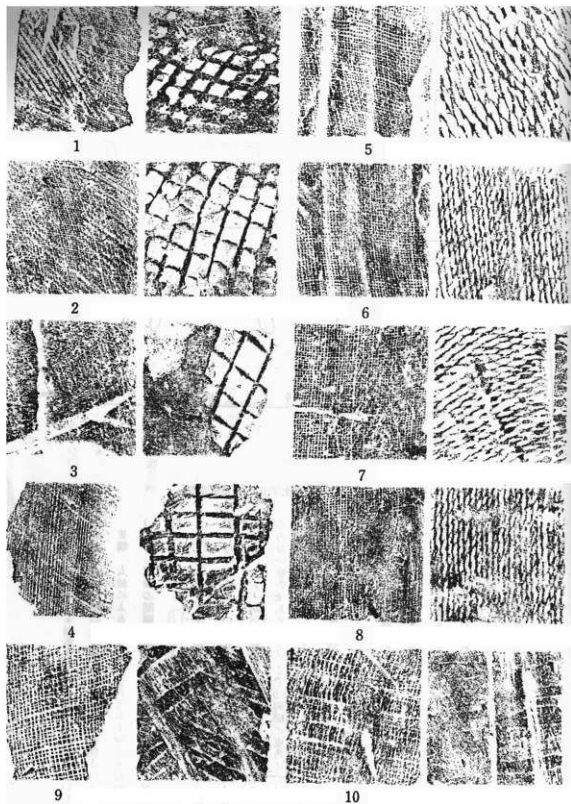
平瓦・丸瓦 (図版第四二・四三・第45図)

虚空蔵寺跡の主要な瓦はⅦおよびⅧトレンチにおいて発見されたものである。法鏡寺跡出土瓦の場合に準じて叩きによる分類を行なえば次のようになる。すなわち、平瓦では格子目叩きが三類に分かれる。

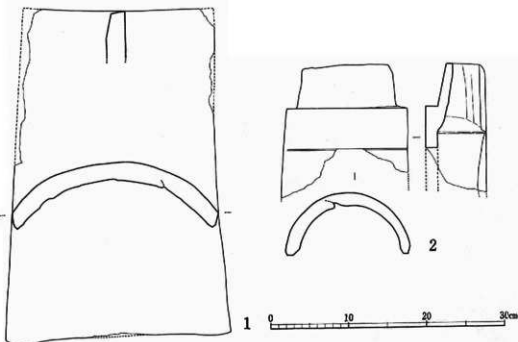
I類 太線による正格子叩きでこれがさらに二つに分けられる。

A 線の間隔約0.6と0.7 cmの格子目で法鏡寺跡の場合の格子目I類に対応する。(第45図1)

B 線の間隔約1 cmほどの格子目。法鏡寺跡の場合の格子目II類に近い。(第45図2)



第45図 虚空蔵寺跡発見瓦の印文様・布目拓影集成 (1/2大)



第46図 虚空蔵寺跡出土平瓦・丸瓦実測図

Ⅱ類 太線による斜格子叩き。線の間隔は1.2ないし

1.3 cmほどある。線の太さが最も太い。(45図3)

Ⅲ類 太線による長方形格子目で巾1 cmの平行線に

1.3ないし1.7 cmの間隔で格子目をつくっている。(第45

図4)

次に縄目叩きでは、法鏡寺跡でみられた左攪りの縄目がなく、右攪りのみが存在する。これを縄目叩Ⅰ類とする。なお、縄目は側縁に沿ってほぼ平行に打たれるのが一般的であるが、ここでは側縁に直角につけられたものが存することは注意すべきで、この種の打ち方を示す平瓦は法鏡寺跡では発見されていない。(第45図5～8)

これら格子目・縄目叩きのほかに平行線の叩きをするものがある。平行線叩きは通常の場合、平行線が陽刻されるがここでは、0.7～0.8 cmのほぼ同じ巾で凹部と凸部が交互に表わされている。叩きは浅く、木目に對しほぼ直行している。(第45図9・10)

以上のほかに表面を平滑にした素文の瓦がある。こ

のなかには、成形時の叩きをうかがう資料として、格子目Ⅰ類・縄目の存在が知られる。

丸瓦の場合では、縄目叩きⅠ類と素文がある。素文のなかでもとの叩き痕を残すものには縄目がある。

虚空蔵寺跡の発掘では、発掘区が少ないことから、瓦も断片的な出土をみたにすぎず瓦の法量・形態について詳述することはできないが、平瓦では昭和29年の発掘に際して発見された完形品がある。縄目叩きⅠ類に属するもので大きさは、長さ23cm、狭端24.5cm、広端29cmを測る。丸瓦は、発掘では行基堂と断定できるほどの資料は発見されていない。

瓦 釘 (第47図)

断面方形の瓦釘の先端とみられる鉄製品が第Ⅲトレンチより出土した。

鉄 鑑 (第47図)

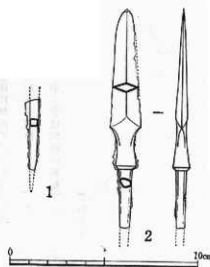
鉢の部分が6cmの長い鑑である。太い寛被状の剣り込みがあって茎へ続く。構造である。虚空蔵寺とは関係のない時期の降る遺物である。

(真野和夫)

埴 仏 (図版第三八)

埴仏は今回の調査では小片を含めて約3〇ほど出土している。ほとんどがも以下に破砕していて火災の形跡がみとめられる。昭和二九年の調査時には約六〇ほど発見されたという(第56・57図)。

大きさは縦横原長約六・五cm、横巾約五・三cm、厚さ約一cmある。大きさはほぼ斉一であるが、横巾四・八cmを測るやや小型の例があって范の違いによるものか焼成時の焼けしまりによるものかは明らかでない。



第47図 虚空蔵寺跡出土鉄鑑及び瓦釘実測図

(真野和夫)

文様は半円彫りにされた倚像、独尊を表わし、右手はあげて施無畏印をとり左手は下げて膝におく。座は宣字座と称されるもので足下両側に向い合った獅子がすわり、座の左右には後足で立ちとびかかるさまの獅子像を配している。さらに周囲を蓮華唐草で荘厳している(図版第三八)。この文様はまったく同様のものが奈良県南法華寺において存在し、同范による製品と推定されている。

今回出土した埴仏は、火中したためか繊細な文様を表現したものにしては胎土が粗く、全体に気泡の入ったものが多い。

基壇南側で採集された埴仏に文字を彫刻したものがあることは先に述べたが、埴仏は下部約1/3を遺存しており、裏面に二行、三字分がみとめられる。文字は針状の鋭利な先端でもって列点状に刺突して描いたもので、三字中二字は判読が困難であり、一字は「光」と読み取れる。祈願文のごときものであろうか。

(真野和夫)

註 (1) 奈良国立博物館監修「天平の地宝」昭和三十六年

須恵器 (第48図1・2)

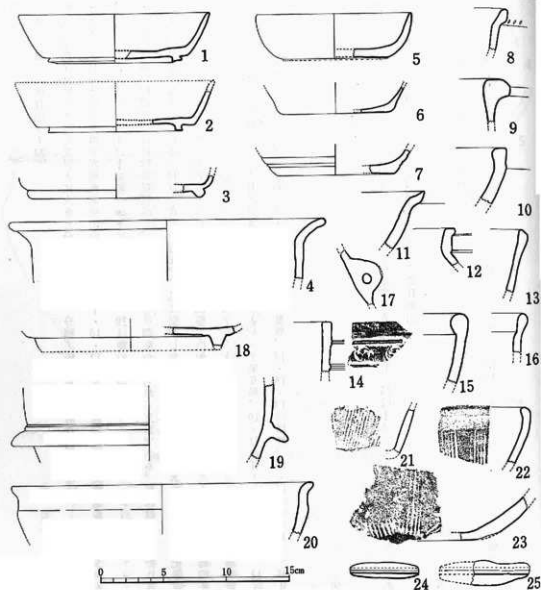
出土した須恵器で形態のわかる須恵器は二点にすぎない。いずれも高台付埴で、1は口径15cm、2は一六cmを測る。高台のつくりやや違いがみられるが、器壁の厚みもほぼ均一に仕上げており時期的にはほとんど差はないとみられる。1は底部外面に×印の刻線がある。出土位置は1がⅥトレンチ中門あたりより、2はⅠトレンチから出土した。

(真野和夫)

土師器 (第48図3・4)

3は高台付碗の一部、4は鉢の口辺部である。ともに刷毛による調整がみられ、全体赤褐色を呈す。北方地区ⅣトレンチⅢ層出土。

(清水宗昭)



第48图 虚空藏寺跡出土土器実測図（1・2 須恵器、3・7 土師器、5~23 瓦器、24・25 土鍾）

瓦 器 (第48図5・23)

瓦器は、須恵系瓦器と土師系瓦器とに大きく分けられるが、分類不能のものもあり明瞭でない。

5・6・8・11は土師系瓦器で赤褐色系統の色調を呈す。7・10・12・20は須恵系瓦器で灰黒色を呈す。5・6・7は坏、8・10・11は鉢の口辺部で、とくに8は上端部1cm下に刻目をもつ。20は甕の口辺部。

9・15・16は甕の口辺部、13は鉢の口辺部で、内外面に刷毛目調整がみられる瓦器である。15は口辺部が折り返しにより、外側へラ、内側刷毛調整がなされている。14は火舎の口辺部で、巴文型押しが細かい突帯の間に並ぶ。17は茶釜の把手、18は高台付瓦器、19は鉢で、羽釜の下面には煤煙の付着がみられ、外面はヘラ調整、内側の羽釜部の継目は指による接合のための圧痕がみられる。21・23は羽鉢である。22は口辺、23は底部で、いずれもかき目は下から上へ、七本単位の櫛による。質は須恵器に近く、鎌倉期に属するであろう。5・6・7はⅦトレンチB区第Ⅲ層、8・9はⅠトレンチ第Ⅱ層、10・21はⅡトレンチ第Ⅱ層、11・12・13・22・23はⅢトレンチ第Ⅲ層、20はⅣトレンチⅡ層、3・4はⅣトレンチⅢ層、14・18・19は塔跡、15・17はⅦトレンチ第Ⅱ層、16はⅤトレンチ第Ⅰ層の出土である。

(清水宗昭)

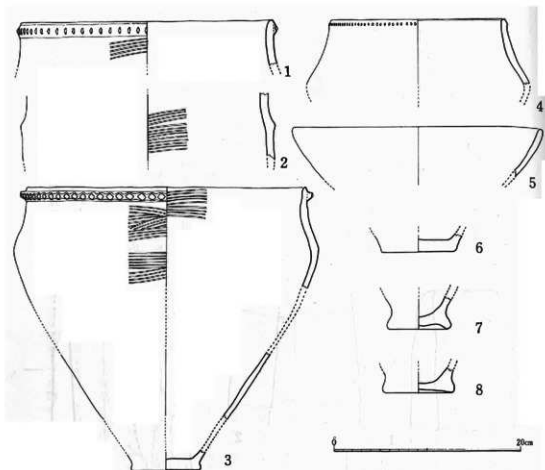
土 鍾 (第48図24・25)

漁網に用いられたと考えられる。24は25にくらべて小型であるが、完形、25はまほどを欠き、成形もいびつである。いずれも粘土巻きつけによる。24はⅦトレンチ、25はⅦトレンチB区第Ⅲ層出土。

(清水宗昭)

夜臼式土器 (図版第一九・第49図)

Ⅶトレンチ(塔跡基壇封土内)、およびⅦトレンチⅢ層より夜臼式土器数点が出土している。1・2はⅣトレンチ出土のものであ



第49図 虚空蔵寺跡出土夜白式土器実測図

る。このうち3によってはば完形をうかがうことが出来る。口縁部わずかに凸帯をめぐらしこれに刻目を施すこと。胴部からくの字に屈曲する癖などこの式通有の特徴をもつが、屈曲点内外とも明瞭な稜をつくらず、ここに凸帯をめぐらすこともしていない。胴部最大径で三二・六cm、口縁部復原径三〇cmを測る。1・2もほぼこれと共通した特徴をもつ。器表面に横がきの条痕文を残し、内側は胴部から下を磨消している。底部は平底、やや不安定な感じをうける。皿盤貼付によるものである。

4以下はⅦトレンチⅢ層出土のものである。4は口縁部に小さく低い凸帯がつく。条痕は磨消している。5は鉢形、復原径二一・四cmをはかる。

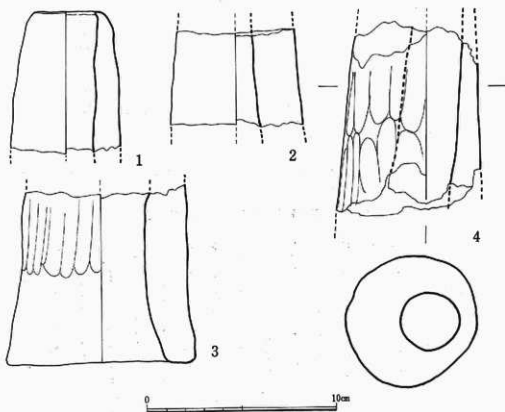
底部（6・8）もいずれも夜臼式に比定してよからうと思われる。7は著しい上げ底をなす。

以上総じて赤褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に粗砂をふくみきわめてもろい焼成である。宇佐市周辺における夜臼式土器の出土は、未だその轆に接しないが、本遺跡の状況からみて、周辺にこの時期の有望な遺跡の所在することは期待してよいだろう。

（後藤宗俊）

轆口・銅鉢（図版第四・第50図1～4）

実測可能な四片のうち、1・2・3は同一個体となる可能性があるが、この3点では復原を躊躇する。このうち1は火口にあたり、先端に銅鉢がこびりつき、赤炭しているが、著しい溶変現象はみられない、灰褐色を呈し、胎土に粗砂をふくむ。全体は手づくねのあと、ヘラであらく整形している。おそ



第50図 虚空蔵寺跡出土轆口実測図

らく棒状の芯に粘土をまき、整形したあと、棒を抜き取ったものであろう。断面完円形を残す4によれば、孔の位置は中心よりかなりずれている。孔の径約二・五cm、三cmを測る。長さは判然としないが、二五cmをくだらないだろうと思われる。この点古代の銚銭司等の遺跡のそれに比しては異型に属し、むしろ中・近世の製鉄跡等で発見されているものに類しているといえる。しかしながら、遺物の出土状態からは、これが寺院に直接附属し、同時期に利用されたものではないにしても、中門南側側溝の埋没の時に流入したものである以上、これを中心・近世のものと考えるのは無理がある。

銅鐸は輪口片とともに、焼土、炭に混って出土したもので、こぶし大のブロック若干がある。

石 器 (第51図)

各トレンチから、少数ながら石器が検出されている。Ⅳトレンチを除いては二次的堆積とみられ、共存関係も明らかでない。

1は小型の縦長剥片を素材として剥片石器である。二次加工が、表面は両長辺ともに、裏面は一長辺のみに施され、ほぼ短冊形に仕上げられている。Ⅰトレンチ第Ⅰ層出土。2は片側を欠くが、ややくり込みの深い石鏃である。二次加工は全面におよび仕上げは入念である。石鏃としては中型に属する。Ⅱトレンチ第Ⅲ層出土。3はエッジに使用による刃こぼれの著しい剥片石器である。打面の両側下に刃潰し様の加工がみられ、先土器時代の台形様石器に酷似する。Ⅲトレンチ第Ⅰ層出土。4は石鏃の未完製品とみられる石器である。先端部の二次加工は両面ともに入念であるが、下半部への二次加工は皆無で、石鏃としての仕上げは、できなかったものと考えられる。おそらく、それは加工の途中において、左下半部が折損したためであろう。5は先端部の一边に細かい使用痕を有す剥片である。全体の稜に手ずれとみられる磨滅が観察される。6も同じく突出部に使用による磨滅がみられる。先端部の断面から、挫錐器としてよりも刺突具としての機能が考えられる剥片石器である。7は一面に押圧剥離をもち、打面もすでに主要剥離面側からの加工によって失われている。4、7はⅣトレンチ第Ⅲ層出土で夜臼式土器に共存する。

(後藤宗俊)

以上の制片石器は、すべて乳灰色を呈す姫島産の黒曜石である。

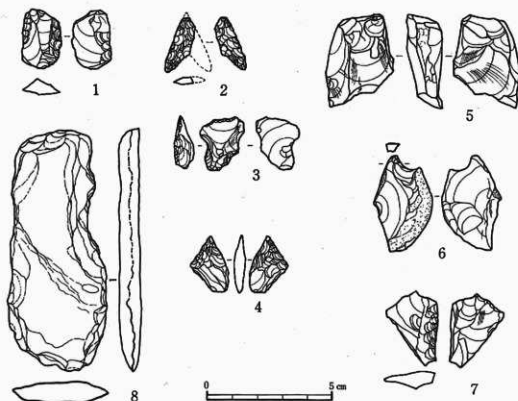
8は小型の扁平打製石斧で、緑泥片岩を石材とする。石質がやや軟質のため全体に磨減がみられ、局部的な使用による擦痕は観察されない。長さ九・五cm、幅四・〇cm、厚さ〇・八cm。Vトレンチ第I層出土。

(清水宗昭)

第6節 考察

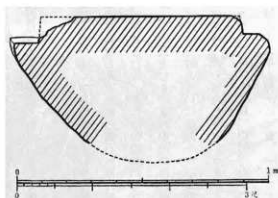
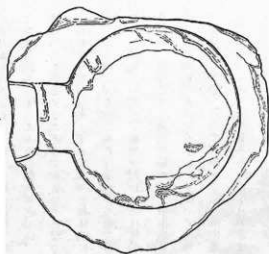
1 遺跡の復原的考察

昭和二十九年の塔跡調査と今回の調査によって存在位置の明らかになった遺構は塔跡、南門跡、中門跡である。寺域の復原には南西から北東に傾斜する地形観察と、塔跡の復原から定められる伽藍南北中軸線の方位決定、塔跡



第51図 虚空蔵寺跡出土石器実測図

と南門跡の距離などを手がかりとしなければならない。ただし今回の調査で最も必要な塔跡周辺の水田を発掘することが許されず、また金堂跡の規模が不明であることは復原的考察にとって最大の障害となっている。すでに昭和二十九年の調査以来、金堂跡が塔跡の東にあたる宅地内に比定されているが、それは塔跡の東宅地内を試掘したところ元形の面違鋸歯文縁複弁七葉軒丸瓦が発見され、他にも瓦が良好な状態で埋没していることを観察できたからであった。さらにこの邸内に円形柱座造出の礎石が保存されていて、おそらく金堂跡に属する礎石であろうと推定された。この礎石は花崗岩製で、表面に径七三cm、高さ七cmの円形柱座造出がある。その一端は巾二六cmの地覆座の表出があり、外側で一〇cm下った二段構成となっている。おそらく外陣中央の扉や敷居を必要とするところに用いられた礎石であろう（図版第二八・第52図参照）。



第52図 虚空蔵寺跡金堂礎石実測図

さて寺域の復原を考えるにあたって、今回南門推定地の南及び塔跡西方の民家地域あたりは地形が段落をもって高くなっているから、寺域の南限及び西限がこれより広がることは考えに

く。また北方地区の水田に設けたトレンチ調査の所見では、Ⅱ、Ⅲトレンチの南端付近でややまとった瓦片の散布状態がみられたが、それより北進するにつれて土層においても境界を劃する溝の如き変化もなく、古代遺物の包含もみられないので、これよりさらに北方に北限を考えることは可能性に乏しい。さらに東限はほとんど宅地化されているので探索することはできなかった。かくして大体の四至を限定することはできるとなった。

次にはさらに一步をすすめてもつと具体的に四至を考定できないものであろうかという段階になる。ここでは先ず塔跡の規模が明らかであるので、これが重要な手がかりとなる。塔跡基壇上にはほとんど全部の礎石が原位置を保っているので、これから得られる建物の一辺長は一八尺、基壇一辺長は三八尺、方位はN三〇度Eとなる。これは伽藍南北の方位に相当する。

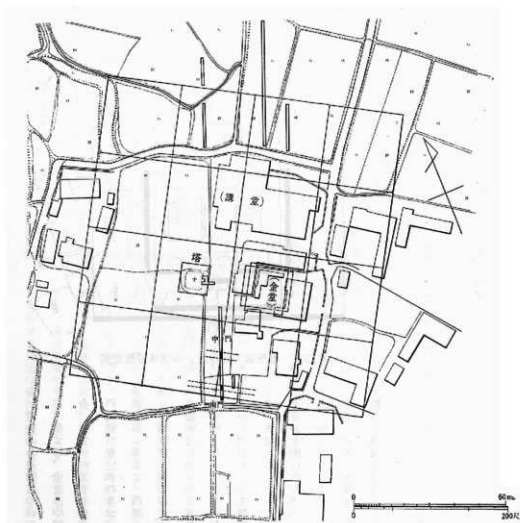
次に塔心礎中心から南門推定地の土壇南端までの距離は一五〇尺となる。また中門の南を劃すると思われる溝の位置も明らかであるので、これらの実測値を手がかりにして一つの目安として法隆寺式あるいは法起寺式の伽藍配置を想定した地割法を適用してみ(1)ると、本遺跡の實際に照して塔跡から南門推定地までの距離が法隆寺式の場合あまりに近すぎる。法起寺式の場合の方がむしろ適当のようである。そこで両配置とも寺域を八等分する方法にしたがってみても、塔、中門、南門の著しい接近は避けがたい。到底塔の中心を通る東西線(すなわち塔、金堂の中心線)を正方形寺域の東西中心線上に一致させることはできない。そこで塔、金堂の中心線を南にずらして、南から二区劃目に据えてみると、講堂は三区劃目に、最北区劃目に僧房、食堂などを想定するとすれば、ほぼ地形や北方地域の発掘所見とも不都合ないようである。かくして想定される寺域は最大四〇〇尺平方内におさめることができ、これを考えることはないのであろうと考えられる。そこで一応の寺域想定を目安をこのあたりにおいて図上に線引きして復原図を作成し、開発から守る範囲を指定した次第である。勿論、将来の発掘調査によって若干の変更あることは十分覚悟しておかなければならないが、先ず寺域の想定範囲が大きくなることはないであらうと考える。建物の正確な位置、規模については今回のようなトレンチ調査で普及することはできない。



基壇瓦積全景



基壇最下段の地覆石列露出状態



第54図 虚空蔵寺跡伽藍復原想定図 (一)

石田茂作「飛鳥奈良時代」(原田淑人編『日本考古学入門』)昭和二五年

石田茂作「法隆寺式伽藍配置について」法隆寺雜記帖 昭和四四年

2 遺物に関する考察

虚空蔵寺跡の出土遺物で注目されるのは、創建時に比定される複弁蓮花文軒丸瓦、法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦の組合せ、加えて新羅系唐草文軒平瓦、鬼瓦、磚仏などで、九州の初期寺院跡の出土品と対比してみても特異な位置を占めている。以下それらについてまとめておこう。

複弁蓮花文軒丸瓦

昭和二九年六月の塔跡発掘調査資料や地元の中尾青樹氏蒐集資料(現在慶応義塾大学文学部蔵)まで含めて検討してみると、軒丸瓦は五種を識別できる。これを対照すると次表のようになる。

	内 区		外 区
	蓮 弁	中房蓮子	
一 類	複弁八葉	1 + 5 + 9	面違鋸歯文
二 類	複弁七葉	1 + 4 + 10 0 + 4 + 10	面違鋸歯文
三 類	複弁八葉 [?]	—	珠文・波線文
四 類	複弁八葉	1 + 6 + 11	珠 文
五 類	單弁一四葉 [?]	1 + 6 [?]	素 文

創建当時に使用された一類及び二類は文様の表現も鋭く彫りも深くしてよく白鳳期の特色を伝えている。とくに周縁に面違鋸歯文を施したのは九州の他地域に類品をみないが、畿内の白鳳期瓦当文様にその源流を求めることができる。大和・川原寺創建時の瓦当文が祖型となるべきものである。この系統瓦は畿内周辺に濃密な分布を示し、東は常陸・新治廃寺までたどることができ、西は虚空蔵寺跡に達している。しかしながら川原寺系軒丸瓦の蓮花文は複弁八葉であって、その意味では第一類がより直系といえる。蓮弁の表出も第二類よりややすぐれた手法を示している。元来円を七等分する技法は幾何学的に考えても容易ではない。第二類瓦当文を詳細

に観察すれば蓮弁の割付けに不均等が認められ、また中房蓮子の配列に二種あったことが知られる。また周縁にみる面違鋸齒文や第三類にみる波線文は畿内の白鳳期瓦当文に多い技法である。しかしながら畿内の白鳳期瓦当文に複弁七葉はほとんど知られていないところからすれば、第二類の出現は虚空蔵寺建立に伴う創作かとも思われるが断定することは未だ躊躇される。九州地方では筑後地方の百済系単弁軒丸瓦に七葉表出のものがあり、山陽道でも安芸・横見陽寺の素弁軒丸瓦、備後・岡道跡の複弁軒丸瓦などに七葉表出のものがあるので、他地域においてすでに成立していたものが及んできた可能性も考えられるからである。

第一類はその後外区に珠文、波線文を施す第三類を経過して珠文縁の第四類に推移したと思われる。また第二類は単弁化して弁数が倍数になる第五類に推移したと思われる。珠文縁の出現は法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦における珠文縁の形成をも参考して、八世紀中頃あたりかと考えられる。

法隆寺系忍冬唐草文軒丸瓦

複弁蓮花文軒丸瓦と組合せて使用されたのは法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦であった。この種瓦がとく

に宇佐地方の寺院跡に専用されたことはこれまでに述べてきた。⁽⁶⁾そして瓦当文の変遷から九種に分類することができた。このうち、虚空蔵寺跡で発見されているのは第一・五・八類である。天平期に比定される第四類が宇佐・赤勘寺跡や豊後国分寺跡から発見されているので、第五・八類はそれよりはさかのぼらない。虚空蔵寺跡における法隆寺系軒平瓦の最新型式は第八類であるから、これはまた遺跡廃滅の時期をも示している。おそらく平安時代に下してもその前期よりは下らないであろう。これはまた複弁軒丸瓦の年代観とも大きくいちがうことはない。

新羅系唐草文軒平瓦

豊前地域に集中的に発見される新羅系唐草文軒平瓦についてはまとめて述べたことがあるので再説しないが、虚空蔵寺跡に出土するものは豊前・天合寺跡のものとならんで最古型式に位置づけられる。出土量はきわめて少く、塔跡にのみ発見されるところから上流をなすものでなかったことが知られる。創建時から使用されていたと思われるが、これと組みあうべき新羅系軒丸瓦が発見されないこと、また軒平瓦の形成が法隆寺系軒平瓦第一類のそれとよく似ていること（撫で顔で、瓦当面が狭長であ



接面状態による埋込 針孔瓦出土状況

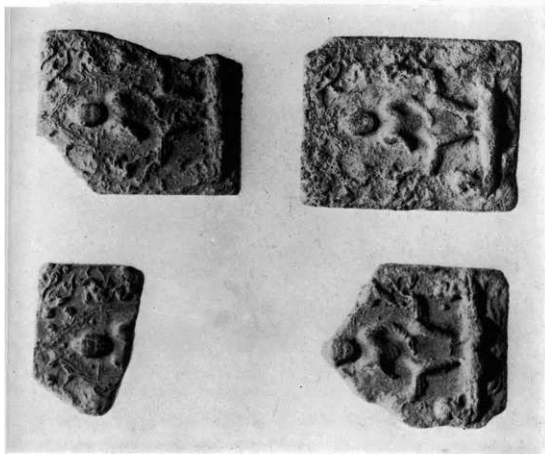


金銀灰埋による針孔瓦出土状況



（高さ27cm）

（約実大）



る）などから、創建時の複弁軒瓦瓦に対して法隆寺系軒平瓦とならんで使用されたことがうかがわれる。反転する蔓草に子葉や花を付した単位をくりかえし連続してゆくのがこの種瓦当文様の特徴であり、おそらく六単位くらい連続して瓦当面を構成していたのであろう。

鬼瓦 寺跡の北方から発見されたと伝えられる鬼瓦完形品が中尾青樹氏のもとに蒐集されていた。鼠色の堅固な焼成で、高さ二七cm、左右巾二三―二九cmの方形に近い小形のものである。太宰府地方に多い憤怒相鬼面文をあらわしている。⁽⁸⁾ 太宰府地方のものの踏みかえしかと思われるほど近似しているが、やや迫力に欠ける憾みがある。珠文縁の外側にさらに素縁帯を加えて全体を大きくしている。太宰府地方の鬼瓦は大小二種あり、釘穴は鬼面の眉間にあけられており、頂部は半円形に一段うすくつくられている。頂部に鳥雲をはめこむための装飾と思われる。本例では頂部の装飾なく、怒髪を延長させて、ここに釘穴をしつらえている。本例が太宰府系鬼面瓦であることは説明を加うるまでもないが、やや変化がみられる点で、創建時までさかのぼせるのか、奈良時代まで下すべきであるのかきめがたい（第57図）。

埴仏 虚空蔵寺跡を著名にしたのは塔跡における埴仏の発見である。昭和二九年の調査では五六個の残欠が心礎から四天柱礎のあたりまで発見されているので、壁面に装貼されていたと思われる。⁽⁹⁾ 今回の調査に際してもかなりの数の残片が採集されているので、創建当時はかなりの数の埴仏が装貼されて荘嚴の気をただよわせていたであろう。完形資料は中尾青樹氏蒐集品にあり、六・四×五・七cm、厚八mmを測る（第57図）。土板の表面には半肉彫りの椅座独尊仏が浮彫りされている。右手を施無畏に挙げ、左手を膝におく如来像が宣字座に腰掛け、足下両端には獅子がうずくまり、後屏には唐草文を飾り、さらに左右には後脚で立つ獅子をあらわす。上方左右には飛雲・蓮花を配している。これと同構成のものが大和高市郡・南法華寺の境内から出土しており、銀泥彩色を施したものもある。⁽¹⁰⁾ 両者は大きさから彫面の細部にいたるまで一致していて同范品であることが知られている。元來埴仏には三尊仏と独尊仏の二種あり、一般に前者は厨子に納めて礼拝され、後者は室内壁面にはめこんで室内を荘嚴にする意図のもとに製作されたと

考えられている。虚空蔵寺の場合はまさに後者に属するものであった。これまでに知られている確実なるわが国における埴仏出土地を府県別にあげれば奈良一〇、大阪一、京都一、兵庫一、三重四、滋賀一、福井一、広島一、鳥取一、長野一、神奈川一、福島一、大分一となつて分布の中心は畿内とその近傍にある。九州における埴仏の発見は虚空蔵寺跡のみであり、また大和・南法華寺のものと同范品であることなど、きわめて特異な存在であると共に、畿内との密接な交渉を物語るものである。わが国の埴仏を分析した久野健氏によれば、天智朝後半から天武朝頃に一段と成熟した唐代美術の影響が埴仏の上にもあらわれ、自由な写実的表現をとることが指摘されている。また南法華寺が文武天皇の大宝三年（七〇三）に建立されたと伝えられる点は参考になる。虚空蔵寺塔の礎面に埴仏を装貼した時期は七世紀末頃よりさかのほらないのではないかと思われる。

（小田富士雄）

註 (1) 奈良国立文化財研究所編『弘福寺—川原寺発掘調査報告』昭和三五年

(2) 高井佛三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』昭和一九年

(3) 小田富士雄『百済系卑弁軒丸瓦考』史淵九五輯 昭和四一年

(4) 広島県教育委員会編『安芸横見廃寺の調査』昭和四七年

(5) 岡遺跡発掘調査団編『岡遺跡発掘調査報告書』昭和四七年

(6) 小田富士雄『九州に於ける法隆寺系宇瓦の展開』九州考古学3・4 昭和三三年

(7) 小田富士雄『豊前に於ける新羅系古瓦とその意義』史淵第八五輯 昭和三六年

(8) 小田富士雄『九州に於ける大宰府系古瓦の展開』九州考古学13 昭和三六年

(9) 賀川光夫『虚空蔵寺址発見埴仏』大分県地方史1 昭和二九年

(10) 文化財保護委員会編『埋蔵文化財要覧』一三二—四頁 昭和三四年

(11) 奈良国立博物館監修『天平の地宝』二四〇・二四一・二七二 昭和三六年

(12) 久野健『出土の仏像』新版考古学講座8 昭和四六年、「高松塚古墳壁面の周辺—白鳳文化の重層性」高松塚古墳と飛鳥
昭和四七年

第四章 総括

— 宇佐古代寺院の性格 —

地方古代寺院跡のなかでも創建年時が奈良時代以前にさかのぼるものは、その地方におけるはじめて出現した寺院として特に注目されている。そしてその遺跡もさして多くない。宇佐地方は古くから畿内系の文化が流入したところで、仏教文化においても例外でないが、古代において七堂伽藍を備えた寺院を建立することは莫大な経費を要するものであり、今日では最大の地方豪族であった郡司クラスの人々が主体となって建立した場合の多いことも指摘されるにいたった。(1)九州地方においても七・八世紀代に建立された寺院跡のうち、信拠すべき記録などによって成立事情の知られる官立寺院をのぞけば、その分布は郡一寺的様相を示していて、豪族の氏寺的要素の大きいことをうかがうに足る。

宇佐地方においては七世紀代にさかのぼって法鏡寺・虚空蔵寺の二寺跡があり、瓦塚（四日市廃寺）については未だ確証を得ないが、八世紀に下っては宇佐神宮境内に弥勒寺の建立があった。このような一郡内における伽藍建立の密度は他地域にくらべてもきわめて高いものといえることができる。

法鏡寺、虚空蔵寺に関する七・八世紀代の記録はすでに失われていて創立の事情などを知ることができないが、諸書に引用された後世に属する記録や伝承はある。

法鏡寺については『太宰管内志』豊前之十一、法鏡寺の項に、

（修理所証文）に 彦山ノ法華法鏡寺之華嚴以下有御供奉ニ不レ血剣刃ニ忍辱人慈令ニ降伏ニ給日本安全成事当社之御徳法華華嚴之加護也爲ニ其報謝ニ造ニ進法鏡寺ニ也其後神龜元年甲子聖武天皇之御世因ニ御託宣ニ天平十六甲申初行ニ放生会ニ於ニ此神事ニ獅子頭ニ頭、同

口付ノ放生陀羅尼ハ法鏡寺之所レ動也……(下略)

また虚空蔵寺についても同書、豊前之十一、虚空蔵寺の項に、

〔建武年中宇佐宮放生会記〕に云、通御干頓宮、樂人吹、則奉鎮之次宮司已下諸官暫休、息屋形、次虚空蔵寺山本、

寺獅子二頭云、(豊饒等鳴録五卷)に法蓮和尚者云、承仁聞菩薩欽讃、抵御許山、行剃度授戒之事、又居山本鄉、被奉虚空蔵、

とあり、宇佐郡山本村虚空蔵寺は黄檗派ノ寺にして宇佐町の西南にあり此寺に仁聞菩薩自作の虚空蔵菩薩又自ノ像あり皆秘仏なり、

とあって、ともに宇佐神宮の行事と密接な関係を保ち、法蓮和尚を開基とする伝承がつきまとっている。法蓮については『桃日本紀』中に二つの記載がある。

大室三年(七〇三)九月癸丑、施僧法蓮豊前国野四十町、養医術也、

養老五年(七二二)六月戊寅、詔曰沙門法蓮、心住禪枝、行居法果、尤精医術、濟治民苦、善哉、若人、何不褒賞、其

僧三等以上親、賜字佐君姓、

法蓮は宇佐一族の出自であり、豊前地方を中心に七世紀末から宗教活動・医療活動につとめていたことが知られる。すなわち宇佐氏一族は法蓮に代表される仏教文化の移植に大きな関心を示していたことがうかがわれる。その事実が後世この地方の古寺院に法蓮と結びつける伝承をのこすこととなったのであろう。

法鏡寺、虚空蔵寺の遺跡が示すところは共に平安時に下ってまもなく廃滅したことを示している。『太宰管内志』に記された内容は中世までさかのぼる記録であるから、その後に古伝承などに拠って法燈を起したものであろう。虚空蔵寺跡の西南丘陵上に現存する虚空蔵寺は管内誌に記された寺であり、虚空蔵菩薩や仁聞像など数体の木彫像が現存する(図版第二八参照)。この菩薩像は一木造で後世の造形があるが平安時代の作といわれており、これに拠るならば建立は平安時代にまでさかのぼることとなるので、虚空蔵寺跡との時間的空白は著しく短縮されて両者の接近はより真实性を帯びてくることとなる。現虚空蔵寺は近世には国分寺とも称し

たことが『豊前志』十之卷にみえていて、小笠原領掌時代には厚い保護を蒙っていたことが察せられる。

古代の宇佐地方における宗教活動が宇佐八幡宮の構成と密接な関係にあったことはすでに周知のことであり、八幡宮を代表する大神氏、宇佐氏、辛嶋氏らの対応関係、さらには確執の歴史ともかわりあっている。⁽²⁾法鏡寺跡は辛嶋郷にあり、虚空蔵寺跡は葛原郷にあたる。ただし、葛原郷は辛嶋郷の分郷であるともいわれる。⁽³⁾辛嶋郷はおそらく帰化族辛嶋氏の居住本貫地であろう。虚空蔵寺は「因達寺」の遺体であるという『大字佐郡史論』(一七三頁)の説以来中野権能氏にも継承されており。⁽⁴⁾宇佐因達との関連を推察している。近世の所伝に岡寺とも大神比義を権越とし、法蓮を開基とすることが流布しているのは宇佐八幡神の形成に功勞あつた大宮司大神氏の權威に仮託したものではあるまいか。

ともかく、法鏡寺跡創建における百済系軒瓦の採用、虚空蔵寺跡における新羅系軒平瓦の検出などには豊前地方に広く分布する半島系氏族をいまだく郡民の存在を背景に考えることによって理解することができるが、⁽⁵⁾またそれらと辛嶋氏の交渉も十分に考えられるところである。宇佐地方の初期仏教は、考古学的資料に拠るかぎり、岡寺跡とも畿内法隆寺系の文物の移植によって開始されたが、法鏡寺跡には百済系要素との交流を強く認めることができ、虚空蔵寺跡には畿内系要素を最も強く認めることができる。九州他地域にも類品をみないような大和・南法華寺出土の埴仏と同范の埴仏が数多く搬入されていることはいかなる否定をもしえない強い畿内との紐帯関係物を語っている。律令国家的裏付けをもつ新来の畿内系仏教を受容しながら、旧来の在地的性格の強い半島系仏教との融和をはかって成立したものが宇佐の初期寺院文化であつたと思われる。

(小田富士雄)

註 (1) 小田富士雄「地方寺院の存在形態」古代の日本 9 昭和四六年

(2) 小田富士雄「宇佐弥勒神宮寺成立の背景」大分県文化財調査報告書第七輯 昭和三六年

(3) 小野精一「大字佐郡史論」七一―二頁 昭和四七年(復刻版)

- (4) 中野暢能『八幡信仰史の研究』五二二頁 昭和四二年
- (5) 小田富士雄『嬬化人文化と太宰府』古代の日本3 昭和四五年

あ　と　が　き

昭和四五年度、四六年度と相ついで実施した宇佐市所在の法鏡寺跡、虚空蔵寺跡、緊急発掘調査の調査報告書を、このように刊行することができました。

阿邊跡とも九州に数少ない白鳳時代の時院跡であり、古代宇佐文化の諸問題を解明するうえでもはかり知れない価値をもつ遺跡です。従って調査の計画も、遺跡全域を開発の手から守るということに重点をおき、寺域確認を主たる目的として策定しました。以来当面する開場整備事業による破壊に対しては、一応の対応が出来たと思います。

しかしながら将来にわたって、あらゆる開発の波から、この広汎な寺域を守ることが容易なことではなく、なお多くの課題が山積しています。

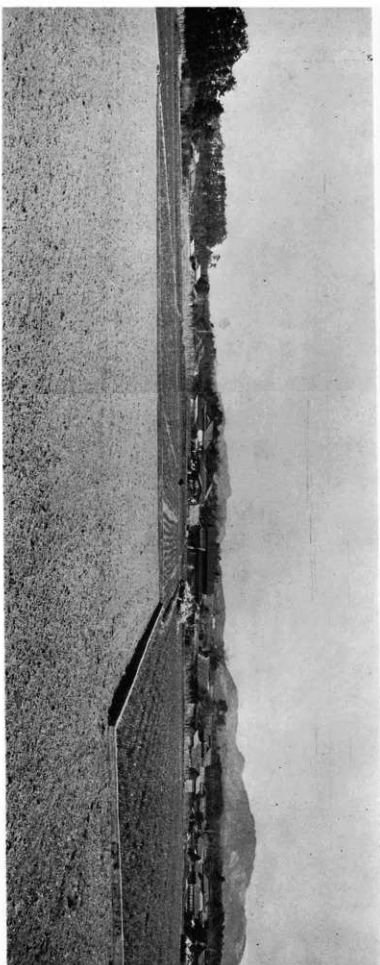
千数百年のあいだ、あらゆる開発からまぬがれ、われわれの時代に生き延びて来た文化財は、今、民族の歴史がかつて経験したことのない大規模な開発の前にさらされています。これら貴重な文化財を水く子孫に継承する任務と使命をあらためて認識しつつ、この冊子を出版する次第です。

昭和四八年三月三一日

大分県教育庁文化課長

矢　野　朔　雄

法鏡寺跡遺跡図版



基壇北側の瓦出土状態と隣に覆われた西側の状態





基壇北側全景（東方より）



基壇北側全景（西方より）

基壇北側の瓦出土状態





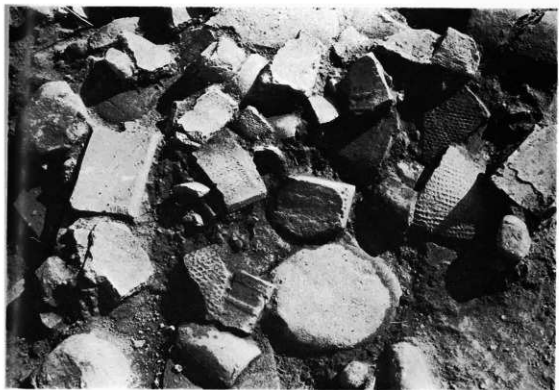
西方よりみた瓦の出土状態



北方よりみた瓦の出土状態



中央部瓦出土状態



埴出土状態



複弁六葉軒丸瓦出土状態



単弁八葉軒丸瓦(左)・複弁六葉軒丸瓦(右)出土状態

図版第八 法鏡寺跡(八)
イトレンチ版築状態(金堂北側)



金堂地区
イトレンチ南側版築状態(金堂南側)



Vトレンチ版築状態(金堂東側)







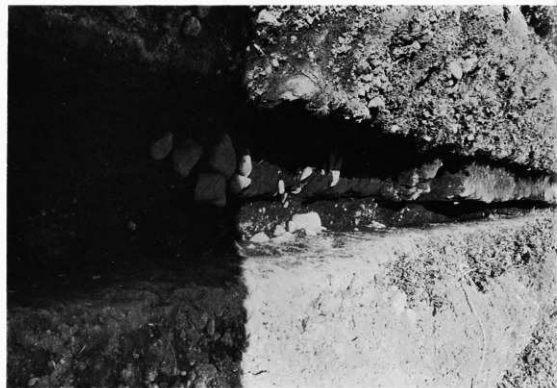
東北より



基壇西北部地覆石



ツレツレ (西方より)



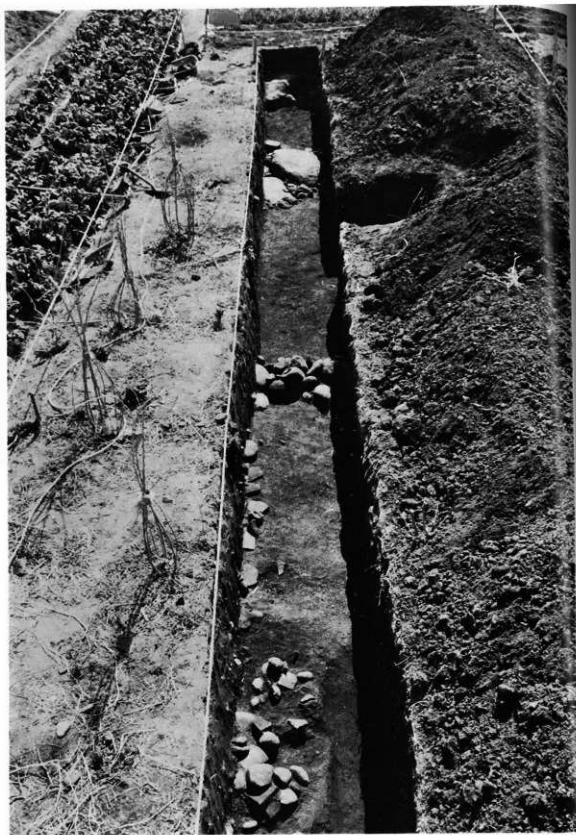
ツレツレ (東方より)

又トノノチ (西方より)



又トノノチ (東方より)

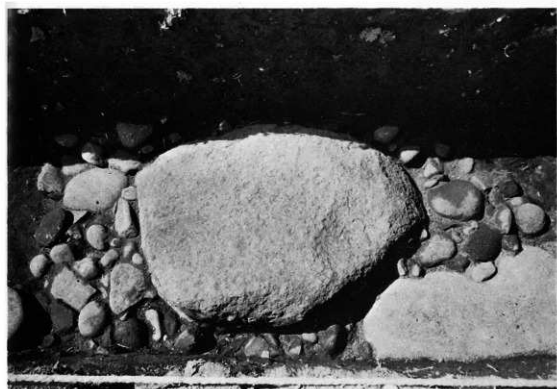




XII トレンチ全景 (北方より)



礎石全景



礎石と根締め石

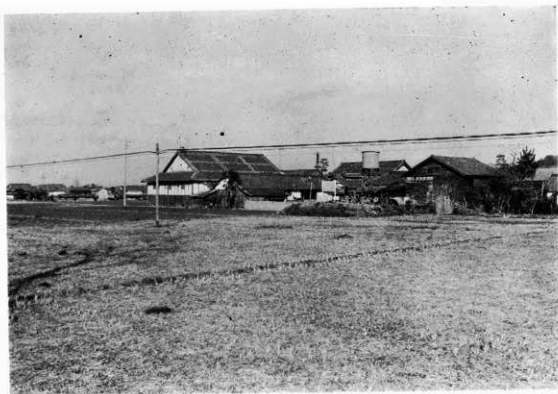


上・南西より
下・トレンチ(北方より)

虚空藏寺跡遺跡 図版



南方より望む



塔基礎跡(西南方より)





塔跡出土土器

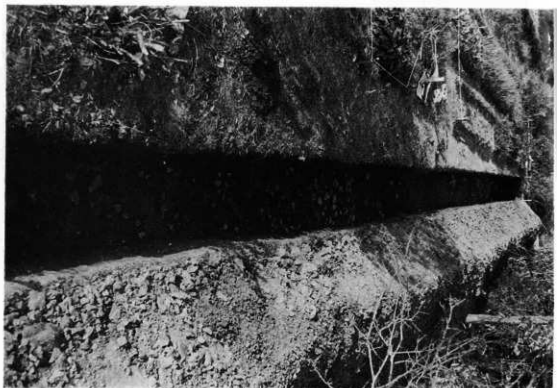


塔跡出土土器





瓦トシチ軒瓦出土状態



瓦トシチ北側部分



上 竈口出土状態
下 軒丸瓦・軒平瓦出土状態

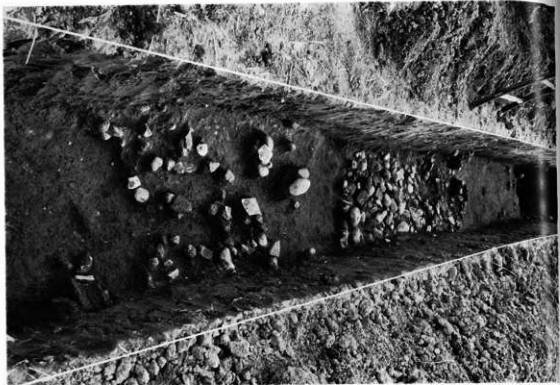


図 版 第 二 二 虚 空 藏 寺 跡 (七)

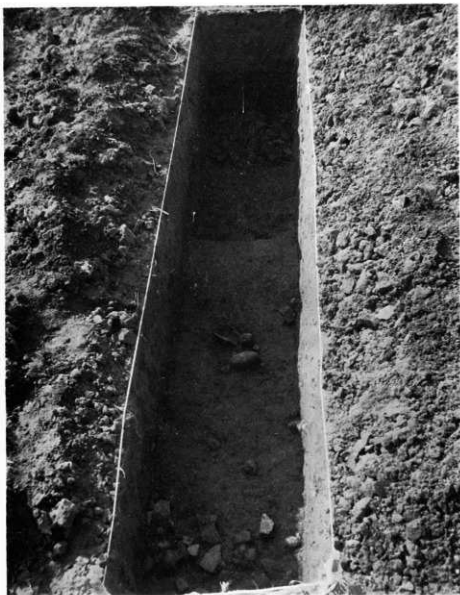


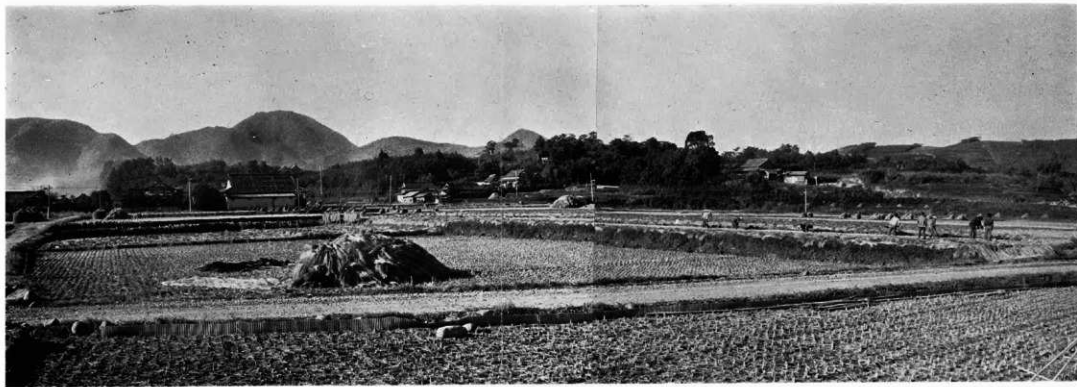
図版第二三 虚空蔵寺跡(八) 南門地区

上 VIトレンチ南側部分(南方より)
下 VIトレンチ南端の溝

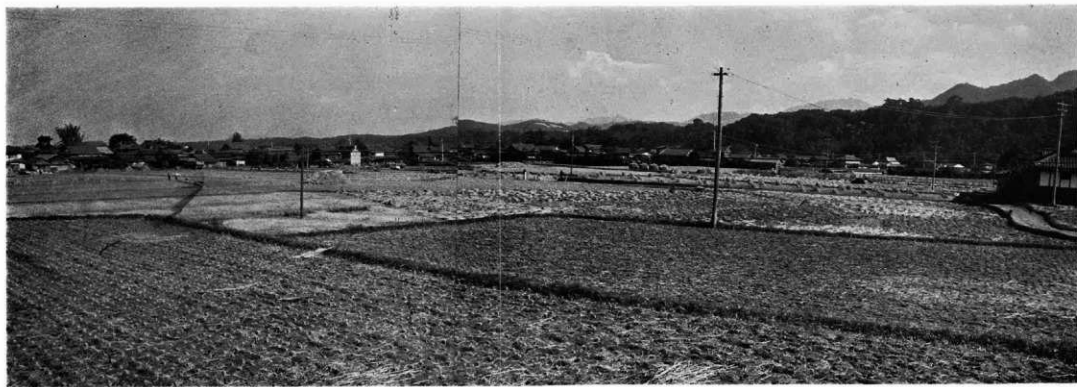


上 IXトレンチ全景（北方より）
下 岡・南端の溝



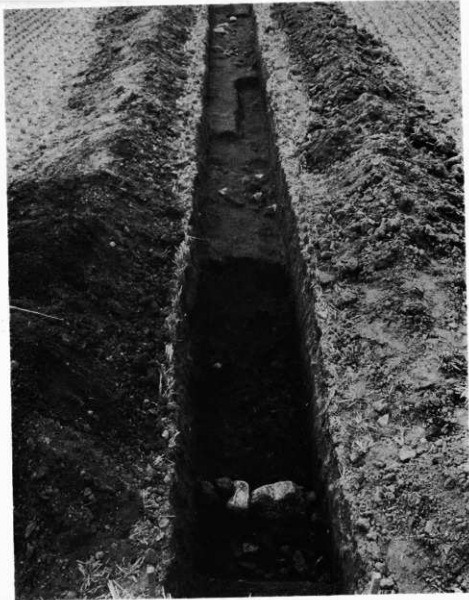


北方より望む



西方より望む

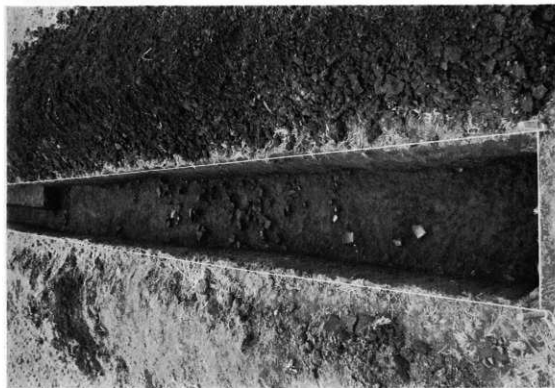
上 イトレンチ溝および石組（北方より）
下同（東方より）



イトリツマ (測方より)



イトリツマ (測方より)





虚空蔵寺に現存する仏像群



金堂跡礎石

(佐藤晃和氏邸内)

法鏡寺跡
虛空藏寺跡

遺物図版

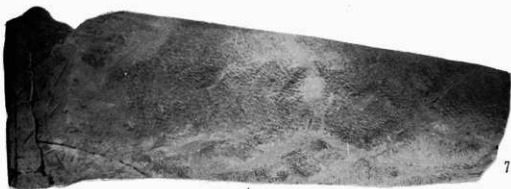




7



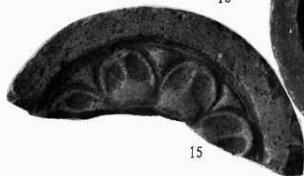
5



7



5





20



18



19



17



22



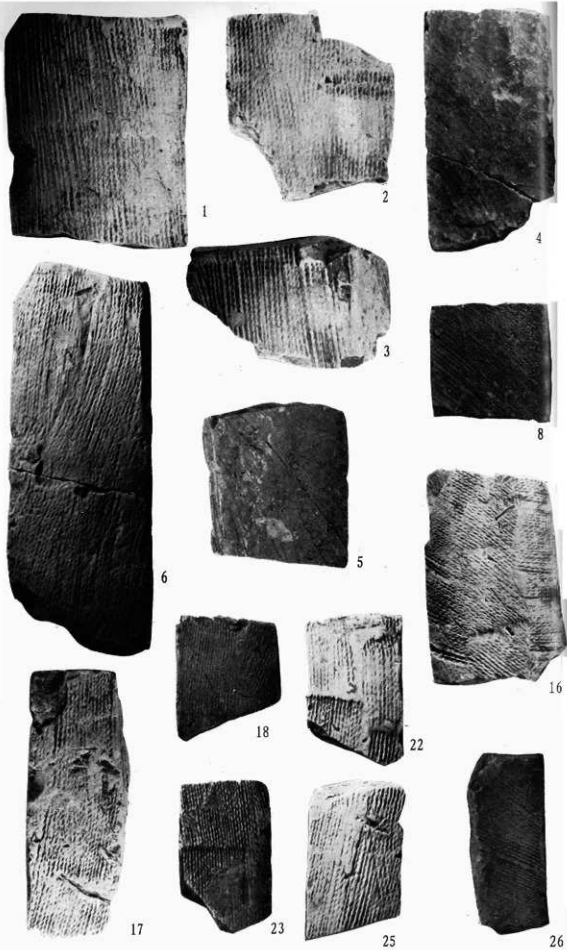
鬼瓦

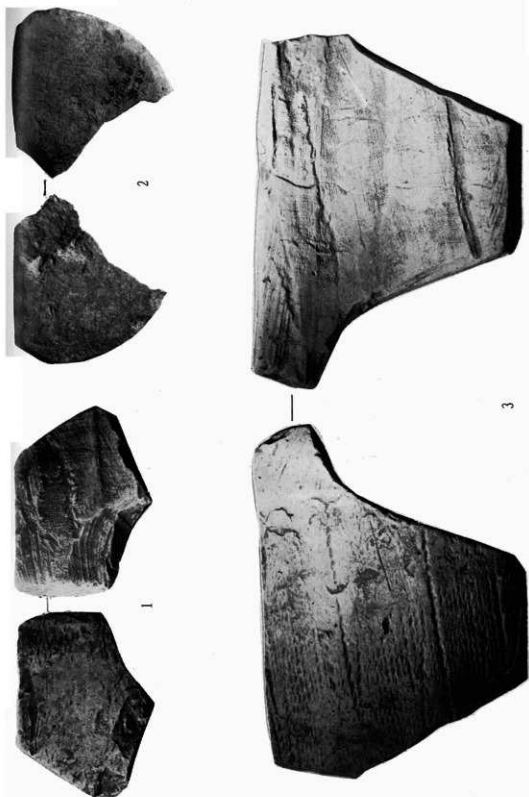


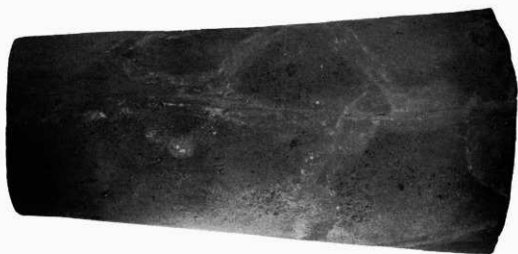
(22-6)



文字瓦
(22-7)





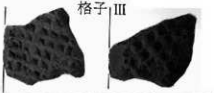




格子 I・01



格子 II・04



格子 III



格子 IV・05



格子 V



平行線



平行線



かき目

I・02



II・01



I・04



II・04

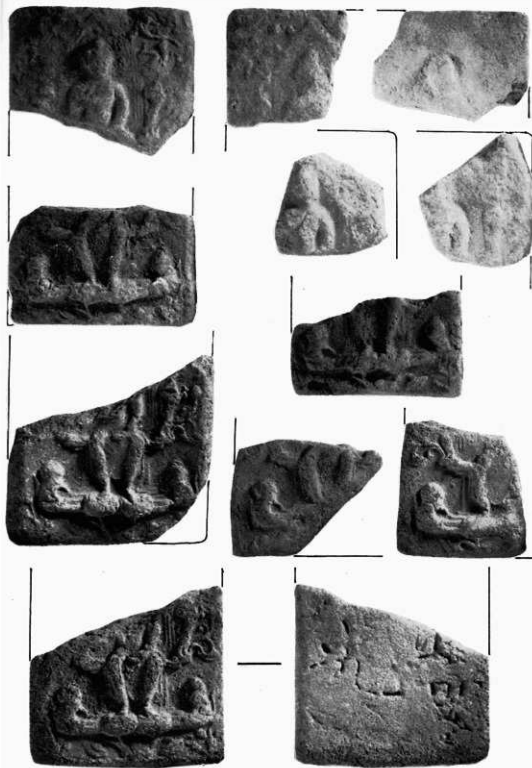


I・05



II・03







1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13







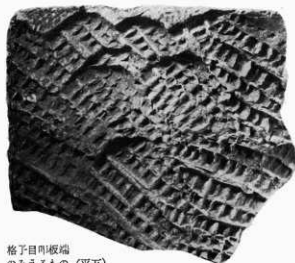
同心円印
(平瓦)



格子目すり消し (丸瓦)



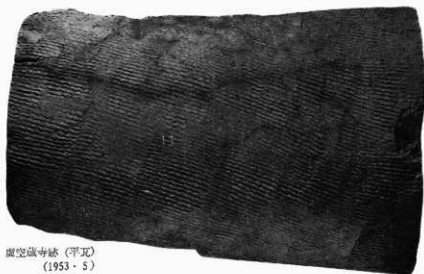
縄目すり消し
(丸瓦)



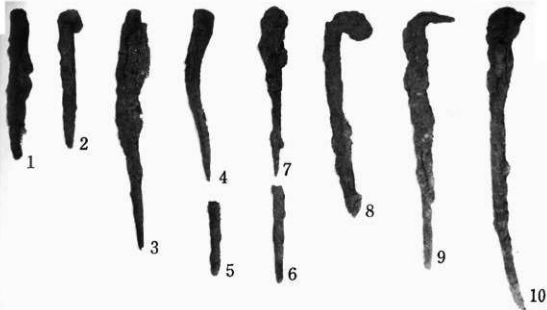
格子目板端
のみえるもの (平瓦)



釘穴
(丸瓦)

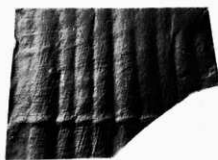
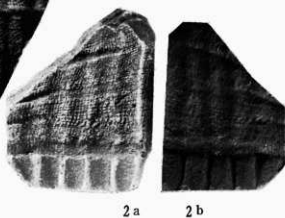
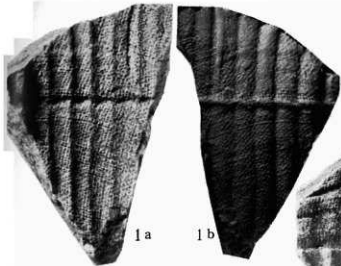


虚空藏寺跡 (平瓦)
(1953・5)



- 1、粘土輪積痕
- 2、粘土重ね目痕、側縁切り割り
(格子目IV類平瓦)
- 3、側縁切り割り、布合せ痕、模骨露呈
(格子目IV類丸瓦)







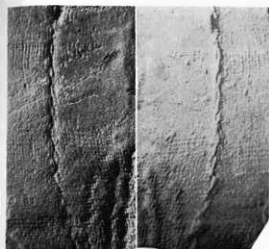
1 a



1 b



2



1 a

1 b



2 a

2 b

3 a

3 b



4 a

4 b

5 a

5 b





1 a



1 b

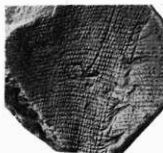
2 a

2 b



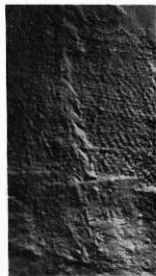
3 a

3 b



4 a

4 b



布の重ね痕

法鏡寺跡



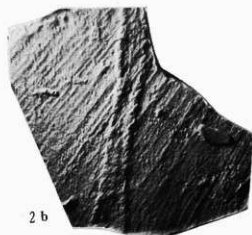
1 a



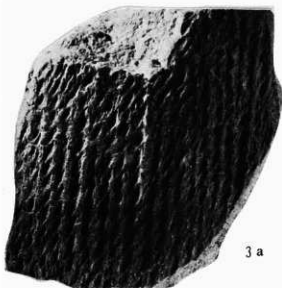
1 b



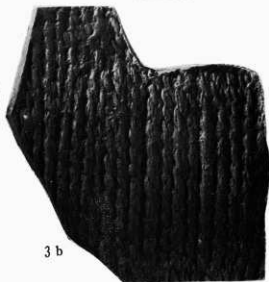
2 a



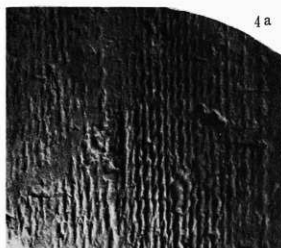
2 b



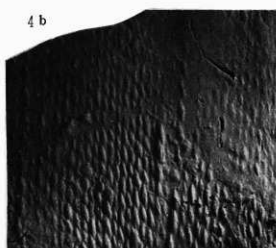
3 a



3 b



4 a



4 b

法鏡寺跡・虚空蔵寺跡

—大分県宇佐市における古代寺院跡の調査—

大分県文化財調査報告 第26輯

昭和48年3月31日

発 行 大 分 県 教 育 委 員 会

宇佐市大字長洲597

印刷所 明 治 印 刷 株 式 会 社

